

「江戸ッ兒、江戸ッ子、眞にその通り、斯う見えたつて、鏝は江戸ッ子のキチャノ／＼なん
でけす、片くれはお情けねえ」

「チャキでもキチャでもそれはかまはんが、貴様と雖も、苟も江戸に生れ、三百年來直接
に徳川のお蔭を蒙つて今日にありついでゐる一人だらう」

「いや、いよく事重大になりけり、左様に、四角張つて戸籍調べを遊ばすまでもなく
鏝と雖も三百年來の江戸の土虫、まさにその通りでないと誰が申しました」

「よし、まさに、その通りとしたら、もし、こゝに、假りに徳川の天下が亡びて、この江
戸中が灰になつてしまつたら、どうする」

「いや、こいつは、また、事重大を過ぎて、當に、破滅の時代とはなりにけり、公方様の
天下が亡びて、江戸中が灰になる……鏝なんぞは左様なことは考へたこともございませ
ん考へることも出来ませんな、で、ございますから、これはつかりは御返事の限りではござ
いせん——七里けつばい」

「假りにだな——藤原とか長州とかいふ田舎侍がやつて來て、此の徳川の天下を覆へし、

江戸中へ火を放けて焼く、さういふ曉になつたら、貴様も江戸ッ子の一人として、どうい
ふ進退をするか、それをためしに一つ聞いて置きたい」

「鏝なんぞを捕まへて、さういふ試験地獄におかけ遊ばすのは罪でございますよ」

「罪と罪でないに拘らず、現在、目の前にさういふ時勢が現はれて來たとしたら、何と
身の振り方をつけるか、それを聞かしてもらひてえ」

「お許し、さういふ重大な問題は全く以て鏝の頭では荷ひきれません」

「返答が出来ないのか」

「どうか、御免を蒙ります、もつと、やさしい、鏝は鏝相當のところ、一年生で一つ試
験問題の御下問が願えてえもんで……」

「試験ではない、實際問題なんだ、自分の目の前に即刻現はれた問題として返事をして見
ろといふことなんだ、むづかしくとる心要はない、たとへば、安政の大地震の時のやうに
だ、今度は地震ではなく外敵が不意に押しかけて來たとしたら、貴様は、どう身の振り方
をつけるか、それを端的に返事をして見ろといふだけのものだ」

「地震でげすか、地震と来ちやあ、鏝は最も虫が好かねえんでげすが、さりとて、それ御さんなれと、鏝兜で餘退治に出動といふ勇氣はごさんせん、まづ、何を置いても、三十六計逃げるに越したことはございませぬ、逃げるには、竹藪の方へ逃げた方が宜しいと教へられて居りますんでございませぬが……」

「さうか、地震なら逃げ出す、さうして、もしそれが敵だつたらどうだ、この江戸を仇となすやつが他國から押寄せて来た日には……いや、やつぱり逆戻りだ、考へて見ると鏝、貴様には荷が勝ち過ぎた試験だ」

八八

「落第でげすか」

「落第といふものは、兎も角、試験をうけて上の事だが、貴様のは落第にも至らない……先づ低能だ」

「ナ、ナンとおつしやりました」

「低能だよ」

「低能——低能と申しますと、まづ一人前に通用しない、馬鹿といった異名でございますね、さうおつしやられちやあ、鏝もあとへ引けません」

「怒つたな」

「怒りました、人間、低能呼ばはりをして、怒らない馬鹿はありません、怒りました、眞に怒りました」

「さうだ、低能と云はれて憤りを發した貴様は、まだ脈がある」

「脈どころぢやございませぬ、この通り、肝臓玉が破裂致しました、さあ、かうなつた以上は、矢でも鐵砲でも持つてゐらつしやい、殿様のお出しなさる試験を立派に受けて御覽に入れます、試験地獄の突破」

「頼もしい、その意氣、さて、貴様もいよ／＼江戸が灰になるといふ時分に、その意氣と憤りを發して、節を屈せずといふ勇氣があればめでたいもんだが、いざとなるとさうは參るまい、麻雀がはやれば麻雀、競馬がはやれば競馬、貧窮組が盛んな時は貧窮組に走り、

公武合體といふ時節には公武合體へおべつか——貴様なんぞは、それで生きて行けばいいんだ、だが三百年來の徳川の旗本となつて見ると、瘡せても枯れてもさうは行かないからな……」

「上げたり、下げたりもいゝ加減になさい、いかに、鏝の面がいびつになりたてにしてからが、それぢやあんまりお言葉が過ぎます、そこまでお見限りでは、鏝は泣きます、口惜しい」

「いゝよゝゝ、さう昂奮すると、劍にさわる、退屈まぎれに貴様に試験をかけたままで、試験問題一切、水に流すから、心配するな、さうして、もうそんな七むづかしい問答はやめてもつと面白い、貴様のおはこの陽氣なやつを喋れ……今度は、おれが聞き役になつてやる」

斯く和められて、本來、おつちこちよいの鏝は忽ちケロリとして、

「では一つ、洋妾立國論オウヤクテリクワニ以來の鏝獨創の名趣向をお聞きに入れますか——聞かしてくれ」

「では、一つ、その洋妾立國論以來の……」

「洋妾立國論は、貴様の身上としては、なか／＼聞ける説だよ」

「共鳴にあづかつて恐悦……すべて、議論といふやつは、知己を待つてはじめて云ふべきでげして」

「洋妾立國論には相當に信者が出来たか」

「出来た段ぢやございませぬ、今や信仰の域を過ぎて實行の境にまで漕ぎつけてゐるんでございまして……」

鏝は、己れの日頃の持論である「洋妾立國論」を神尾から擲論されて却つて、得意満々の色を見せました。彼の珍論、「洋妾立國論」なるものは、本小説第十四册三三〇頁から三三三頁までのところを見るとよくわかるが、その要領は次の如きものです、

「現に相州の生麥村に於て、薩摩つぼうが無禮者 てんで毛唐を二人か二人半斬つたは宜しいが、その代りに見す／＼四十四万兩てえ血の出る大金を異國へ罰金として納め込みにやなりません、長州の菜ッ葉隊が下の關で毛唐の船と打ち合ひをして、日本の贖つ玉を見

せたなんぞと、おつしやりますが、その尻は、ドコへ廻つて来りませう皆んな徳川家の政
府がこのせち辛い政治のお臺所から、血の出るやうな罰金として毛唐奴に納めなきやなら
ねえ次第でゲス——そこへ行きますてえと、何と云つてもエライのは日本の絹とラシヤメ
ンでゲスよ、日本の絹糸は、ドシ／＼毛唐に捌けて、こちらへ逆にお寶を吸ひ取つて来る
それからラシヤメンでゲス、ラシヤメンといふと、汚ないやうな名でゲスが、名を捨て、
實を取るといふのがあの軍法でゲシてな」
而して、鏝の所謂「ラシヤメン立國論」なるものは、つまり次のやうな論法になるのであ
る。

露をだに厭ふ大和の女郎花、降るあめりかに袖は濡らさじ——なんてのは、ありや、のぼ
せ者が作つた小説でゲス、

拙が、神奈川の神風樓に就いて實地に調べて見たところによると、その跡方は空をつかむ
が如しあれは何か爲にする處のある奴がこしらへた小説でゲス。

事實は大和の女郎花の中にも、袖を濡らしたがつてゐるのがうんとゐる、毛唐の奴め、女

にかけては全く甘いもので、たつた一晚にしてからが、銀三枚がトコは必ず出す、月決といふ事になるてえと十兩は安いところ、玉によつては廿兩位はサラ／＼と出す、そこで假りに日本の女が一萬人だけラシヤメンになつたと見積つてごろうじろ、月廿兩づゝ稼いで一年の二百四十兩の一萬人として年分二百四十萬兩といふのが日本の國へ轉がり込む、これがお前さん、資本要らずでゲスから太したもんでゲサア
得意満面で、此の種の持論を唱へてゐる鏝公は、さて改めて、何の獨創的珍趣向を持ち出すか。

八九

この鏝といふおつちよこちよいは、實の名は金助であるか、貴様のやうな奴に金は過ぎる鏝で結構といはれて、その名に納まつてゐる人間である。

鏝は今「ラシヤメン立國論」の持論が、かねて心ある人を傾聴(?)させてゐることを得意としてゐたが、今日は改めて、それに優る一大創案を案出したかの如く、勿體をつけて

さうしてまづ神尾の前に次の如く披露しました。

「拙の案ずるには、近い將來に於て「帝國藝娼院」てへのを一つでつち上げて、世間をあつと云はせて見てへんでございます」

「何、帝國——何だつて」

「帝國藝娼院てエでゲス」

「帝國はわかつてゐるが、ゲイシャウインてのは何だ」

「藝者の藝といふ字に娼妓の娼といふ字を書きますんでゲス」

「そりや、一たい何だ」

「抑々、設立の趣旨で奴を由上げて見まするてえと 本來が、毛唐といふ奴がまだ本當の日本を認識してゐねえんでゲス」

「ふーん」

「日本人、ナカ／＼、キツイあります、刀を使ふ上手アリマス、人を斬る達者あります、勇武の國アリマス、たゞ、藝事出来ない、藝事出来ない國野蠻あります、かう吐かしやが

るのが續なんぞでげして」

「ふーん」

「異人館なんぞへまゐりますと、テーブルの上で毛唐の奴がよくこんな噂を吐しやがるんでゲス、その度に拙は發憤をいたしましたね」

「ふーん」

「馬鹿にしなさんな、日本にも、此の位の藝事がある——てえところを一つ見せてやりえんでげして」

「ふーん」

「さすがに、鑑の眼のつけ處はエライ——とおつしやつていたよきてえんでゲス」

「ふーん」

「そこで、その帝國藝娼院てやつを大々的に目ろみの……日本には藝妓でさへ、これ／＼の藝術がある、遊女でさへも尾、薄雲なんてところになると、これ／＼の文學があるといふところを、毛唐に見せてやりてえんでゲスカ、いがよなもので」

「さうすると、つまり、日本中の藝者と女郎を集めて、毛唐に見せてやりてえと、斯ういふ目論見か」

「いゝえ、どうして、そんな単純な淺はかなんぢやござんせん、日本の有ゆる藝事といふ藝事の粹を集めて、これこの通りといつて、毛唐に見せてやりてえんで、藝娼院といふ名は假りに鑑がつけて見たよけのものなんで、もつと然るべき名前がありさへ致せば御變更のこと、苦しくがあせん」

「日本の有ゆる藝事といふ藝事の粹を集めるだつて、ふーん、なかなか仕掛が大きいんだな」

「仕掛が大きいだけに、人選てやつがなか／＼難儀でげして、先づ有ゆる藝人といふ藝人の粹の粹たるもの百人を限つて、選り抜きます」

「ふーん」

「何も、藝娼院と申したところが、藝妓と娼妓ばかりを集めるといふ趣意ではがあせん取り敢へず美術でげす、日本は古來美を尙ぶ國柄でげして、繪の方になか／＼名人が出ま

した、御承知の通り……」

「處で、取り敢へず狩野家の各派の家元を残らずメンバーに差加へます、それから、四條丸山、南畫、北畫、浮世繪、町繪師の方の、目ぼしい處を引こぬいてこれに加へます、拙が見たところでは、繪かきの方から都合五十八名ほど撰りぬきの……」

「ふーん、して見ると、貴様の目論見の藝娼院は繪かきが大半を占めてしまふんだな」

「是非がございせん、日本は古來美術の國柄なんでダスから」

「ふーん」

「それから戲作の方なんでダス、これは刺身のツマとして八名ばかり差加へやうてんで……」

「繪かきが五十八人もゐて、文書きが八名では比較が取れまい」

「なあに、文書きの方は、どうしやうかと考へて見たんでダスが拙がひそかに、此の計畫を洩らしやすてえと、ぜひ、幾人でもいゝから差加へていたよきてえ、繪かきの下つ端で結構、刺身のツマとして、ぜひ差加へていたよきてえと、先方から賣り込んで来るんでげす

から、退けるわけに行かねえんでゲス、そこで刺身のツマとして文書きを八名ばかりがところ、差加へてやることに致しやした」

「ふーむ」

「それから、書道の方でがす、次は、役者——この役者てえやつが各々、家柄があつたり鼻負があつたり、それに頭数が多かつたりして、一番、事めんだうなんでげして、鏝もこれが人選には困難を極めやした」

「ふーん」

それから、長唄、清元、藝妓の方からは誰々、お女郎の方からは是々——和歌と發句と珍ぶんかんぶん——委細のわりふりと、面ぶれはこの一札を御覽下し置かれませう」

斯う云ひながら、鏝助は枕許の鼻紙袋をかき寄せて、その中から何か書きつけた紙切の折疊んだのを出して、引ぱり出して、神尾の方へ突き出しました。

「これが、拙の苦心慘憺になる帝國藝娼院の面ぶれなんでげして、これを早く發表致しますてえと、あつちからも、こつちからも苦情がつく、かういふことは、得てして、お安い

ところで手つとり早く、でつち上げてしまはなけりや物になりやせん」

神尾は寝ながら、鏝の差出した人選表なるものを受取つて、

「ふーん」

といひながら、面前にひろげて讀みはじめてる。

得意氣に、側面から、この面色を窺ひつゝ鏝がいひつゞけます。

「いかよなもんでげす、多少の議論はございませとらも、先づ、當世、百と限りますてえとそんなところぢやあがせんか」

「ふーん」

「あれを取ればこれを捨てなければならん、これを捨てゝは、あれが立たず……といふ苦心慘憺の處を買つていたよきてえ」

「ふーん、何だと、一つ讀み上げて見ようか、先づ、繪かきで、狩野迷川院、谷文昌——それから、歌川虎吉に、國定國造、ふーん、おれの知つてゐる名前もある、知らねえのもある」

「そつちの方は、それは日本繪所人別帳をすつかりそのまま並べたんでけすから、文句はござりますまい」

「處で文書きの方は——かうと爲永春水——柳亭種彦、あたりを筆頭と致しやして、木口勘兵衛、夕田基監、徳利龜八、生井北風、胸悪ハクショウ……ロクでも無えやつ等だな」

「いづれも、當代の選り抜き、現在の我が國にも、これだけの藝人がゐるてえところを毛唐に見せてやるには不足はござんすまい」

「ふーん」

「なほ、人選に御異議があるとか、御不足があると思召したら、今のうちにおつしやつていできてえ」

「恥を毛唐にまで晒し、お笑草を後の世にまで残す爲にや、こんなことも鑑相應のもくろみだ、やるんなら、邪魔が入らねえうちに、お安いところで手つとり早くやんな」

「有難え——御異議が無ければ、これで御披露の——お安いところで手つとり早く」

「萬事、お安いところで手つとり早く、やらなけりや手柄にならねえ、やんな、大いにや

つて見ろ」

「悉く、殿様の御賛成を得て、鑑一代の光榮、やります、これを御披露に及べば、これこそ一代があつ！、さすがに鑑だ！、よくまあ此の難物を、斯うも手際よく、お安いところで手取り早く纏めもまとめた、さすがに鑑だ、鑑ちゃんに限る、鑑ちゃん、あんた、人が悪いわ、鏡のおいらんを入れて、なぜ蓮池の姐さんを入れないの、恨むわ、なんて、睨られるが怖いんでけす、そこはそれ、斷の一字でけしてね、斯く致してお安いところで、手取り早くまとめてしまつてからの萬事でゲス」

「しつかりやれ！、鑑が男を上げるか下げるか此の一戦にあり！」

神尾が、うわ言のやうに、むやみにけしかけるものですから、鑑の野郎が無性に嬉しくなつてしまひました。

神尾としては、お安い野郎にはお安い仕事をさせて置くに限る、お安いところで、手つとり早く手柄をさせたつもりで喜ばして置けばいゝと深くとり合はないでゐるらしいが、實は心はそこにあらずして、目ざめてから以來の、神尾としては全く異例な頭の置きどころ

に安定を求めてゐるらしい。

即ち、神尾の頭では、果して徳川が亡びた曉には……天下が田舎侍の手に歸した時、我々旗本として甘んじて、その下風に立つて制を受けてゐられるか、藝娼院のやからならば知らぬ事、やくざといふやくざをし盡してはゐるが、おれは先祖以來の徳川の旗本だ、おれはこれだけの人間だが、先祖の血が許さない。

死ぬ！ おれは徳川の爲に死ぬ、江戸の城を枕に、江戸の町が灰になる時は、おれの面目も灰になる時だ！ おれの死ぬのはお家大事の爲に死ぬのぢやない、今更ら、そんな忠義面をするほど、おれは本来、利口に出来てゐないのだ、徳川の爲に死ぬのぢやない、薩長共が憎いから死ぬといふわけでもない、神尾は神尾として、曲りなりにも、曲りなりなんといふと、曲らない處もあるやうに受取れさうだが、おれが今までの生活で何處に曲らないところがある、曲り切つてそれを押し通してこゝまで生きて來たのも、生かされて來たのも、煎じつめると、江戸勢力下なればこそその事だ、つぶれても倒れても旗本の気概がものを云へばこそその事だ、おれは外藩の又者共が、のさばり返る世の中に生きちやゐられね

え、忠義ぢやない、意地だ、徳川の爲に死ぬんぢやない、神尾主膳の面目の爲に死ぬんだ立派に死ぬよ！、神尾の頭の中はその覺悟で一杯になりきつてゐる。それとは知らず鏗は今日は珍らしく、神尾が自分の名案にケチをつけず、一も二もなく、賛成してくれることに有頂天になり、お安いところで一刻も早くこの名案に目鼻をつけて、江戸中をあつ！と云はせなければならぬと、夢中になつて、藝娼院のことを考へてゐる、その徹底的に恥のない生き方を見ると、神尾も苦笑せざるを得ない。

家國興亡の際に、藝娼院の設立を目論んで、有頂天になつてゐる。

人生、鏗となつて生きるか、神尾となつて死ぬるか？ それだけの問題だよ、神尾は嘲笑しながら嘯きました。

九〇

尾張名古屋城下第一の美人とうたはれた銀杏加藤の奥方とその弟伊都丸と岡崎藩の美少年梶川與之助のその後の物語が久しく打ち絶えて居りました。

その記憶をよみがへらせる爲に讀者諸君は大菩薩峠の第八册「年魚市の巻」から「不破の關の巻」あたりをもう一度讀み返していただきたい。

名古屋の城の見える處を立ち去りたくないといふ姉と、肥後の熊本へ歸りたいといふ弟との意向の相違が、病める弟のいちらしさに引かされて、姉なる銀杏加藤の奥方は、遂に主従引具して、尾張の清洲の山吹御殿から肥後の熊本へ向けて出立することになりました。やむを得ざる武士道の意氣地から人を斬つて、三州岡崎城下を立退くことになつた伊都丸の友なる美少年梶川與之助も亦、この姉弟に加はつて九州へ身を避けやうとして旅立つてそれがお銀様、お角、宇治山田の米友等の一行と、すれつもとれつして尾張から美濃路へかゝつたことは、それ等の巻に委しく出てゐる筈です。

然るに——僅かに、美濃の大垣まで來た一夜、悪漢があつて、この一行の宿所を荒らした、奪はれたのは旅費としての相當の大金の外に、金錢にも利福にも換え難い、銀杏加藤の系圖の一卷であつたことを既に記しました。

その曲者の痕跡をたづねて關ヶ原まで追ひかけた梶川與之助は、そこで、悪漢その者の横

死を見とゞけ、奪ひ去つた金子は再び戻つたが系圖一卷が戻らない、この系圖一卷が銀杏加藤の奥方にとつては、身にも寶にも換え難い執着であることの所以は——世に加藤は多いけれども、自分の家こそは肥後守清正の正系、清正の血統を引く家として、わが家より正しいのは無い、この自負の執着が、奥方を懊惱せしめてゐる、再び大垣の宿へ立ち戻つて、この度の急難を、一にわが身の怠慢と無責任とに歸して憂へもし、憤りもし、慰めもし、詫びもしてゐるのは岡崎藩の美少年梶川與之助でありました。

大垣の宿の一室に、銀杏加藤の奥方は、その美しい面に遣る瀬ない憂愁を見せて悄然として坐つてゐる、その傍らには、床をのべて、弟の伊都丸が枕に親しんでゐる。夫人に相對して、小者姿にやつした美少年の梶川が、きちんとかしまつて、只管に慚愧と陳謝の意を表して重ねて云ふ。

「萬事、皆、この拙者が抜かりでござりました、幾度、繰返しても詮なき事、この上は、拙者は、九州へお伴をすることは断念し、これより再び名古屋の城下へ立歸つて、いかなる苦心をしてなりとも、御系圖の一卷を探がし出して、お返し申上る所存でござります、

奥方様並に伊都丸殿、では、このまゝ御免を蒙りまする、あなた方は、お心置きなく、熊本へ向けてお立ち下さいませ、拙者が一心を以て必ず、系圖のありかをたづね得て、お知らせを致しまする、いや、お知らせだけではない、誓つて、それを携へて熊本まで出向きまする、どうか、拙者の精神を御信用あつて、御安心して、旅路にお着き下さい」

梶川與之助は、決心を面にあらはして切に云ひました。

それには相當の自信も無ければならぬ。その熱烈な決心のほどを面にあらはして、梶川が斯く云つた時に、憂愁に満ちてゐた奥方の面が急にかゞやいたやうに、自分の膝も進むばかりはづんで見えました。

「梶川様、よくおつしやつて下さいました、わたくしも未練のやうでございしますが、こればかりは思ひきれませぬ、あの系圖を奪はれて何の銀杏加藤でござりませう、あれを持たないで肥後の熊本へ歸つて、どうして御先祖清正公の靈に申譯が立ちませう、梶川様、あなたよりも、わたしが先きにその決心を定めてしまひました、僅かに尾張の國を一足出たばかりで、あれが盗まれるといふのは、決してあなたの抜かりではござりませぬ、わたくし

達の無用心でもござりませぬ、あの系圖に魂があつて、肥後の熊本へ行きたがらないのです、やはり、尾張の國に留まつてゐたいからなのです、いつも申します通り、肥後の熊本は加藤清正の國ではないのです、加藤清正の産湯を流したところは、この尾張の國の中村なのです、肥後の熊本の城も清正の築城には相違ありませんけれども、それよりも一層この尾張の名古屋の城に清正の精神が籠つて居るのです、それですから、わたくしは、どうしても、あの名古屋城の虜の見えないところへは行きたくないと、日頃から申して居りました、系圖も尾張の國にとゞまりたい、わたし達も尾張を去るなといふ、清正公のお示しではないかと思ひ當りました、けれども、肥後の熊本で靜かに病を養ひたいといふ此の子の希望もさまたげる氣はありません、お前は、お前で心任せに熊本へお出でなさい、さうして梶川様あなたもどうか弟を見まもつて九州へお出下さい、わたくし一人が残りますわたくしは清洲の詫住居へ一人で歸ります、系圖の行方にも、心當りが充分にあるのです、必らず、わたくしの眞心が通じさへすれば、再び、あの系圖が、わたしの手許へ歸つてくると、確かにさう信じられてなりません——わたしで無ければ駄目です、わたしは、尾張

へ戻りますから、堀川様、あなたは友人として、病身のわたしの弟をいたはつて、熊本へお越し下さいませ」

銀杏加藤の奥方は美しい面に強い決心の色を見せてきつぱりと斯う云ひました。

九一

感謝と興奮に緊張した堀川與之助は、奥方の強い言葉に頓に言葉を返すことが出来ないでゐると、傍に寝込んでゐた伊都丸が、夜具の中から言葉をかけて

「姉上——さうおつしやる、あなたのお心持がよくわかります、日頃のあなたの御精神がそれなのです、姉上が留まるとおつしやるなら、それを、拙者は引止める事は出来ない、さうかと云つて、拙者は姉上と一しよに、では拙者も心を同じうして、祖先の系圖をたづねんが爲に再び尾張へ歸りませうと云へないことが悲しい」

病床から弟にかう云ひかけられて、奥方は靜かにそれを顧み

「お前が、わたしの心持がわかつて呉れるやうに、わたしもお前の心持がよくわかります

わたしは肥後の熊本が故郷ではないけれども、お前には熊本が故郷なのです、さうしてお前の一生を安樂に托する風土といふものは、熊本の外に無いことをわたしもよく知つてゐるから、お前は、決して心を動かすには及びませぬ、翻せと云つても翻せない心持はよくわかります、それに、お前の親友、堀川様が附いて行つて呉れるから、わたしは何よりも安心してゐます、それに、一旦、あゝして立つた清洲の土地へ、事をかこつけに再び舞ひ戻るやうでは、人に笑はれます、お前は何處までも、熊本へお歸りなさい、わたしは、引返して尾張の國へ留ります、では、堀川様、弟の身の上を幾重にもお頼み申します」

「それは、いけませぬ、姉上、拙者には多年、使ひ調れた附人もござります、これから海陸の順路を心任せに九州へ下る分には何の不安も無い身です、それなのに、これから一人でお引返しなさらうといふ姉上は、非常の御決心で前途の事も思ひやられます、それには何よりも心強いのは、堀川氏、あなたに、どうか、此の拙者に代つて、姉上を助けて

上げていたよきたい、萬事の相談相手になつて上げていたよきたい、さうして心を合せて家寶の系圖を取り戻した上に、姉上を守護して九州へ下つて、お互に阿蘇の山下で、喜んでお目にかゝる日を期待致したい、梶川殿、拙者の事は、順路を順當に行く尋常平凡の旅でござるから、少しも心配にはなりません、最前も、貴殿はひとり留まつて、我家の爲に系圖を探がして下さるとまでおつしやつた、貴殿の勇氣と眞情は我々にとつて二つとないどうか、こちらに留つて、姉を助けて姉の志を成さしめていたよきたい」

いたゞしい聲に力を込めて、斯う云ひ出された時に、奥方の眼から涙が溢れて頬に傳はつて落ちました。

梶川與之助は、またも返答に窮するの立場に輪をかけられたやうなもので、面はかどやき口はわななくけれども、何れへ何と挨拶し、何れへ何と諫言していか、その言葉の緒を見出し難い。

その時、病床の伊都丸少年は、また聲を落して云ひました。

「姉上とても、一旦斯うまでして清洲を立のいてお出でになつたものを、今更、をめぐ

とお歸りづらいものがお有りです、たとへ、事情が此の通りとは申せ、出入りの者の思わくさへも不快なものかござりませう、それを御承知の上で、お戻りなさる非常の覺悟、梶川氏、それを察していたよきたい、それ故に、貴殿は、このまゝひそかに先發して清洲へお歸りを願ひたい、さうして留守宅の萬事を程よくこしらへて置いて、それから、夜陰こつそりと姉上を迎へていたよきたい、さうして、世間體は何處までも熊本へ立つた事にして置いて、邸内も廣い事でござる故に、姉上は一間に籠つて人に面を知られないやうに貴殿は、さのみ注意する人もあるまいから、どこまでも留守をあづかる人のやうに、こしらへて、陰になり陽になつて姉を助けて志を成さしめていたよきたい、それを御承知ならば、このまゝ直ぐに貴殿は清洲へ向けてお引返しを願ひたいのです」

梶川少年は、その言葉を聞きながら、紅顔が熱し、これも同じく涙が頬を傳つて流れます、奥方は、いづれをいづれとも云はない、梶川としては姉の言葉に従つて、病める弟を見ついで九州へ下るべきか、非常の覺悟と冒険を豫期してひとり留まらんとし、弟の爲に、弟の忠言に従うべきか、いづれが是、いづれが非かわからないうちに、何者かの強い道義心

に打たれて感動する、しばらく、判断も利害も離れて、たゞ感動に堪へられないであらう。ちに、最も冷静なのは病める弟でありました、姉と友なる人の云はんとして云ひ難き時にこの弟は冷静に流暢に、従つて極めて理路整然としてまた云ひました。

「さうして、三ヶ月を限つていたゞきたいのです、姉を助けて向ふ三ヶ月のうちに、姉の目的が達せられませんか時には、もはや、天、加藤家を捨てたりと思召して、姉を守護して熊本まで下つていたゞきたい、さうして彼地でわれ／＼は笑つて再會して、お互に今後の生きる道を楽しく語り合ひたいものです、この申出には姉上も御異議はござりませぬまい」

九二

やがての事の結論は、遂に堀川少年が、兩者へ對する義理と犠牲心から病める弟の忠言を聞いて、留まる姉への奉仕とならざるを得ない事になりました。

堀川少年は、仲間小者ちやくしものとなる覺悟を以て、銀杏加藤の奥方を助け、病友が要求する三ヶ月の期限以内に必ず、目的を達して、九州へ下つて相見るといふことを誓約的に斷言したの

です、奥方も、遂にこの説を容れざるを得なくなつて、そこで、此の一座の評議は友義と同情と犠牲心とを以て、美はしくまとまりました。

奥方が、立つて、荷駄の差圖に、別室へ赴いたあとで、伊都丸は、堀川を枕もと近く招いて、ひそかに云ふやう

「堀川殿、姉はあゝいふ氣象ですから、如何とも致し難いですが、姉は尾張の名古屋の城は徳川の名古屋城ではない、加藤の名古屋城だと信じてゐるのです、さうして加藤清正の唯一眞正の血統は、我々姉弟の外にはない、名古屋にも加藤と名乗つて清正の直系と稱する家は幾つもあるけれど、皆傍系に過ぎない、先祖の加藤清正が悲壯なる覺悟を以て心血を注いだあの城、あの城には先祖の魂が籠つてゐる、いつか時勢がめぐり／＼來つて、加藤の子孫が此の城の主となる時がなければならぬ、と常始終、こんなに考へてゐるのですさうして、事毎に拙者を努め勵ましてはゐるのですが、拙者は姉と異つて、左様な事には極めて淡泊なのです、よし我々が加藤の直系であらうと傍系であらうと、それは私にとつては何の加うる所も減ずるところも無いのです、清正と雖も攝家清家の生れといふわけ

はない、本來を云へば、豊臣秀吉と共に、尾張のあの地點の名も無き士民の家柄なので、秀吉の威力が増大するにつれて清正も天下の大々名とはなりませんでしたけれども、本來、秀吉も清正も自負すべきところは其の門地や家柄ではなく、その天性の實力にあつたのです、拙者の如きはその點を偉なりとしますけれども、姉は清正以來の家系といふものに重きを置いてゐるので、それに姉は此の尾張の國で生れたのですけれども、拙者は肥後の熊本で生れました、その土地の引力かも知れませんが、姉は金鯱の見える土地に執着を持つてゐる、拙者は阿蘇の煙の見えない土地は、生きる土地でないやうな氣持がしてゐます、熊本へ歸ると、そこに先祖の菩提所があります、我々が一生不足なく暮らせるだけの知行もありません、また、幼な馴染も、我々を尊敬して呉れる郷土民もあるので、郷土の人は、何所からともなく、我々の家柄が加藤清正の家系である、今の細川家よりも古いのである、といふやうな觀念を持つてゐて、それで特に我々を尊敬して呉れるのです、もし系圖といふものに餘蘊がありとすれば、名古屋城の金の鯱の光よりも、この郷土民が何百年の昔の歴史に信仰を置いて、何の功業も無い我々を尊敬して呉れる、これこそ、系圖の餘澤先祖の

光りである、拙者はそこに先祖の有難味を味はつて生きて行きたい、さういふ風に熊本では人心が皆、拙者になつて呉れる、特に風土が、拙者の身體にかなつてゐるやうです、有名な阿蘇があります、その周圍には幾つもの温泉が、我々を温めて呉れます、それから八景の水谷だの水前寺だのいふところの水が宜しいです、一たい、何所を掘つてもよい水です、一步、海邊へ出ると柑橘の實る平和な村があります、三角の港から有明の海、温泉ヶ嶽をながめた風景は到底關東にも關西にもありません、それに加うるに穀物が實ります米も肥後米と云つて第一等の米がとれるのです、なほ、その上に、國主の細川家と、先住者の加藤家との間の、諒解が極めて美しい、處によつては、先住の豪族を平げて、後の國主が入城し、兩者の間は仇敵のやうな例も随分ありますけれども、肥後の熊本に限つては今の細川家が先の加藤家の崇信者であり、同情者でありますから、加藤の名によつて肩身廣くなるのです、さういふところですから、拙者は姉と違つて熊本を故郷なりとします、今、名古屋城をお前に興へるからと云つても、それを受けて住む氣にはなれないのです、堀川氏、貴君もぜひ、熊本へ来てごらん下さい、必ず熊本が好きになるに定まつてゐる、

併し、拙者は拙者として、斯様な愛着に生きてゐるけれども、姉のあゝした氣象と意氣を、輕んずる氣にはなれない、あの見識で生きてゐる姉を尊敬しなければならぬのです、よつて、正面から姉の精神を斥けるわけには行かないのです、男子は裸一貫と意氣とで生きなければならぬ、系圖に物を云はせるやうになつてはおしまいだと云ひたいのですが、姉のあの氣持を尊重するとそれが云ひ出せない、ですから、貴殿は姉を見ついで、決して危険を冒してまで、系圖などに執着する必要は無いから、程よくして、三ヶ月目には必ず熊本へ来て下さい、熊本來れば貴殿にも安住の地が必ずある、併し貴殿は以前から、長崎へ行きたい、支那へ渡りたいといふやうな事を云つて居られたが、かりにその希望の爲としても、遙かに都合がよくなつて行くのです、わが家の系圖などに執着せずに、貴君の身を安全にすることを第一に考へて下さい」

伊都丸少年は、斯う云つて、繰り返して友なる梶川少年に口説きました、梶川はそれをもよく諒解しました。

「貴君の心持はよくわかつてゐます、吉左右共に、これから三ヶ月には姉君を件うて必ら

ず熊本へ参りますから、貴君も心を安んじ御自愛第一にして待つてゐて下さい」

九三

斯くて梶川少年は、ひとり大垣の宿を先發して、清洲の山吹御殿に歸りついでその日の宵の事です。

誰も知らない間に裏手から、その廣大な屋敷の何れにか無事に潜入してしまひました。その夜更けて、同じ裏手の門が内から開かれるといつの間にか門側に忍んでゐた一人の女性、身を現はしたと思ふと早くも、その裏門から身を没して、廣い邸内の何れにか吸ひ込まれたことは梶川少年と同じことです。程なく、邸内の山吹御殿の、桔梗散らしの豪壯な一間に、形はいかめしい銀の燭臺に光はしめやかな一種の燭がかゝやくと、その所に銀杏加藤の奥方が端然と坐つてゐます、やゝ間を置いて、かしこまつてゐるのは梶川少年。二人は、無事に、此の舊邸へ立ち戻つて來たのです。

「梶川様、ほんとうに、こゝまで來て安心致しました、萬事は皆あなたのお蔭です、何と

感謝していかわかりませぬ、本来、わたしが、こんな強情を云つて、立ち戻ることを主張しましたのは、確かに其れと充分の心當りがあればこそなのです、名古屋城には加藤の四家といふのがございまして、それがいづれも清正の正統と稱してゐるのです、その加藤四家のうちの、いづれの加藤とは申しませんが、そのうちのある一家が、特別に、わたしの家の系圖に目をかけて居りました、さうして、表面には出さないけれども、手を換え品を換えて、いろ／＼の好條件の下に系圖讓受を策動して参りました、そのみではないわたくしの一身までも……さういふ執心の家が現在あつたといふことを知つて下さればこれからの探索にも有利であらうと思ひます、そこに心當りがあればこそ、わたしは存外簡單に目的が達せられるのではないかと、斯う思ひましたものですから、強いて弟を振り捨て、歸つて参りました」

奥方から斬う云はれると、前にかしこまつてゐた梶川少年は、充分それを納得して、附加へて申します。

「拙者も實は、奥方のお心持を左様に付度して居りました、そのみならず、關ヶ原ま

あの夜の曲者を追ひかけた時に、あれがどうしたのか、途中で何者かの爲に辻斬られてゐる、その死骸にぶつかつて篤と見定めて置いたのです、彼が暫らくの間でも、御當家へ下郎として仕へてみたといふこと、金子も取るには取つたが、それは無事に戻つたにかゝらず、下郎の分際として、何の役にも立つまじき系圖に目をかけた事と、その系圖だけが紛失してゐること、それ等から考へ合せて、これは背景があるのだと直感しましたから、その時、下郎から相當の證據を集めて置きました、これから清洲へ歸つて、あの下郎の身元を洗つて見れば、それから大たいの當りがつくやうに信ぜられましたから、奥方様に先立つて、ひとりこちらへ引き返すことを主張しましたのです、それには幸に伊都丸君が一行を引具して相變らず旅路を続けられるといふことが却つて好都合でした、あなた様と拙者とが立戻つて來てゐるといふことが知れては、先方が警戒しますけれども、今宵の事は誰も知りません、今後あなた様は決して御座敷を離れてはいけません、萬事の奉仕は拙者一人が致します、出入の者にも感づかれてはなりません、拙者は大丈夫です、斯うして昔と變つた仲間小者のいでたちで、留守居を頼まれたやうにしてゐれば、誰も怪しむも

のではありません、殊にこゝは一城廓とも云つていゝ別天地ですもの——
さうして、名古屋城下に程遠くもない地の利を占めてみますもの、こゝを根據として、こ
れから名古屋城下を隈なく、私が探ねます、萬一、見知る者があつてはと存じ、面を少々
灼くことに致しました」

梶川少年から、頼もしい限りの言葉を聞かされた銀杏加藤の奥方は、その最後の一句に至
つて、美しい面を曇らせて

「それはいけません、面を灼くとおつしやいましたね、梶川様、どういふ事をなさるのか
知れないが、それだけは思ひ留まり遊ばせ、天の成せるものを人の力で破壊することは宜
しくありません、身體髮膚の教もございませぬ、あなたのその若い美しいお面を灼きこわして
まで、わたし達は助力を願うのに忍びませぬ」

面を灼くと云つた爲に、夫人の心が痛く傷けられたのを見て、梶川少年は取りつくろつて
申しました。

「拙者とても、強いて、そんな事をしたいではありません、岡崎街道で、あゝいふ事を

仕出かして来てみますから、萬一を慮つての覺悟なのです」

「もし、さういふ事を實行なさる場合には、前以て、必ず一應、わたくしに御相談をなす
つてからの事にして下さい」

「承知致しました」

「わたくし達の目的の爲には、あなたに指導者になつていたゞかなければならないから、
あなたの一身上の事については、わたくしが年上ですから姉でありますから、わたしの許
しなしには髪の毛一筋でも自由になさることは許しませぬ」

「は、は、は、これはきつい御命令を承りました、委細心得てござりまする」

こゝで二人の睦まじやかな會議、新たに意氣相許す一對の姉と弟が出来上りました。

九 四

膽吹の御殿ではお銀様が憤つてゐる。

お銀様は絶えず憤つてゐる人である。その人が、憤の上にまた一つの憤りを加へた。

何を憤つてゐる。

お雪ちやんといふ子が、恩を忘れて裏切の冒瀆の行動をしてゐる、それを憤つてゐるのか、さうでは無い。

龍之助といふ男が、無制限の放縱と貪婪と虚無に盲進する、それを憤つてゐるのか、さうでも無い、そんな事はこの暴女王にとつては、憤慨ではなくて寧ろ興味である。

そもく、此の暴女王が今日に及んで、斯くも深く憤を發してゐるといふ所以のものは、己れの夢想する王國が、土臺からグラつき出したから、それを見せつけられるが爲に憤つてゐるのに相違ない。

人間といふ奴は度し難いものだ、人間といふ奴は救うよりは殺した方が慈悲だ、とさへやゝもすれば觀念せしめられることの由を如何ともし難い。

ナゼならば、彼女は己れの強力を傾注して、有象無象をよく生かしてやらんが爲に、事を企てゝゐるが、此處に來る奴、集る奴にロクな奴は無い！ いや、此處に來る奴、集る奴にロクな奴が無いのではない、凡そ生きん事を欲する人間にロクな奴が無い！ といふ斷

案を得やうとして、それ得させまいが爲に自ら苦心、焦慮、憤慨してゐるのである。

もし、かういふ論理を許すとすれば、自分の王國主義を甘んじて虚無主義に屈服せしむる結果となる、それでは絶滅の使徒、虚無の盲人に笑はれるばかりだ。生の哲學から死の哲學に降服を餘儀なくされるばかりだ。

彼女は、こゝに働らく人間共の表裏を見せつけられる。人間は働らきたいが本能で無く、なまけたいのが本能だ、生をぬすまんが爲に表面追従するだけで、生の擴大と鞏固とを欣求するやうな英雄は一人も來やしない、彼等の蔭口を聞いてゐると、此の王國を愚弄し、わが暴女王の甘きにタカるあぶら虫のやうな奴等ばかりだ。こんな連中に世話を焼いてやるべきものではない、残らず叩き出して出直させるに越したことは無い！ とさへ、此の女王を思ひ迫らせる。

王國の門を鎖し、垣を高くして、今來てゐる奴等を残らず叩き出して、新たに出直さす——と云つたところで、彼等を何處へどう叩き出して、何處から出直させる、所詮、母の胎内へ押し戻して、再び産み直させるより外に道は無い。

お銀様は、この深い憤を抑へて、御殿の一間から琵琶の湖面をながめてゐる。憤つてゐるのは、お銀様ばかりでは無い、道庵といふやうな出しやばり者を別にしては、誰も彼もが皆んな憤つてゐる——やうに見える、凡そ今の時勢に、笑つてなんぞゐられる奴は無い。

お銀様が、これを深く憤つてゐる時に、城下——御殿下とか屋敷下とかいふよりはこゝからは城下といつた方がふさはしい、伊吹御殿の城下が遽かに物騒がしくなりました、春照彌高の里で、早鐘が鳴り出しました。

「一揆が来るぞ！」

「百姓一揆が押して来たア！」

何處からとも無く響く號叫。

農奴の巻了

「大菩薩峠」梗概 (著者撰定)

(第一册)

第一 甲源一刀流の巻

大菩薩峠は江戸を西に距る三十里、甲州裏街道が甲斐の國は東山梨郡萩原村に入つて、その最も高く最も險しきところ、上下八里に跨がる難所がそれです。

標高六千四百尺、昔、貴き聖が、この嶺の頂きに立つて、東に落つる水も清かれ、西に落つる水も清かれと祈つて、菩薩の像を埋めて置いた、それから東に落つる水は多摩川となり、西に流るゝは笛吹川となり、いづれも流れの末永く人を潤はし田を實らすと申傳へられてあります。

時は徳川の末

この大菩薩峠の頂へ登つて来た一人の武士がある、黒の着流しで、定紋は放れ駒、博多の帯を締めて、朱紋、海老輪の刀脇差をさし、羽織はつけず、脚絆草鞋もつけず、この

険しい道を素足に下駄穿でサツ／＼と登りつめて、この風來の武士が峠の頂上に立つて旅人を見廻してゐたが、程程で甲州路の方から登つて來る西國巡りの年老いたる巡禮と少女を見かけ、少女が水汲みに行つた間に、この巡禮を斬つて捨て何れともなく姿を隠す、水を汲んで來た少女は立ち戻つて老爺の死骸を見て仰天する、そこへ多數の猿が現はれて少女に悪戯をする。

折から通りかゝつた中老年輩の足の早い旅人がこの態を見て猿を追ひ拂ひ、死骸の始末をして少女を背負つて峠を武州路の方へ下つて來る。

右の大菩薩を下りて東へ十二三里の處に武州澤井といふ村がある、そこに道場を構へて代々領主のやうな生活をしてゐるのが机弾正といふ人で、その一子に龍之助といふ者があゝる、當主の彈正はなかくの人物であつたが永らく病氣に臥してゐる、代々劍術の家柄で今、その道場を龍之助が預かつてゐる。

この机龍之助は劍の上に於ての天才的素質を持つてゐる、一種獨特な劍術振で、「音無の構」と呼ばれる。

この音無の勝負といふのは、此處の若先生即ち机龍之助が一流の劍術振を其頃劍客仲間の呼びならはして、竹刀にあれ、木劍にあれ、一足一刀の青眼に構へたまゝ、我が刀に相手の刀を些とも觸らせず、二寸三寸と離れて、敵の出る頭、出る頭を或は打ち或は突く、自流他流と敵の強弱にかゝはらず、机龍之助が相手に向ふ筆法は、いつでもこれ

で、一試合のうち一度も竹刀の音を立てさせないで終ることもある、机龍之助の音なしの太刀先に向つては、何れの劍客も手古摺らぬはない、龍之助はこれによつて負けたことは一度もないのである。

斯くて當人は人を眼中に置かない、稽古の間には好んで山野を跋渉し、辻斬をして歩く、前記大菩薩峠の上で老巡禮を辻斬したのも此の龍之助であつた、因にこの「音無の勝負」といふのは小野派一刀流中西子正の門人高柳又四郎の劍術振をモデルにしたものである。

龍之助が今書齋に戻つて、來る五月五日武州御嶽山上に於て行はるべき關東劍客の大試合の組状をとつて見てゐると、そこへ、多摩川を隔て、對岸の宇津木文之丞の妻お濱といふ美人が突然に來訪して、初對面の龍之助に向つて、今度の試合に龍之助と組ませられてゐる自分の夫文之丞の爲に勝負の妥協を求め、これは夫文之丞が到底龍之助の敵でないことを知つて、女の淺はかに先廻りをして來たものであるが、龍之助はスゲなくその哀求を拒絶し武術の勝負と女の操とは決して譲るべきものでないといふことを斷言して歸へす。

お濱はしほ／＼として萬年橋を歸路につくと、龍之助は自分の家の水車番與八といふ愚鈍にして大膽な若者を脅迫してお濱の後を追はしめ、從者をつき落して、お濱を水車場まで掠奪して來させる。

與八は本來善人だが、龍之助に逢つては魔力的に引ずられ、善惡共にその命令を反くこ

とが出来ないやうになつてゐる。

龍之助が水車小屋の中でお濱を辱かしめる。やがて我家に歸つたお濱は、その失敗と侮辱とに煩悶懊惱するが、そのうちにも知らず龍之助の強き意志と魅力に惹き入れられて、却つて夫を捨て、龍之助の魔縁にひかされる。

かくて、御嶽山上の五月五日の大試合は来た、その試合で龍之助は木剣をもつて文之丞を打ち殺し、多くの劍客の圍打の場をきり抜け、お濱をつれて江戸へ出奔する。

これより先き大菩薩峠の上で老爺を斬られた巡禮の少女は、名をお松と云つて江戸の本町生れの子供であつたが、それを助けて背負つて下りた中老の旅人は、武州青梅の裏宿七兵衛といつて、平常は質朴な農夫だが、無類の早足で、關八州方面を荒し廻つては何食はぬ顔をして故郷へ歸つて百姓をしてゐる盗賊であつた。

この七兵衛がお松を連れて、お松の身寄りだといふ本郷の山岡屋といふ大商人の店をたよつて来たが、その伯母が不人情で受けつけない、已むなく二人は恨みを飲んで此の店を立ち去る途中、湯島でお花の師匠をしてゐるお絹といふ切髪的美しい後家さんに後を追はれてお松はその家へ引き取られることになる。

七兵衛はその晩、山岡屋へ忍び込んで復讐をする。

水車番の與八は馬を曳いて江戸から澤井へ歸る、與八は愚直な信仰者で、自分が捨て子であつたのを龍之助の父彈正に救はれた孤兒の身から、地藏菩薩を信仰する事をおぼへて

ゐる。

江戸の古道具屋で買つて来た、古びた地藏菩薩の木像を馬の上に押し立て、時々それを振り返りながら、青梅街道を上つて行くと、疲勞した一人の少年武士が多數の追刺に取り圍まれて危急の地に陥つてゐるのを見て持ち前の大力で之を救ふ。

その後で與八が少年を勞はると、これは自分の家の若主人龍之助の爲に御嶽山の試合の場で打ち殺された文之丞の弟兵馬といふ少年であつた。

兵馬は親戚である江戸の旗本の家に預けられてゐたが、兄の横死を聞いて悲憤の餘り夜中脱走してこれまで来たが、疲勞して動けなくなつてゐる處であつた。與八は兵馬を自分の馬にのせ、澤井へ連れて来て龍之助の父彈正に會せる、彈正は龍之助の平常と此の度の事件に就て深く慙愧の意を表し、自分が健康體ならば、その儘で置くのではないが、それが出来ないから、願はくば我に代つて龍之助を成敗してくれ、それには正しい劍道を修業しなければならぬ、正しい劍道を學ぶには正しい師に就かねばならぬ、それには自分の友人である直心庵の師範島田虎之助に越した者はない、それに入門をすゝめて紹介する。

それより四年後、龍之助とお濱は芝の新錢座の江川太郎左衛門の長屋にわび住居をしてゐる、二人の間には郁太郎といふ一子さへ出来て、江川の家へ劍術を教へることでその日を送つてゐる。

今日は五月五日、お濱は日蔭の身の上から郁太郎の將來を案じ、愚痴をこぼして、浪々

の身をイラ／＼してゐる、龍之助と大衝突を起し、お濱は都太郎を殺して自分も死ぬと云ひ出し、龍之助の脇差を振り廻す、龍之助はそれを奪ひ取つて、死ぬとも生きるとも勝手にせよといひながら、氣を紛らすべく外出して下ふ。

龍之助は憐愍の氣持ちをもつて何處をどうともなく歩いてゐるうち、フト下谷の御徒町で一つの變つた道場の竹刀の音に惹きつけられ、思はずそこへ他流試合に飛び込んで見ると、これぞ直心流の鳥田虎之助の道場であつた。

それと知らず龍之助は、まづこの道場の異彩たる一少年と試合をさせられて見る、この少年こそ龍之助の父彈正の紹介によつて入門してゐた宇津木兵馬であつた。

龍之助は例の音無でこの少年を打ち込み、更に道場主の先生に向つて手合せを乞ふて、はじめその人が鳥田虎之助であつたといふことを知つて渾身身慄ひする、それは、自分の父がかね／＼當代鳥田でなければ劍術はないやうなことを云ひ自分をたしなめる、それが反感となつて、鳥田何程のことかあらんと腹に貯へてゐた當人が、その人であることを知つて、是非／＼立ち合ひを願ふと云つたが、鳥田は取り合はない、龍之助は不満と侮蔑の念を抱いて歸る。

宇津木兵馬は机彈正の紹介によつて、斯うして最早や三年間鳥田の道場に通ひ、殊に突きを得意として屈指の腕になつてゐる、今日しも不思議の劍客と立ち合をして一瞬の間に小手を取られてしまつた不覺の程を考へながら、龜町の家へ歸らうとして、本郷の妻戀坂

で驟雨に會ひ、雨やどりをした家がお花の師匠お絹の家の軒下で、そこにゐたお松の親切で家へ導かれてはじめて知り合ひになる。

お松はその後お絹にいる／＼と仕込まれて、これから傳馬町にある旗本の神尾主膳の處へ奉公にやられるのである。このお絹といふ女は先代神尾の愛妾であつたが、神尾の家は名代の風儀の悪い邸であつた。お絹の下心では自分に代つてお松に今の神尾の心をとらせようとするのである。

お邸奉公にやられたお松は邸内の風儀の悪いのに驚き呆れて了ひ、そのうち或夜竹の子勝負といつて、着物を一枚々々剥ぎ取るカルタ遊びの爲危ない目に遭ふ。

澤井の水車番の與八は、若主人の龍之助は出奔する、その後大先生の彈正はたうとう病死して了ふ、已むを得ず自分は江戸へ出て、ふとこの神尾の邸に奉公してゐたが、そのうち不遇なお松と相知り、その境遇を憐れんで、遂にお松をこの邸から連れ出して逃げて了ふ。

その頃徳川の幕下に新徴祖といふ團體が出来た、これは當時尊王讀夷で幕末の騒がしい時代に徳川方が諸藩の注意人物を取抑へ、或は捕縛し、或は暗殺する爲に腕利きの浪人を集めた毒を盛つて毒を制する機關であつた。

この一味が、神田柳原の金子といふ同志の家に會合して、以前は同志であり、今は勤王の志を貯へてゐるといふ清川八郎を暗殺の手はづを決めてゐる、水戸の人芹澤鴨、武蔵の

近藤勇、土方歳三をはじめ群々たる手利が集まつてゐる。只今杉山左京の邸を乗り出したのは儘かに清川八郎に相違ないが、厄介なのは清川と一緒に槍の高橋が伴いてゐることだ。槍の高橋といふのは高橋伊勢守のことだ、槍を取つては海内随一、清川一人はさしたる事はないが、高橋と一緒にではとさしもの新徴組が憚む、近藤、土方等は何程のこともない、高橋諸共やつつけると力む、そして二つの駕籠を十四人の壯士がつけ狙つたが、途中、昌平橋で高橋の駕籠は牛込に向ひ、清川の駕籠はお成街道から上野方面に向ふ、それを新坂下迄追ひ詰めて十四人の壯士が取り圍んだけれども、駕籠の中は清川でなくつて鳥田虎之助であつた、こゝで、籠を突いて虎を出してしまつた形勢となつたが、命知らずの新徴組は少しもひるまず人違ひと知りつゝ鳥田をやつつけてしまはうとする、駕籠から躍り出した鳥田はこゝに十數人の命知らず、何れも一流一派を究めた壯士を向ふにまわして、夜の新坂下に凄愴を極めた立會を現出する。

その結果十三人の同志がバタ／＼と枕を並べて鳥田の一刀に命を落す、終に大將の土方歳三までが鳥田に捕へられて組み敷かれる。

それまで物蔭にちつと見てゐたのが机龍之助であつた。その時はじめて鳥田の劍の神妙超人の域に達してゐることを眼のあたり見て恍惚として動くことが出来ない、やがて、我れこの人に及ばすといふ絶望となつて、自信が根底から崩れ出して、了ひ、自殺せんとした土方を抑へてすぐ／＼と引き返す。

これより先き、この變事を傳へ聞いて高橋伊勢守も清川八郎もこの場に來合せて見てゐたのだが、高橋は鳥田の腕を信じて清川に助太力をさせない。

甲源一刀流の巻終り

第二 鈴鹿山の巻

今日は昨晩からの雪、龍之助とお濱との気分も和らぎ、しんみりした佗住居、雪を外に普話の蒸し返してもしようと思つてゐると外を尺八の門づけが通る。

尺八の音を聞くと思はず父の佛が浮かび出る、父彈正は尺八を好みこれに堪能であつた殊に昨夜といふ昨夜、鳥田虎之助の超人劍を見せられた今朝、今更父の眼がねの曇りなきことを知つて感慨無量なるものがある。

お濱はまた文之丞の弟兵馬の事を思ひ、兵馬が殊勝にもその小腕を以て龍之助を討たんと心がけてゐる風聞をきき、よき姉として可憐なる弟兵馬を討たせたくないといふ思ひに迫られる。

そこへ新徴組の隊長芹澤鴨が訪ねて來て昨夜の噂から宇津木兵馬が、近藤、土方の助太刀によつて龍之助を狙つてゐる事等を物語る、お濱はこれを立聞きしてゐる。

四谷傳馬町の悪い旗本、神尾の邸を脱け出した與八とお松は、神田佐久間町の伯母、元

の山岡屋の女房お瀧の落ちぶれた長屋へ逃げ込みそこで病氣にかゝる、お瀧は親切ごかしにお松の所持金を捲きあげ、たう／＼その秘蔵の短刀を與八が賣りに出かけることになる。この時お松のかゝりつけたお醫者さんが即ち十八文の道庵先生で、本小説きつての奇人である、十八文は甲斐の徳本の古事をもちつたもので道庵は貧乏人社會に大いに人望がある。

與八は、お松から頼まれて秘蔵の短刀を賣つてそれで道庵先生へも藥禮をして歸つて來ると肝腎のお松がゐない、お松は悪い伯母の手にかゝつて京の鳥原へ賣られてしまつたのだ。

新錢座の佗住居で、お濱は夢にうなされる、佛壇から鼠が飛び出して來て郁太郎の咽喉を噛む。

お濱は因果のほどをそら恐ろしく感ずる。

そこへ宇津木兵馬から果し狀が來る。

龍之助はお濱にこれから自分は新徴組に頼まれて京都へ出かけるのだといふ。

お濱はこの際、龍之助の無情に呆れ、子供の運命を悲しみ、龍之助にからみつき離縁を申出る。

龍之助それを冷淡に取扱ひ、自分は京都へ出發に先立つて兵馬を殺すべしといふ、

お濱死を決し、その夜龍之助を殺さんとして取り抑へられ、却つて芝の増上寺の松原ま

で追はれて龍之助の爲に殺される。

宇津木兵馬は龍之助に果し狀をつけ、約束の赤羽橋迄行く途中、お濱の死骸を見つける。龍之助そのまゝ行方不明。

七兵衛暫くぶりでお花の師匠お絹を訪ふてお松の其の後を聞くと、お絹はあの子はたこのいゝ子だがお邸奉行中ロクでもない雇ひ男と逃げてしまつたといつて残念がる。

七兵衛、お松の行方を探さんと、この家を出かけて途中あやしき紙屑買を捕へお瀧とお松の行方を問ひたす。

與八け郁太郎を呑ひ、お濱の遺骨をさげてトボ／＼と青梅街道を故郷へ歸る。

伊勢國鈴鹿峠の麓、關の宿、こゝの茶店へ江戸を落ちのびて來た龍之助が來て休む。

そこへ一挺の駕籠が上方からやつて來る、駕籠から出て來た女を見ると、どう見てもお濱そつくりで龍之助が戦慄する。

この女が駕籠屋からいちめられる、龍之助が籠駕屋をこらす、そこへこの女の戀人がやつて來て男女二人相抱いて喜び泣く。

龍之助感慨無量に二人の立ち去るを眺め、自分も鈴鹿峠に向つて出かける。

龍之助に助けられた若い男女は、男は新三郎といつて京都生れ、女はお豊といつて伊勢の龜山の者、二人は相思の中だが身の不運をなげいて心中の相談をする。

鈴鹿山の巻終り

第三 壬生と島原の巻

龍之助は近江の天津の宿に泊つてゐる、目的地の京都迄僅か三里、こゝでゆつくり疲れを休めて行くつもりと見える。

隣室に若い男女が来てゐる。それが偶然にもあの關の宿で助けた若い男女である、二人がすつかり心中の腹を定めて書き置きまで書いてゐる一伍一什を模越しに聞きながら、龍之助は冷然として、

「死ね、死ね、死にたい奴は勝手に死ね」とうそぶく。

翌日宿を立たうとすると、この二人の男女が、琵琶湖のあづま川の淵へ身投げをして釣臺に乗せられた残骸が擔ぎ込まれるのを見る。

かくて、龍之助が「柳緑花紅」の逢坂山にかゝると、うしろから呼び止めた壯士がある。薩州の人田中新兵衛、龍之助を劍客と見かけて果し合を申出る、龍之助自若としてこれを引きうけて音無の構を見せる。

田中新兵衛龍之助の太刀先に應待に苦しみ、あはやと見る處を通りかゝりの新徴組の一人山崎讓が棒をふるつて飛び込んで仲裁をする。

三人山科の奴茶屋で仲なをり、こゝで京洛の血腥い空氣と新徴組の近況を聞く。

これより先き、宇津木兵馬は京都に來り近藤勇の下に身を寄せ、洛中の動搖を見傍ら京都へ上つて來た管の机龍之助の行方を探索する。
新徴組の隊長、芹澤鴨が横暴を極めるので副將の近藤、土方等が相圖つてこれを殺さうとする。

机龍之助は芹澤鴨方に暫く身を寄せてゐる、兩派が島原の遊廓を中にして暗闘する。

龍之助は島原遊廓角屋の御簾の間に於て當時こゝへ賣られて來たお松を前にし、お濱の怨念と我が子の愛着等の爲に、思はず狂亂して、刀を抜いて物に狂ふ。

その夜、近藤、土方の一派は隊長芹澤鴨を暗殺し、やがて新徴組は完全に近藤土方等の手に歸して新撰組となる。

七兵衛はお松を救はんが爲に島原まで來て見たが、變装した新徴組の山崎讓に追はれる。兵馬はこの騒ぎの爲に折角島原で認めた敵の影をまた見失ふ。

武州澤井の里に歸つた與八は、海藏寺の東妙和尚に就て地藏様を彫み、或は地藏和讃の一節を授けられつゝ法縁を深くする。

島原の廓で狂亂した龍之助は、夜が明けてとある小流に近く帷敷の中に横はつてゐる己れを発見した。

ふと、通行人を呼ぶ止めて物を奪ねんとすると、その者が盜賊と見あやまつて財布を投げ出して逃げて行つて了ふ。

京を落ちのびて河内方面から大和の國八木の宿へ漂浪して来た龍之助、ふと天誅組の義舉に加入の激文を見たが、腹がへつてたまらない。とある饅頭屋へ飛び込んで腹をこしらへたが代金がない、帯刀を惜気もなく投出してこゝを出立する。

その後へ七兵衛が来て、その刀を見て思案する。

龍之助は大和の長谷の觀音に詣で、その籠り堂の中で一夜を明かす。

壬生と島原の巻終り

第四 三輪の神杉の巻

大和の國三輪大明神の鳥居前の茶店の中で土地の閑人が將棋さしをしてゐる。

そこへ通りかゝつた者が、いつぞや關の宿で龍之助に助けられ、琵琶の湖で新三郎と心中したお濱に似た女即ちお豊である。

死にたい奴は勝手に死ねとあざけられた若い二人の男女、相抱いて心中したが男だけは死に女だけは助かつて今こゝの薬屋源太郎といふ叔父の家に預けられて日蔭の身を送つてゐる。

長谷の觀音で一夜を明かした龍之助は疲勞の身を三輪大明神の社家植田丹後守の邸へたどりつく。

藥屋に預けられたお豊の姿を見て、この土地のドラ息子藍玉屋金藏といふ者が懸着するその執着に恐れをなしてお豊を植田丹後守の邸へ預けることになる。

これより先き龍之助は植田丹後守の邸に身を寄せてこゝで假りに植田の道場を預ることゝなつてゐた、植田といふ人はなか／＼大身で武術を好み、學問も深く客を愛する徳人であつたが、ゆくりなく訪ねて来た龍之助を引き止めて自分の道場を任せる、龍之助は丹後守に於て、自分の父が再來の俤を見る。

そのうちに預けられてゐたお豊と龍之助との間に縁が結ばれる。

藍玉屋の金藏はいよ／＼戀に眼がくらんでお豊をつけつ廻しつしたが、植田の邸へ預けられては齒が立たないことの爲に遂に獵師の惣太といふのを語らひ、鐵砲をもつて植田家を脅かさうとしたが、丹後守に見つけられ居たゞまれずして出奔する。

そのうちに龍之助とお豊とは丹後守の諒解を得て、お豊は故郷の伊勢へ、龍之助はそのつき人として實は二人江戸へ行かうとして此の家を辭することになる。

それを伺ひ知つた金藏は針ヶ別所といふ山奥から鍛冶倉といふ悪い獵師を連れて来て西峠の附近でお豊龍之助、叔父の源太郎の一行を待ち受けてゐる。

植田丹後守は一行を送り出したが何となく氣にかゝるものがあるので、門下生に近頃船來のピストルを持たせて後から追ひかけさせる。途中龍之助は七兵衛に行き當り、問ひかけられて應待してゐるうちに源太郎は鐵砲でうたれ、お豊はかぢ倉と金藏の爲に渡はれて

しまふ。

龍之助尚嗜みをすれども及ばない。

宇津木兵馬は奈良の春日神社に参詣し、鎌寶藏院流の後を尋ね、當時寶藏院の槍では、三輪大明神の社家植田丹後守が名譽の人であることを聞き、轉じて植田丹後守を尋ねた時は、龍之助の去つた後であつたが、こゝで丹後守から武術の話を知り、殊に自分の師匠島田見山の知己であることを知り、話が熟して行くうちに最近まで龍之助と覺しきものがこゝにゐたことを知つて、丹後守から懇篤なる教へと寶藏院の槍の奥義を傳へられる。

針ヶ別所の山奥へお豊を擔ぎ込んだ銀治倉と金藏はこゝで一人のお豊を中に大格闘をはじめて共倒れになる。

七兵衛は植田家からさし向けられた門下生に認められ、そのピストルを避けて林の中に紛れ込み、水を呑まんと谷底に降りて見ると、獵師小屋の中でお豊が氣絶し、銀治倉と金藏が悶絶してゐるのを見て、之等を始末する爲に降りて來たやうな結果になる。

斯うしてお豊は七兵衛に助けられる。

お豊を途中で奪はれた龍之助は、それから單行して伊賀の上野の健屋の辻荒木又右衛門が武勇を表はした處に近い宿屋に入ると、そこへ多數の壯士がやつて來た。

その話を聞いてゐると京都で、田中新兵衛が姉小路少將を暗殺したといふ風聞である。そのうちに右の壯士等は自分達の座敷が狭いから龍之助のゐる部屋を提供せよといふ事

を宿の番頭を通じて申入れ、龍之助は頑として應じない、そこで、あはや血の雨が降らうとした時、この一座の大將であつた一人の浪士が味方をたしなめて到抵君方はその敵でないから控へろといつて抑へ、改めて龍之助に挨拶して、どうださし當つて吾々と一揆に大和の方へ行つて見る氣はないかといふ。

この大將分の浪士こそ十津川の天誅組の巨魁松本圭堂であつた。

龍之助は松本の意氣がおもしろいし、自分も漂流の身を強ち東へ歸らねばならぬといふわけもないのだから、その一行に加はつて又も大和路へ引き返すことになる。

針ヶ別所の山の中で七兵衛に發見されたお豊は息を吹き返して又叔父の源太郎の許へ送り届けられる、そこで明け暮れ車へ向つた龍之助の事を案じ暮してゐると、或日のこと、一團の壯士が自分の店の前を肅々と通つて行くのを見る、その中の一人が、どうしても龍之助でなければならぬと見て、さうだとすれば當然この宿へ立ち寄ることゝ期待してゐたのに、さつぱりその様子がなく右の一團は素通りして何處へか行つてしまつた。

お豊は失望の餘りフラフラと家を立ち出で、後を追ひかけて初瀬川の川原まで行つて見ましたが、もう夕暮になつて尋ねる人の影も見えない、ぼんやり蛇籠に腰かけて考へ込んでしまつてゐると、そのうしろからファイに出て來たのが金藏である。

金藏は針ヶ別所の山中から息を吹き返してのたり出て藥賣りの風をしてお豊をつけ狙つてゐたのであつた、こゝで金藏が死をもつてお豊をおどしたり、泣いたり遂にはお豊を殺

すのみではない、薬屋の家にも火をつける、植田の陣家にも火をつける、その上に三輪の神杉まで鐵砲の煙硝で焼いてしまふと脅かされ、お豊は當惑の餘りどうしていゝか分らないことになつて了ふ。

この時、對岸の櫻井の町で天誅組壯士の一行と宿をとつた龍之助は、夕飯を済ますと、お豊をたづねやうとして獨り三輪の宿へとつて返さうとしてこの川原まで来て見ると地蔵堂の竹藪の處で二人の人影が話してゐる、それを聞くと意外にもお豊と金藏であつた。思案に餘つたお豊がどうしても逃れられない運命を覺悟して一族や植田家や三輪の神杉の爲に犠牲となつて金藏に身を任せるといふことを云つて了ふ。

金藏それを聞いて狂喜する。

さう話が決まつたら、自分の親戚が紀井の國の龍神といふ處にあるからこのまゝ一思ひにそこまで逃げて了はうといふ。

それを立ち聞きした龍之助は撫然として女心のたよりのないのを觀念したのか、何とも云はないで見のがして了ふ。

三輪の神杉の巻終り

第五 龍神の巻

天誅組がいよゝ／＼勃發したが四藩の大兵を引きうけて力が足りない。

中山忠光卿は浪花へ落ち、松本圭堂、藤本鐵石、吉村虎太郎等の巨魁或は戦死或は自殺する。

鷲家口の戦ひから落ちのびた、十一人の浪士がある、十津川の沿岸を紀州の日高川へ落ちて行かうといふのだ。

彼等は漸くにして山の中にほつ立ての獵師小屋を発見する、中に居たのは藍玉屋の金藏に鐵砲を教へた獵師の惣太であつた。こゝで落武者等は猪を煮させ、酒を飲んで前途の相談をする、獵師惣太はテツキリ天誅組の落武者と見てこつそり訴人に出かける。

その後で一行が評議をしてこれから落ちのびて恥辱をとるよりは湊川に於ける楠正成公の最期を學び、潔く腹を切つて死なうではないかといひ出した。

一同異議なく最期の覺悟を決めた時に、

「拙者一人だけは死にたくないから切腹は御免蒙る」といひ出したものがある、それは机龍之助であつた。

一同氣色ばんで或は車快とあざけり不忠と罵つたが、龍之助はとり合はない、一座の酒井賢次郎がはやる連中を抑へてその意志に干渉せしめないことにし、龍之助を除く他の浪

士は總て最期の盃を舉げ、劍舞をして慷慨淋漓たる士氣を鼓舞する。

藤堂の追手の大將藤井新八郎は落ち武者を追つてこゝまで来る。宇津木兵馬もその手に屬してゐた。そこへ獵師の惣太が訴人に來た、藤井は獵師に火藥を授けて、うちから爆發させてからめ取らうとする、やがて立ち戻つた獵師の惣太の手で火藥が爐の中へ投げ込まれると大爆發、十餘人の浪士悉く死傷する。

紀井の國龍神村の温泉場へ大和方面から落武者探しの手がいいる。

室町屋といふ宿の帳場で帳合をしてゐる若い女房は、初瀬川原から金藏に連れられて來たお豊であつた。今役人が持つて來た人相書を讀んで見るとどうもその噂ぬる人が机龍之助であると思はれてならない。

そこで、お豊は思案してゐると。世話役が藤堂家の家中だといつて宇津木兵馬を案内して來る。兵馬はお豊を見て自分の嫂お濱の倅を思ひ浮かべる。

その夜更けてお豊は「清姫の帯」といふ雲を空で見ると、この雲を見た者はだまつて、磯ヶ池で水ごりをとつて龍神様へお籠りをしないことには清姫様の怨靈で自分も生きながら蛇になり、龍神一村に大災難がかかるといふことを傳へられてゐる。

お豊は今それを見たのだ、宵のうちの人相書といひ、夜更けての清姫の帯といひたゞならぬ思ひに迫られてお豊はその晩遂に龍神の社へ參詣に行く氣になる。社の石段の下に立つて見上げてゐる處へ金藏が歸つて來た、金藏はこの頃中和歌山迄行つた戻りである、金

藏はお豊を連れて戻らうとするが、お豊はどうしても一人で行かなければならない信仰があるのだからと云つて、金藏を下に置いて自分だけが龍神の社へ行く。

まづ磯ヶ池の前で帯を解いて誰れにも見られないやうに、そこで裸體の身を瀧壺に入れる。

暫くして左の方の細道から何者か降りて來るやうだ、六部のやうな深い笠、白衣の人、それがお豊の水ごりをとつてゐる池へ眼を洗ひに來る、どうもその形、格好に見たことがあるやうだ、それが龍之助であつた。

龍之助は十津川の獵師小屋が爆發した時火藥に目をふかれて遂に失明の身となつた、からくもこゝまで落ちのびて、こゝの護摩壇の修現者に身を寄せて、専ら眼の療治を試みてゐたが、どうしても光を取り返すことが出来ない。

宇津木兵馬は藤堂の手に加はつてこゝまで後を追ひかけて來た、山中で袖がたしかに流れて幾度も眼を洗つてゐる落人を見たといふそれが龍之助であるやうに思はれてたまらない、どの道傷いてこの龍神八處のうちに隠れてゐるに相違ないと見極めをつけ、その夜この龍神の社近くまで來て見ると金藏がお豊といつて、探しまわつてゐるのに出くはし、お互ひに解せない心持。

お豊は遂に龍之助としめし合せて此地を立ちのいて伊勢へ落ちようといふことになる。龍之助は護摩壇に立ち戻つて修驗者に自分の眼の絶望なることを語り、その夜與八と郁太

郎の夢を見る。

悪女房お豊がなくなつたので金藏がチレ出す、金藏はまづ兵馬に向つてあらぬ疑ひをかける、前の晩女房が外出する、そのあとでまた兵馬の龍神社頭へ行くのを見かけたからだ、さうして兵馬に激しくからみつき遂に切つてかゝる、兵馬はそれを取り抑へて家の者に引き渡す。

兵馬はその夜怪しい者がこの宿から忍び出るのを認め捕へて見ると金藏の女房お豊であつたが、お豊の哀訴歎願を聞いて見ると、見遁してやらないわけには行かぬ。

然し餘り馬鹿々々しいのでその翌日は宿を替へてしまつた。

金藏は遂に嫉妬の餘り狂亂してしまつた。

脇差を抜いて當るを幸に斬てまわり、お豊兵馬の名を呼びつゞけながら狂ひまわり、臺所の火を取つてなげ散らし大火事を起してしまつた。

この火が遂に龍神全村を焼くやうな事になつた。村人が火事を消すことに奔走してゐる間、日高川の川原にひつかゝつた一つの死骸がある、それは室町屋の金藏であつた。宇津木兵馬はたのまれてその檢死に向つたが、斬られてゐる金藏の切り口の鮮かさに驚歎しながら思ひ合ふことがある。

この災難を後にして失明の龍之助はお豊に尋かれて日高川に沿ふて海の方へ落ちてしまつたのである。

七兵衛、お松も兵馬のあとを追つて、此地へ馳けつけたが、兵馬等が龍神村を立ちのいた時も、まだ龍神村の火は消えなかつた。

龍神の巻終り

第六間の山の巻

伊勢の國の古市の間の山に、間の山名物のお杉お玉といふのがある、この時分のお杉お玉のうちお玉は殊に美人で古曲の「間の山節」といふのを心得てゐた、そのお玉が今古市の大樓備前屋へ呼ばれて歌唄ひに行く。

お玉が行く時にはいつでもムクといふ豪犬がつき従て行く。

この日の備前屋のお客は神尾主膳其他江戸の旗本御家人の道樂者の一連であつたが興闌なる頃に間の山のお玉だけが知つてゐるといふ古曲の間の山節を聞いて見ようといふのである。

お玉は庭へむしろを敷いて客の前で間の山節を唄ふ、それは行基菩薩の作と稱せられる

次の唄

ゆふべあしたの鐘の聲

寂滅爲樂と響けども

聞いておどろく人もなし

花は散りても春は咲く

鳥は古巣へ歸れども

往きて還らぬ死出の旅

限りなき哀音を翳々として古曲の儘に歌ふのである、一方には華かな伊勢音頭の唄

かざり車や御車や、おむろあたりの夕暮に、花のかんばせ見たのしみも

といふはでやかな伊勢音頭、

この音を聞きながら、備前屋の別間で病み疲れて死なうとしてゐるのは、龍之助と龍神から落ちて来たお豊である。

お豊はこゝまで龍之助を勞はつて来たが、路用が盡きて動きがとれなくなつたのと、龍之助に眼の養生をさせたいとの爲に備前屋に身を沈めて遊女の勤めをすることになつたが、病を得てこの一室に幽閉同様の身となり、今お玉の唄ふ間の山節を聞いて、全く死ぬ氣になつて了ふ。

客の御用を濟ませたお玉は、ムク犬を連れて備前屋を出て、裏通りにかゝると裏の木戸口がそつと開いて闇の中から出て来た女は病み疲れたお豊であつた。

お豊はお玉を見かけて之を大湊の船大工與兵衛の許に厄介になつてゐる龍之助の許へ届けて貰ひたいと云つて一封の手紙と二十兩の金をお玉に渡して頼み、それから引き返して

自害して了ふ。

お玉はあやしきいぶかつてゐると其處へムク犬が走せて来た、見れば口に結構な印籠を咬へてゐる、どうもおかしいと思ひながら自分の家へ引き返す。

その同じ晩に又備前屋へ泊つてお玉を招いた江戸旗本の大一座が盗賊に襲はれて、皆んなそれ／＼持ち物を奪はれる、これは七兵衛の仕業であつたが嫌疑がお玉の上にかゝつて了ふ。

お玉の家のある處は拜田村といつて、昔の特殊部落のうちであつた。

お玉は今日も間の山へ縁ぎに行く前にムクが咬へて来た印籠を役所へ届け、それから昨晩備前屋の裏口で頼まれた手紙と金もその人に渡して了ひたいと思つたが、自分は全然字が讀めない。

どうしようかと隣りのおかみさんと話をしてゐる處へムクが只ならぬ勢で走り込む、同時に見馴れぬ男がやつて来てお玉の印籠を手に取り、調べる振りしていきなり十手をひらめかして取押へやうとする、ムクが猛然としてその捕り方に飛びかゝつてお玉を擁護する猛犬ムリのおかげでお玉はその場を逃げ出した。

ムクといふ犬は有ゆる犬より強いが容易に怒らず、容易に吠えないけれど吠える時には六尺の男が戦慄し街道を通る牛馬でさへも立ちすくんで了ふ。

捕方の手を通れたお玉は、鹽が丘(尾上山)に近いあばら屋の中まで逃げて来た。

そのあばら屋の中には宇治山田の米友といふのが控へてゐる。

この男は身の丈四尺位、一見子供かと思へば顔には仔細らしい皺が曇んでゐる、年寄かと思へば年寄でもない、顔は猿の襟で口が大きい、筋肉は隆々として鐵片を叩きつけたやうで神將の名作を型にとつたやうな骨格、髪を茶釜に頭の真中で押し立てゝゐるが、竹竿で鶏をいちめたイタチを突きさしてゐる處へお玉が逃げ込んで来た。

二人は兄弟よりも親密な間柄になつてゐる。

お玉は無茶苦茶に米友にすがりついて自分は役人に追はれてつかまりさうだ、何か何だか分らないが、ムクが殺されるといけないから、早くムクを助けて来て下さいといふ、米友は心得て五色の網の竿をかい込んで走せ出す。

お杉お玉が間の山へ出て客を呼び、客の投げ銭を撥で受けると同様にこの米友は神宮の前の宇治橋に立つて網受けといふのを業としてゐる。

この網受けといふのは、織田信長の臣の鳥屋尾左京といふ者が浪人してたつきに困り、毎日大橋の下へ出て竹の先へ網笠をつけ、橋の上から客に投げ銭を乞ひ、本来槍の名人だから百錢に一錢も受け落すといふことはなかつた。

米友はこの傳來で、網受けと槍の使ひ方とを仕込まれたが天性の上手で、殆んど槍の極意に亘つて空を飛ぶものでも地を走るものでも突き外すといふことはない。

斯して米友が古市の町まで来て見ると、町は湧く様な騒ぎになつてゐる、それは主人を

擁護して捕方に向つたムクがこの町へ追ひ込まれたのである。ムクは自分擁護の爲に戦つてゐるが、町中總出で抑へやうとしても抑へられない、石を投げる者、打ち殺さうとする者大變な騒ぎで往來が止まつて了ふ。

そこへ飛び込んで来た宇治山田の米友、網受の棒をりゆう／＼と振り廻してムクを殺すと承知しねえぞと云つて武勇を振ふ。

ムク犬一匹にさへもて餘した群集が米友にあげられて愈々もて餘し遂に鐵砲で打ち取らうとする所で今まで網受であしらつてゐた米友が憤然として網受の袋をとり拂つて穂先きをはめ込み眞槍で群集の中へ突き込み突き崩し、ムク犬と兩々鐵砲のつゝ先きを外さうとする。その勇猛果敢の動き振りを丁度通りかゝつて見てゐた宇津木兵馬が感心し、取り方の役人の槍を借り受けて米友に向つて突き出して見る。

兵馬の槍先きに舌を捲いた米友は、アツと思ふ瞬間槍を捲き上げられると、うしろの大覆へ飛び上りムクを殺すと米友が宇治と山田の町へ火をつけて焼き拂ふからさう思へと啖呵を切つて、屋根から屋根へ傳はり姿をかくして了ふ。

やがて隠れが丘のあばらやへ戻つて来た米友は、危険の身に迫るを感じ、お玉をつれて遮二無二逃げ出して了ふ。

逃げられるだけ逃げて、途中、出逢橋といふ處を越えようとしてお玉が小川の中へ足を沈らしてびしよぬれになる、米友は山の蔭へ連れて行つて着物を脱いですつかり乾かして

ある。その時お玉の着物の間から落ちたのは前の晩に備前屋の裏でお豊から頼まれた一封の手紙であつた金の方は置き放しにして来たが手紙はこゝにある、今迄忘れてゐたが、濡らして申譯がないと、米友が火を焚いてそれを干かしてゐるうちに米友は字が讀めるので手紙をすつかり讀んで了つて、これはなか／＼大變な手紙である、この手紙を書いた女の人は、もう自害してしまつてゐる、自分の身を犠牲にして男に貢ぐ金であつた、さうしてこの手紙の末にはお玉のおはこの唄、ゆふべあしたの鐘の聲が書いてある、あの唄を冥土のみやげに聞いて死んで行くといふ事が書いてある、お玉がそれを聞いて、それは知らなかつた申譯がない、申譯がないどんなにしてもこの手紙だけは届けてあげなければ義務が済まないといふ心になる。

さうして二人は危険を犯し宛名の大湊與兵衛様方小島といふ人を訪ねて行つて見る。

與兵衛はお玉が訪ねて来たのに意外を感じたが、事情を一度聞いて見ると成程と思ひ、海邊に近い船小屋の奥の方へお玉を導いて行く。

其處には龍之助が暗たんたる病氣の中に眼を洗つてゐる、お玉は何となく恐ろしくてたまらない、ヤット精一杯に頼まれたことの仔細を話すと、その男は存外冷淡なのに躍氣となつて了ふ、あの女の人が身を犠牲としてまでの心盡しも、自分が命がけでこゝへ訪ねて来たことも一向感激の色もなくその手紙をお玉に讀んでくれといふ、字の見えないお玉は恥かしがつたがそれでも米友が讀んでくれた要領と、米友をして讀まずにはゐられなくし

た事情とを申述べたが、やつぱり感激も何もない冷たい人、お玉は遂にくやしくなつてこの女の方を殺したのは自分である、自分が悲しい歌を唄はなければあの人には死ななかつたのだといふやうな事を口走しする。それでも龍之助は冷然として感情が動かない、だが餘りのことに腹を立て、立ち歸らうとしたお玉に一本の銀平打のかんざし、それはお豊のかたみである處のものを與へようとした時に何か知らず泣けて／＼たまらないことになつた。その時分、外に護衛かた／＼ついて来た米友が、外で口笛をならす。米友とお玉の立ち廻つたことが役人に知れて取りまきが来たのだ、米友はたうとうそこで捕まつてしまつたが、お玉は與兵衛の舟へ助けられて乗せられる。

攫て又十八文の道庵先生が、お伴を連れて日中提灯をつけて伊勢詣りに古市の町へ乗り込んで来る。

神尾主膳の先代の愛妾お朝も亦旗本連と同行の伊勢詣りに来て宿に控へてゐた。

一方大湊の濱で水の中を潜つて来た處を折り重なつて捕へられた米友はお玉の家にあつた印籠と身分不相應の二十兩の金とが證據となつて盗人の罪を遣れられない。

宇治山田の神領では血を見る事を忌むから罪人を殺すに刃を用ひないで隠れが丘から地獄谷へ突き落して了ふのだ。

米友が仕置場へ連れて行かれる途中、七兵衛がそれを見送つて冤罪を憐れんでゐると、ムク犬が来て七兵衛を追ひかける、七兵衛それに恐れをなして逃げる。

氣の毒な米友は遂に隠れが丘から冤罪で地獄谷へ落されて了ふ、こゝへ突き落されれば生きつこはないのだが、米友の内體は特別に出来てゐた。その骨だけでも拾つてやらうと夜中にそつと大湊の與兵衛が米友の死骸を地獄谷からひき出して擔ひで歸る途中、いゝ心持で酔つばらつて路傍に轉がつて寢てゐた道庵先生に引かゝり、こゝで偶然米友を道庵に診て貰ふと慥かに生き返る見込みがあるといふ、事實、米友のからだは特別に出来てゐたので、とうとう道庵の力で又此の世へ呼び戻されたのである。

お絹はまた、宇津木兵馬を見つけて之をからかつたり、兵馬の師である島田虎之助が毒殺されたといふやうなことを話して兵馬に氣を揉ませたりする。

龍之助の眼は少しよくなつて、おぼろげながら物が見えるやうになる。兵馬とお松とお玉を乗せた船は大湊の濱から遠州灘の方へ向つて東へ行く。

道庵は桑名から熱田の宮へ歸り路。

七兵衛とムク犬は何處へか行つてしまつた。旗本一行及お絹の連中も伊勢詣りを済ませて東へ向ふ。

問の山の巻終り

(第一一册)

第七 東海道の巻

おぼろげながら兩眼の明を得た机龍之助は虚無僧姿で伊勢の國から東海道を下る、桑名の渡し場に大きな紛れ犬がある、即ち豪犬ムク犬だ、どうしたものか龍之助のあとをついて離れない、七里の渡しから濱松まで来ると犬の姿を見失ひ、濱松の五社明神の前で、龍之助が數多の武士達にからかはれてあはや争闘に及ばうとするのを通りかゝつた助け舟は切妻の花の師匠お絹であつた。

お絹は濱松が故郷である、伊勢からの戻り、こゝに暫く逗留してゐる。虚無僧の龍之助に見處を置いて自分の宿所へ連れて歸る。

お絹にほだされて泊つてゐるうち龍之助の眼がぶり返す、又全く見えなくなつて了ふ、お絹はどうしたものか、此の失明の刺客を憐れんで身なりから旅の用意ぬかりなくとよへてやり、一緒に連れて又も東下り。

天性の早足で兵馬の爲に街道を東西に走り巡つてゐる七兵衛は駿河の國薩埵峠あたりでがんだりきの百藏といふねずみ小僧を氣取つた若い盗人と道づれになる、がんだりきも足が早い、七兵衛と後になり先になつて腕比べ足比べ。

やがて濱松に着くと傳馬町の大米屋といふので、今日出立の龍之助と合宿になり一間に紙帳を吊つて音も立てずに控へてゐる龍之助を二人が目利きして一番當つて見ようと夜中に交る／＼スキをうかゞつて龍之助の座敷へ忍び込んで見たが、たうとう失敗して夜が明けける。

宇治山田の米友は一旦隠れが丘から突き落された身を與兵衛と道庵に助けられ、健康は舊に復したが足だけはびつこになり、故郷を立ちのいて、獨り江戸へ向けて旅をする、濱松を通り抜け天龍川の岸の天龍寺といふ大きな寺の縁の下を見かけて一夜の宿を借りる、この晩、天龍寺のお堂では遊行上人の説教があり、善男善女が群れ集まつて上人の神通力を喝仰し、名號のお札を授つてゐる。

がんりきの百藏は本堂へ上り込んで集つた善男善女の中に交り頻りに巾着切を稼ぐ、高座の上から遊行上人に見破られて素早やく、くらまして逃げて了ふ、その身代りに嚮往となつたのが縁の下に寝てゐた米友であつた、米友は多勢に捕へられようとしたのを奮闘して飛び出して、遊行上人の衣に縋る、上人は米友が決して悪漢でない事を證明して自分の件に加へて東海道を下る。

お絹と龍之助は駕籠で濱松を出立する、遊行上人の一行もそれと前後して東へ向ふ、七兵衛とがんりきはこの二つにつけつまわしつして各々腕比べを試みる。

この以前、駿河の清水港から上陸した兵馬お松の爲に七兵衛が立ち廻り、駿河から久留

山の鳥居前でがんりきの百藏はお絹をそゝのかし、龍之助を隠して七兵衛をだし抜かうとする。

伊勢の大湊から與兵衛に助けられて和歌山丸といふ船で東へ送られたお松、兵馬、お玉のうちお玉はその時から藝名を廢めて本名のお君にかへる。船酔でたまらないから、遠州の三濱といふ處で途中ひとり下船をする、その濱の船頭の許に休息してゐるうち船頭に怪しい素振りがあるので逃げ出して行き詰り、たうとう或る祠の中で自殺しようとした時に、濱松まで龍之助について来たムク犬が眞しぐらに飛んで来てこゝで主従相抱いて嬉し泣きに泣く。ムク犬を得てから後のお君は道中も安全に東海道を下つて行く、清水港から三保の松原へ来た時に、七兵衛の探索で龍之助を此處へおびき寄せ兵馬に打たせようとしたのがんりきが邪魔をして馬に乗せた龍之助を脇道へ連れ込んで了ふ。これより先はお君だけを途中に残して駿河の岡清水港に着いた兵馬とお松、七兵衛の奔走で三保の松原で龍之助を待ち合せてゐることになつた、そこで行き違ひになつてお絹を振り拂ひ、進んで行かうとするのを通りかゝつた宇治山田の米友が認め、誤解から憤慨して兵馬の行手に槍をつける、この槍は遊行上人のお伴をしてゐる間途中の宿屋で手に入れたものである、兵馬は當惑しながら相手になつてゐると、ムクがはづむのに導かれてこの場へ馳けつけたお君、見れば一方は無二の幼な馴染である米友であり一方は知らない顔でもない宇津木兵馬、前後を顧る暇なく白刃の中に飛び込んで米友に縋りつく、その間に兵馬は龍之助の後を追うて

去る。

その後でお君と米友は一別來のことを語り會ひ、二人ともとても生きて逢はれまいと思つてゐたのが、斯うなると夢のやうな喜び、こゝで兄弟よりも親しい幼な馴染と家來よりも忠實なムク犬とが水入らずに東海道の旅を續けることになる。

駿河の國庵原村の無住同様な法華寺、そこへ龍之助を連れ込んで来たがんりきの百藏、その晩壇を中にしてがんりきが龍之助をからかい、自分もひやくする、それは濱松の宿屋で脅かされた龍之助への仕返しもあり、兼ねてこの色つぼひ切髪をものにして、相手に鼻を明かさしてやらうとのたくみである。

その晩、やがてお絹が来て、がんりきが去る、この古寺の壇を圍んで龍之助とお絹とがよもすがら物語りをする、お絹はそこで烏田虎之助が毒殺された一伍十什を龍之助に物語る。

東海道の巻終り

第八 白根山の巻

龍之助は烏田程の達人も毒害を免がれ得なかつた運命の程に深い感慨を催す。

翌日は東海道の本街道へ出ないで、徳間峠の間道を通つて山駕籠で甲州入をすることに

なる、昨晚何處へか消えてしまつたがんりきが又出て来て、はしやぎ廻りながら、駕籠側について徳間峠の頂上迄来て、こゝで一休みし、がんりきはお絹をからかいながら携へて来た酒を汲み交したりなどする、そのうちに駕籠屋ががんりきの手首にある甲州入墨を見付て駭ぐ、先程からお絹とがんりきのいぢやつきを聞いてゐた龍之助、この時のつそりと白刃を掲げて駕籠から出て来る、がんりき驚いて道標の蔭にかくれたが、龍之助の太刀先にすくんで了ひ、どうにもこうにも動きがとれない、そのうちに右の腕を打ち落されたが、お絹を引ずるやうにして甲州境へ飛び込む、駕籠かき共はばらばら逃げて了ふ、その後で龍之助は只一人道標の蔭に昏倒して了ふ。

やゝあつて此處へ通りかゝつた甲州の行商婦山の娘達の一行の爲に龍之助が助けられる。三保の松原で龍之助を見失つた兵馬は七兵衛の案内で、富士川べりを辿つて福士川の邊へくると、溢れた水上から人間の腕が一本流れ着いたのを見て七兵衛はそれががんりきの腕であることを認め、徳間峠の方へ進むうち、金堀り少年の忠作といふに逢ひ、七兵衛がこの少年にへこまされる。龍之助に腕を打ち落されたがんりきは瀕死の大熱でお絹と共に忠作の家に隠れてゐる、忠作は自分が堀り貯めた金を持つてお絹と逃げ出す、大熱でうは首を云つてゐるがんりきをおいてけぼりにして。

山の娘の一團に助けられた龍之助はその頭分のお徳といふ女の家に取り取られて介抱をうける、お徳の先夫は大蘆の亂に遭れて来た浪人であらうとの事だが、藏太郎といふ子供

を殺して死んでしまった、山の娘達は龍之助を健康にしてお徳の入夫にでもさせたい心持、お徳も亦まめやかに龍之助の爲に盡し、遂に白根山の麓の奈良田の温泉迄連れて行つて龍之助を療養させる。

こゝの温泉に療養中この山中まで人を捜りに来た山崎と龍之助が不圖對面して割下の形勢を聞く、山崎は龍之助に當時甲府にある神尾主膳を紹介して奈良田を立ち去つて了ふ。

この地の富豪望月家に婚禮がある、その婚禮に乗じて當時甲府勝手に廻されてゐた神尾主膳が、部下の悪者をかたらひ、望月家に古來古金銀が隠蔽してある、望月家は甲州金の金堀りをする總元締を徳川以前から代々勤めて、夥しい金銀を貯へてゐる筈だからそれを捲き上げようとの魂膽。

神尾主膳の名を利用してこゝへ乗り込んだ悪人共が野月一家へ難題を吹きかけ、若夫婦を人質にして拷問にかける、その拷問に泣き崩れる聲が龍之助の療養して居る座敷まで聞こえる。

見ても聞いてもゐられないお徳は、誰れか行つて口を利いてやる人はいないかと氣を揉む、龍之助は、そんな事をして却つて斃蛇だ、見込まれたのが望月家の災難だから諦めるより外はないといふやうなことを云ふ。

神尾主膳一行の悪人共が斯うして若夫婦を折檻してゐる席へ、水戸の山崎と龍之助が、神尾

主膳殿にお目かゝりたいと云つてひよる／＼と色の青白い侍がやつて来る、一座が驚いてゐる處へ槍を携へて静々と入つて来た龍之助、この槍は當地で堀り出物の名槍だが神尾殿に通上いたす、その代りこゝの若夫婦を助けてくれといつて座りながらその槍を突き出して偽神尾主膳の咽喉をつき通して床柱へ縫ひつけて了ふ。

白根山の巻終り

第九 女子と小人の巻

伊勢から、歸つた道庵先生が深井からお客に来た奥八を連れて、兩國橋に見世物見物に出かける、その中に當時評判の印度の黒ん坊の槍使ひといふのがあつて、蒲郡の人氣を占めてゐる、それを道庵、奥八が見物してゐるうちに道庵が、カラ／＼と笑ひ出す、黒ん坊の槍使ひといふのは即ち、宇治山田の米友をこしらへたものだ、それを道庵が見破つたので正直な米友がテレ切つて樂屋へ逃げ込んで了ふ。

この興行はお角といふ女輕業の親方がやつてゐるので、お角は三島でお君と米友を拾ひ上げて一座の中に加へ、お君は三味線が達者だし、米友の形が變つてゐるのに槍使ひに妙を得てゐる處から、こんな一山を張つたのだが、この道庵の見破りから米友がたうとうお君、ムク諸共小屋を追出されて了ふ、お君の方はまだ脈があるので、親方の處に復歸する

見込がある。

其後米友は金貸の家へ奉公することになる、この金貸といふのが甲州から逃げて来た忠作といふ金堀少年と切髪のお絹とであつた、一方お君の方は又女輕業へ呼び招かれて一處請共甲府へ旅稼ぎに出ることになる、米友はお君の前途に就て心配する。

米友は金貸忠作の許に不平ながら使はれてゐたが、柳原の河岸を通りかゝる時、集めた金を亡くして了ふ、夜鷹のお蝶といふのが正直にその金を保留して置いてくれたが、それが爲に奉公先がまづくなつて又おん出て了ふ。

この時分、江戸の市中に貧窮組といふのが出来た、町々から貧乏人が押し出して来て、お粥を食つて廻る、米友は貧窮組の中を潜り歩いて柳原の方へ来て、正直な夜鷹のお蝶にすゝめられて鐘撞堂新道のお蝶の親方の處へ身を寄せる。

甲府の一蓮寺に江戸名物女輕業の大一座がかゝつて大人氣を占めてゐる、その中でも殊に呼物となつてゐるのはお君の所作事であつた。

神尾主膳はそつとしのびで来て見てお君に懸想する、親方のお角はよい御最負だとすゝめてやる、お君はムク犬を連れて行きたがるが、ムクも今では技で仕込まれてこゝの一枚看板だから残して置いて神尾のお茶屋へお君を送られて行く。

一方この大一座へ役割の市五郎といふのが道入り込んで木戸を突かれ、なぐられた腹癩せにその組下の折助が繰出で輕業を擧撃する、お角は齒咬みをして、力持ちのおせいは

じめ必死に防戦したが、たうとう小屋へ火をつけられて女輕業一座は皆んな擔がれて了ふ、ムクだけが忘れられ、鐵の鎖につながれてゐたのを解いてやるものがない、見す見す焼き懸されようとするのをお茶屋に呼ばれてゐたお君が命がけて馳け込んで鎖を解いてやる、ムクは猛然として荒川土手まで擔がれて行つた女輕業の一座の後を追ひ、折助共を噛み散らして美人連を助ける。

其間に折助の金助といふおつちよこちよいが、お君を引きさらつて、神尾の處へ捧げようとする。

宇津木兵馬はこの騒ぎの翌日、白根の山ふところを指して出かける、その途中ムク犬に追はれた金助を助けてやつて案内に立て、釜無川の岸の堂守の家で木兎入と碁を打つてゐる、夜中になるとムク犬が来た、お君は抱へられてこゝに隠されてゐたのだ、そこで兵馬はお君を助ける、村人が誤解して襲つて来る、兵馬はお君とムク犬とを連れて飯澤まで来て落つき、そこへムクとお君を安息させて置いて自分は奈良田の方に分けて行く、この時分お君は兵馬を慕ふ氣持ちが出て来る。

女子と小人の巻終り

第十 市中騒動の巻

四〇

白根入りをした宇津木兵馬は奈良田へ來ると偽役人の首が曝されてあることから、委細の事情をきき、龍之助と覺しい者がその偽役人を殺して自分はその駕籠で甲府へ乗り込んで來たことを聞き、又甲府へ取つて返す。

甲府の城内で、金藏破りらしい盗人を見咎めたが、却つて自分が嫌疑を受け入牢の身となる。

江戸方面では、貧窮組が流行を極め十八文の道庵が、それを嬉しがつて野次り廻る、この貧窮組が、忠作お絹の家で亂暴を働らき、その間に浪人者が計画的に金銀財物を強奪する、忠作はそれを憤慨する。

本所鐘撞堂の相模屋といふ夜鷹宿へ落つた米友は、兩國橋を通りかゝると「天誅」の立札があるので、それをとつて川の中へ投げ込む。天誅といふのは浪士共が豫め豫告したり、札を立てたりして置いて富豪を犯すのだ、誰れも後難を恐れて手を觸れないのを、米友が投げ込んだ事によつて、本所相生町の箱屋惣兵衛といふ金持の家の留守番を引受けそこに亂入して來た二人の浪人者を追拂ふ。米友に追拂はれた浪人者は金貸忠作お絹の家を荒した浪人と同じ者である、途中それを見つけた忠作が後をつけて行つて見ると三田四國町の薩摩屋敷へ入つて了ふ。

お松はその時分薩摩屋敷の隣りの徳島藩の中屋敷へ奉公をしてゐたが、或る日七兵衛から兵馬が甲州で間違つて捕へられたといふことを聞いて、心配の餘り幸ひ一旦仕へた神尾主膳が甲府にゐることを聞いて、それを頼んで兵馬の助命運動の爲に甲州行をしようと決心する。

この時分薩摩屋敷の内外の動靜が種かでないので庄内藩が警戒する。がんだりきの百藏が龍之助に片腕を落された手傷も治り、江戸へ出て上野の山下で床屋を開く。

その店先きで將軍家の悪口を云ふものがある、それを當時茶袋といはれた歩兵隊が聞きつけて取り抑へようとするのを、道庵が出て來て二兩取りの手でうまく仲裁して器量をおげる。

女輕業のお角は甲州から戻つて來てがんだりきの百藏と馴れ合つて了ふ、その様子を當時根岸に住んでゐた切髪のお絹が見て嫉妬半分にからかつて、そこでお絹とお角との妙な張り合がはじまる。

そのうちにお絹はお松を連れて甲府にゐる神尾主膳の處へ乗り込むことになる、がんだりきの百藏は妙な意地から甲州へ行くお絹の後を追かけることになる、七兵衛がお角をけしかけてうまくそれを索制せしめやうとする。

これより先き、宇治山田の米友はお君の行方を心配して、再び兩國へ戻つた女輕業連の

處へ行つて見ると、お君だけが戻つてゐない、そこでひやかされたり、なぶられたり、腹が立つてたまらないのをこらえて兩國橋へ来て考へ込んでゐると、うしろから肩を叩いたのが七兵衛であつた。

七兵衛は護衛の爲に米友を見つけて之をお細お松につけてやることにする。

市中騒動の巻終り

第十一 駒井能登守の巻

甲府にまわされてゐた神尾主膳は、近頃自分の上役として駒井能登守が來るといふ事で業を煮やす、駒井は同じ旗本で、自分より年少ではあるが、美男と取間と器量とを以て秀出してゐる、當時の新知識であつてそこで神尾は同志と謀を合せて駒井を陥れようとの腹をきめる。

甲府へ新任の駒井能登守は、同勢十餘人を率いて甲州街道、駒木野の關を通りかゝり、こゝで血迷つてがんだりきの後を追ひかけて來たお角に好意を持つてやる、それから悠々と甲州路の旅を續ける間にがんだりきの百藏が出没する、

鶴川の渡し場で米友と川越人足の大喧嘩に立ち會ひ、駒井が仲裁で米友を坊主にして事済み。

黒野田の宿へ着くと、こゝで駒井能登守の一行と、お細、お松、米友の一行とが合宿になる、お細は駒井の宿を取計らつて呉れたお禮心で、お松に給仕をさせたりなどする、そこへ又がんだりきの百がのたり着いて、遂にお細をさらつて笹子峠の方へ行つたが力及ばず、お細は又宿へ戻つてケロリとしてゐる、米友は折角護衛の役を頼まれながら兎角やり過ぎが多かつたり出し抜かれたりした爲お細から一封の金を與へられてお拂ひ箱になる、米友憤慨してその金を叩きつけ單獨で甲州入りをする。その後を追かけたお松は頼りない氣持ちになる。

笹子峠を越えてお細とお松を迎へかた／＼出て來た神尾主膳はわざと駒井能登守の一行に無禮をし、駒井の一行が追ひ込んで來たがんだりきの百藏をかくまつたりなどする。

駒井能登守の巻終り

第十二 伯耆の安綱の巻

富士川岸に残されたお君は、病み上りの身をムクを連れて兵馬の後を追つて白根入りをしようとしたが、途中で倒れたのを、甲州一番と云はれる有野村の馬大盡の家の雇人幸内といふ若い男に救はれる、この馬大盡即ち藤原家にお銀様と呼ばれる妙齡の娘があつた、庄れつきは非常に美しいけれど、幼い時に繼母の爲に火傷をさせられて、悪鬼の様な顔に

なつた爲世を呪ひ拗ね切つてゐる、幸内といふ若者だけをたつた一人可愛がつてゐる、そこへ幸内がお君を連れて来た、お銀様はまたお君を變態的に可愛がる、そしてお君はムクと諸共に藤原家の厄介になつてゐる。

或日幸内がお銀様に頼んで同家の秘蔵伯暗安綱の刀を借り受けて甲府の刀劍會へ持つて行く、それを神尾主膳が目をつける。

駒井能登守は馬大盡の屋敷へ馬を見に来る、こゝでムク犬の爲に危難を救はれた縁から始めてお君を見て、自分の江戸本邸へ残して置いた病中の奥方に、そつくりなので心を惹かれる、お君も亦駒井の殿様の器量に見とれる、それをうかゞひ知つてお銀様が嫉妬の心を起こす。歸途、駒井は家來と共にお君の噂をし、あれを邸へ引取りたいやうなことを話す。

その前後、甲府の町の巷々に凄惨にして酷烈なる辻斬が盛んに起る、當人が何人であるかわからない無辜の人も斬られるし相當の達人までが苦もなくやられる、そのあたりをつけることに當局者が苦心慘憤し、中には新任の勘番支配駒井能登守の仕業ではあるまいかと想像する者さへある。

甲府の龍岡ヶ崎の古城跡の屋敷の中で、燈下に刀調べをしてゐる者がある、それは机龍之助であつた、もとより眼は見えない。龍之助が刀調べをしてゐる室の隅に長持があつて、その中に毒を飲まされて投げ込まれてゐるのは馬大盡のお銀様の愛人幸内であつた。

そこへ神尾主膳が見えて、この通り伯暗の安綱を手に入れたから一つためし斬をしてくれといふ、龍之助はさういふ古刀は寶庫に秘蔵すべきものでためし斬などすべきものでないといふ。その晩手柄山正成の刀を持つて獨り甲府の市中へ辻斬に出かける。

甲府八幡宮の茶所で宇治山田の米友が白丁を着て烏帽子をかぶり社の燈明に油差をしながら、でえだらばつちを、待つてゐる、そこへ剣道の師範役の小林といふのがこの頃の辻斬を探索の爲にやつて来て話し込む、そこへ七兵衛と鍋焼うどんが辻斬を避けて轉り込む。

翌日この八幡社へお銀様がお君を連れて参詣に来ておみくじを取る、歸りにお君はお銀様にすゝめられ城内に駒井能登守を訪問してよき待遇を受ける、それを外に待つてゐるお銀様は自分がすゝめてやつたに不拘嫉妬する。

役割の市五郎が一物あり氣にその様子を見る。

伯暗の安綱の巻終り

(第三册)

第十三 如法暗夜の巻

駒井とお君との話がはづんでゐる間、外に待つてゐたお銀様を役割の市五郎の子分共が

巧んで無禮をする、それを市五郎が救ふやうに見せて、お銀様を自分の家へ連れて来る。八幡様に燈明さしをしてゐた米友は、油を買ふべく市中に出ると、フトお君の姿を認め、後を追かけて、役割市五郎の處まで来たが、折助共にはじまれる。市五郎はお銀様を馬大盡の娘と知つてその奇難を助けてやつたことにして大盡へ取り入らうとする魂膽だ。それからお銀様を神尾主膳の嫁にほしいといふやうな事を持ち込む、お銀様は駒井の奥方の寫眞を見てお君のものと誤解して愈々嫉妬を感じた上に、愛人の幸内が行方不明になつたので一層氣が荒くなり、ついに反抗的に、神尾家へ行く氣持になる。

お絹とお松とは神尾主膳の邸へ来てゐて、お松は獄中にゐる兵馬のことを思ひ、お絹はまた取り入つて来る役割の市五郎を何かに利用せんとする。

宇津木兵馬は金藏破りの嫌疑で甲府の獄内につながれてゐる、合半に南條力、五十風甲子男といふ勤王の浪人があつて之等がしめし合せて遂に牢破りをする。

お君の身はもう藤原家から申受けられて駒井能登守の左右に侍いてゐることになる、或る日お絹が神尾家からやつて来て、神尾主膳の爲に有野村の伊太夫の娘であるお銀様を賞ふについて、支配としての駒井と同意を求めに来る、駒井は、旗本の縁談には旗本としての例があることを云つてそれに同意を與へないのは藤原家の爲を思ふからであつた。それを神尾が又根に持つ、

神尾主膳は酒を飲むと酒亂の癖がある、縁談を断られた余憤も手傳つて、鷹岡ヶ崎の古

屋處へやつて来ると、長持へ入れて置いた幸内を引づり出しそれを駒井能登に見立て、さういふ殘虐を加へてなぶり殺し同様にする、そこへ劍道師範の小林と米友とがクセ者を追ひ込んで来たといつてやつて来たが、影も形も分らない、駒井が座敷へ戻つてゐると、龍之助が羽織に女の片腕をぶら下げてやつて来る。

その翌朝この頃行はれてゐるうちでも最も殘虐なる辻斬が発見された、若い女房を斬られて發狂した若い亭主が、子供を抱いてガラ／＼と笑ひながら女房の名を呼んで夜の市中を駈け廻る。

破牢があつた。

甲府の市中は二重三重の恐怖に襲はれる、狂人も走れば不狂人も走る、宇治山田の米友も闇の甲府の市中を杖槍を荷なつて飛んで行く鼻先きへ、フイに見えない刀が現はれて茲で米友の必死の獨り相撲がはじまる、漸く氣流が去つたかと思ふと鼻先きに現はれたのはムクであつた。ムクの案内で米友は幸内の死骸を擔ぎ出して走る。

駒井能登守とお君との間が遂に本物になる、お君は嬉しくもあり恐ろしくもあるが、氏なくして玉の輿といふ果報を自分獨りで受けたやうに駒井はまた何物にも換へ難くお君を溺愛するやうになる、今晚もお君はうれしくて肩外しを着たり、御殿姿を鏡にうつしたりして自己陶醉してゐる處へ、ムクに導かれた米友がフイに訪ねて来て久しぶりに面會し、何はともあれ幸内の身の上を頼む。

駒井能登守はその夜、物に驚かされて秘蔵の室内銃を取り上げる、闇に紛れて落ちのびた破牢の罪人がこの駒井の研究室へ忍び込んでゐたのだ、南條力と五十嵐甲子男とが宇津木兵馬を連れてこゝへ来て見ると、この南條といふのは駒井とも同輩の間柄であつたことが分る。

その晩折助の金助が、この邸へ夜ばいに忍び込んで様子を見る。

如法暗夜の巻終り

第十四 お銀様の巻

死人同様になつた幸内は、お銀様の處へ引とられてお銀様自身が看病する、神尾主膳が忍び込んで押し殺して了ふ、お銀様は夜中家を抜け出して甲府の町へ入り込む、若い男が斬られてその傍に子供が泣いてゐる、お銀様は立ちすくむ處に神尾主膳が立つてゐる、然し辻斬は神尾の仕業ではない。

七兵衛は、牢破りをした兵馬が駒井の邸にかくまはれてゐるといふことをお松にそつと注進する、その翌日雪で天地が埋められてゐる中を獲に托して駒井能登守が二人の破牢の罪人を連れ出す。米友も付き添つてゐる、役割の市五郎は神尾に注進して駒井の跡を追ふ。神尾主膳は伊善の安綱の刀をさげてつゝぢヶ崎の古屋敷にまで來り、こゝで酒を飲みな

がらお銀様を引きつけ、刀を見せびらかして脅迫する、お銀様は憤然として神尾の手を連れて走り、思はず陰深な一室に馳け込んで、そこに居合せた一人に必死にしがみついて助けを求め、その人は机龍之助であつた。お銀様と龍之助との關係がこゝにはじまる。

米友は駒井家に仕へてゐたが、何かにつけ駒井に心服しないものがある。米友はお君が駒井にお妾として寵愛され、それをいゝ氣になつてゐるのが不平でたまらないのだ、お松は忍んで來て、駒井邸の一室に忍んで療養を加へてゐる兵馬に藥を渡すことを米友に向つて頼む。

駒井能登守がお君を寵愛する心は愈々加はる、お君も亦殿様の爲に満身の愛情を獻げ、自然米友やムク犬をも閑却するやうになる。

正直な米友は、世の常の嫉妬の意味でなく、お君の心根が商売くてたまらない、人のなぐさみ者になつて得意になつてゐるやうなお君の淺ましさを叱りつけ、ムクを憐れみ、遂に甲府を振り切つて飛び出して了ふ。

お松はまた、そつと兵馬に面會の機會を得て、親切な世話をする、甲府をおん出た米友は龜山の袖切坂の下まで來ると、こゝに暫く假住居をしてゐたお角に出くわし、油をしぼられる、短氣一徹な米友も、どうしたものかお角が苦手で頭が上らない、袖切坂の下で轉んだことをお角が残念がる。

お松の縁でムク犬が駒井と神尾の間を往來する、ムクがお君に疎んぜられるのと比例し

てお松とムクとの間が漸く親密になつて行く。

この地へ來ても相變らず神尾の宿はごろつきの集になり博徒の宿となる、或時神尾主膳が伯耆の安綱の刀をかけると、がんだりきの百藏がそれをカタに取つて逃げて了ふ。

甲府の八幡宮の境内で、官民合同の盛んな流鏑馬が行はれる、その晴れの射手として神尾主膳は胸井能登守に鼻をあかせようとして信濃から射手を呼び寄せる、それを知つて宇津木兵馬が出馬することになる。

盛んな流鏑馬の當日、一方には競馬の會もある、お君もよき棧敷を取つて簾のうちに見物する。それを一方の老女が意地悪く恥辱を與へようとする。

又一方に喧嘩がはじまる、これは安綱の刀をバクチのかたに取つたがんだりきの百が、それを取り戻さうとして來た大勢に追ひ込まれたのだ。神尾の射手ががんだりきを射落さうとする。弓の弦を七兵衛が鉄で切る、そんな騒動で流鏑馬の一日は終つた。

その間ばつたり辻斬の噂は絶えた、或る夜甲府の裏山から、八幡村へ抜ける三挺の駕籠がある、それは、龍之助とお銀様とが落ちて行くのだ、そして落つた先といふのが龍之助には悪縁ある最初の妻お濱の生家小泉家といふのであつた。

宇津木兵馬は途中すれちがつたけれども氣がつかかなかつた。

お銀様の巻終り

第十五 慢心和尚の巻

八幡村の小泉家へ落ちついたお銀様と龍之助は、そこで悪女大姉の位牌を見つける、悪女大姉といふのはお濱の戒名であつた。

今やお濱の悪縁がすつかりお銀様の上のり移つたのみか、お銀様は積極的に龍之助の爲すことを肯定する、お銀様は目の見えない人であることが何よりうれしいのだ、目が見えないから破壊された顔面を持つ自分といふものを見ないで肉身の全部を其のまま愛してくれる男を與へられたことがうれしいのだ。

それから二十一酉の女とある悪女大姉の墓標のあることを知つて龍之助の心が又狂ふ、或る夜、水車番をしてゐる若い娘を殺して了ふ。

宇津木兵馬は惠林寺の慢心和尚についてゐる、慢心和尚はまん圓い顔をしてゐる大力無雙の師家であつて、自分の拳をかためて自分の口の中へばつくりと入れることを自慢にしてゐるが、何者にも非常に忝しく頭を下げて、「お前さんよりまだ大きいものがあるから慢心してはいけません」といふ口癖を持つ處から慢心和尚といはれてゐる、この和尚に兵馬はさんく「仇討ちといふものを罵倒される。

然し兵馬はこゝを根拠として出家姿で甲府の内外をさぐるうち、甲府の本丸の天主閣の上で毎晩赤い提灯がくる／＼廻る、天狗の仕業だと人が騒ぐ、實はがんだりきの悪縁なの

だ。駒井はその迷信を破らんが爲に、得意の鐵砲で提灯を打ち落す。

或日、城内で勤番の總寄合がある、その席上、神尾主膳が、近頃甲府城内外の物騒、辻斬があり、御金藏破りがあり、天主臺に提灯が現はれる、人心が斯く動搖するも上の風情が悪いからだ、その證據には上に立つ者のうちに色に溺れて人外の女を妻妾の地位に置く者があるといふことから惡辯な彈劾を駒井に向つて投げかける。

この彈劾によつて駒井は完全に失脚した、門を閉して江戸へ立のいたといふ者もあれば自殺したといふものもある、お君は井戸の中へ切り込まれたといふ説もある。

鹽山から大菩薩峠へかゝつた米友はそこで例のいたづらの猿に握りめしをとられてしまつたが、作事小屋を拵へて地藏様の据へ付けを試みてゐた、與八と出くわして、それから二人が道庵先生の事などを話し合ひ。うち連れて峠を武州路の方へ下つて行く。

駒井失脚後のお君は、向岳寺の尼寺に隠されてゐる（向岳寺の開山拔除禪師を本文に、ばいたいといふり假名のしてあるは誤り、「ばつつい」と讀むのが慣例）この時既に身重になつてゐたのだ、こゝでも安心出来ないから慢心和尚に頼まれて兵馬が付き添ひで送り出す途中さし出の磯とい處で、神尾方の廻し者が待つてゐて襲ひかゝる、それを兵馬があしらつてゐるうちに慢心和尚が来て大力に任せて駕籠を擔いで勝沼まで持つて来て、富永屋といふ宿屋へ預ける、それから先き江戸まで兵馬はどうしてもお君を守護して落さなければ

ならない。

この富永屋といふのに臨時に主婦と番頭との役を勤めてゐたのがお角である、そこへ美少年が獨り旅でやつて来て宿を求め手形がなくて關所を通る道はあるまいかといふやうな事をそれとなく尋ねる。お角は、この痛々しい美少年に就て頻りに考へる。

怪子峠へ狼が出たといつて騒ぐものがある。

百藏がちよつくりお角を訪ねて来て狼に食はれ損なつたといふ。

お角はがんりきにどうも旅馴れぬ若い人が一人お關所を通りたがつてゐるから、何とかして案内してやつてくれないかと頼む、この美少年といふのは、實は神尾家を逃げ出して来たお松で男装をして江戸へ落ちようと思ふてこゝまで落ちて来たのである。

翌朝、雨がしと／＼降つてゐる中を宇津木兵馬はお君の駕籠を守護して出かける、それより先きのまだ暗い時分に先發した二人のものがある、その一人はがんりきの百藏でもう一人は男装した美少年のお松であつた。

兵馬に守られて行くお君は無事であつたががんりきはお松を男装の女だと見抜いてしまつたが、ちよい／＼役人や人前があつた爲にまづ無事で来るうち馬子になつてこの街道に立ち廻つてゐた南條力にお松は救はれる。

慢心和尚の巻終り

第十六 道安と鯨八の巻

五四

江戸の下谷の長者町の道庵先生の近所へ鯨八大毒といふのが妾宅を構へ込んだことから道庵との間に對抗がはじまつて道庵が馬鹿をやつたりしたが、向ふも朝鮮芝居をやる、金づくではかなはないと思つて何か奇抜な思考をする。

そのうちに貧窮組は愈々盛んになつて、市中に穢かならぬ貼札が現はれて、三井を脅迫する者などがある、その貼札の字の筆蹟が道庵に似てゐるなんぞと目指されるやうになるが、道庵はそんな陰險なことはしない。

首尾よく駒井能登守を陥れることの目的を果した神尾主膳のその後も愈々すさまじ切つたものになつてしまつて、酒亂に乗じて神尾は父の愛妾であつたお絹の室までも犯すことがある、駒井能登守の行方に就ては種々な評議もあつたけれども、實は江戸郊外の王子の瀧の川の火薬製造所に隠れて研究を續けてゐるのであつた、そこへ南條と宇津木とが訪ねて来た、駒井は洋行の志があることを云ふ。

兵馬は今、お君を連れて王子の扇屋といふのへ来てゐる、お君は駒井に洋行の決心があることを聞いて自殺しようとして止められる、とかくしてゐる二人を南條力が来て勵まし小事に拘泥するなといふ。

がんだりきと七兵衛が板橋街道の方からやつて来る、がんだりきは扇屋へ忍び込んでお君の

袴、守刀等を奪つて来てそれを駒井の研究室の扉へ持つて行つて張つて駒井を辱かしめる。それを見ると、駒井は手紙を托して此の處を立ち退く、兵馬も之等の事からお君を連れてこゝを引拂はなければならぬことになる。

甲府の躰躰ヶ崎の古屋敷の夜の大きな松の木に豪犬ムク犬が鐵の鎖で二重にも三重にも巻きつけられてゐる、神尾主膳は客を招き、皮剥ぎを呼んで、今日はこの犬が一番生きた儘でそつくり皮を剥がせてそれでまだ肉體が生きて動けるかどうか試験して見ようといふのであつたが、皮剥がやりそこない、犬を取り逃がして了ふ、犬は猛然として荒れ廻つて屋敷中が大混亂に陥る、神尾は槍を持ち出して突かうとしたが却つて犬に肩先きを咬まれる、神尾は怒つて皮剥ぎを突き殺す、犬は一散に惠林寺に逃げ込む、人が狂犬だくと騒ぐのを慢心和尚はお粥をくれて崇め奉る。犬も亦和尚の前に神妙にひざまづく。

本所相生町の箱惣の家が何者にか買ひ取られて、お屋敷になる。

御老女様と云はれる権の高い老女がゐる出入の鬼の如き浪士達も、この御老女様には頼が上らない、お松は甲府からあゝして逃げて来て、途中馬子の姿にやつしてゐた南條力に助けられて今はこの御老女様に侍づく身となつてゐる、或る日、又南條が珍らしく連れて来たのは兵馬であつた。

兵馬は単にお松に會ひたくて来たのではない、瀧の川からお君を連れて来てこの家に預かつて貰いたい爲であつた。

去る程に鱸八大盡と對抗をはじめた道庵先生は、見す／＼金力で壓迫されるのが癪にまはり、遂に氣拔な非常手段を實行することになった、それは鱸八が樓上で客を集めて宴會をしてゐる處へこちらは屋根の上に高く築かせた「やぐら」の上から筒先を揃へて水鐵砲を打ち込ませたことであつた。

これには流石の鱸八大盡もたまらず、來客も自慢の書畫骨董も水浸しにされてしまつて腰を抜かした者さへ出來た、これではどうも打ち捨て置かれたいとその筋へ訴へ出た爲に道庵は遂に手錠三十日の刑を受けることになつたのを道庵は却つていゝ氣になつて、手錠を自慢顔に或る日訪問して來た米友に突きつけおれは日頃貧民の味方で、まあ昔で云へば佐倉宗吾郎のやうなものだのに鱸八のおかげでこんな事になつたなんぞと焚きつけるものだから正直な米友がムキになつて富者の横暴を憤る。

米友は久しぶりで、もとゐた箱惣の家あたりへ行つて見ると、昔馴染の子供連がわい／＼出て來る、そのうちの一人が井戸の中へおつこちる、米友がそれを救はうとして井戸へ降りた間に溜物も道庵から頼まれた薬を仕入れる金もそつくりかつばらはれて了ひ、米友に禮を云ふ者はなく、子供の助かつたのは水天宮様の御利益だと、水天宮様ばかり賞めてゐる、ばか／＼しくなつて立ち去らうとした米友の姿を邸の中から認めてオヤ！と思つたのはお松であつた。

お松は此處へ引取られたお君に向つてどうも今見たのは米友さんであつたやうだと云ふ

そのうち此處に集る有志豪傑連がお君の身の上を問題にして、御老女様に叱られる。
お松は道庵先生に御無沙汰見舞に行く途中、昔自分を賣つた悪いおばのお瀧に出會ふ。

道庵と鱸八の巻終り

(第四册)

第十七 黒業白業の巻

八幡村の小泉家にゐる龍之助は、お銀様が親戚へ行くといつての不在中、笛吹川の出水で家諸共押し流される、惠林寺にゐるムク犬が水中へ飛び込んで龍之助と共に流される、その出水のあとを探しに出たお銀様がお角とムク犬とに出會ふ、龍之助は川下でムク犬に救はれてゐたのだ。

宇津木兵馬は、どうしても神尾主膳が龍之助をかくまつてゐると思はれてならない、神尾の邸宅をさぐつてゐるうち、近郷の特殊部落の人達が大量して神尾の屋敷を襲ふ、ムク犬の皮を剥ぎ損ねた爲に主膳が怒つて長吉長太を殺したその復讐の爲だ、遂に神尾邸は焼打に遭ひ、部落の者共は虐殺される、兵馬は神尾邸へ出入する折助金公を捕へて糾問する

神尾も遂に甲府にゐた、まれば、ひそかに江戸へ出奔して了ふ、兵馬はそれを知つて金助を先立て又江戸に向ふ。

神尾主膳はひそかに江戸へ出て、染井の化物屋敷に陣取る、これも甲州を出て来たお角が訪問して、再度興行の旗上げをやりたいが、資本の相談をかける、神尾はその詭策としてお銀様の實家に取り入れと教へる。この化物屋敷には神尾もお絹も来てゐる上に龍之助もお銀様と共に土蔵に割據してゐる、主膳は龍之助をそゝのかして吉原へ遊びに行く、金助を手引とした兵馬が吉原へ入り込み、主膳を責め龍之助に近づかうとする、金助、兵馬に運動費をいたぶる、お松とお君が苦心してその金を才覚する。

鐘撞堂新道に巢を食ふ大道藝人の一群、道樂寺の本山に米友が加はつてゐる、毎夜淺草の廣小路で梯子乗をやつて見せる、大名の行列をなぐつて吉原へ逃げ込む。

宇津木兵馬は手段としての吉原入りがつい東雲といふ花魁に溺れかける、その間に茶袋(歩兵隊)が吉原へ侵入して大騒動を持ちあげる、其負傷者を療治の爲に道庵先生があんぼつで乗り込んで来る、米友が道庵を救はんとする、この騒動に紛ぎれて神尾は金助に守られて染井の化物屋敷へ運ばれる。その前後に龍之助は道庵の乗つて来たあんぼつによつて吉原から送り出される、それには道庵を救はんとして来た米友がついて何れへか連れて行く。

お君は駒井の嵐を宿してゐる、その憂鬱をお松がひたすら慰める。

道庵先生は萬八の書畫會で氣焰を吐く、高島、江川の宿から、駒井甚三郎の姿を豊浦のバツテラで見たといふ者がある、道庵の友人遠藤老人といふ旗本の隠居が辻斬に會ふ。

本所彌勒寺橋の長屋の中で龍之助と米友との佗住居。

米友は病人であり盲目である龍之助を吉原から連れて来て看病してゐるが、合點の行かぬ事が多い、そつと刀を調べて見ると、人を斬つた證據歴々。

遂に様子をうかがつて夜歩きの龍之助の跡を追ふ。

相生町の老女の家にお君は心勞の餘り逆上の氣味で宿をぬけ出し、故郷の間の山へ歸らんとし、橋上にあやしい影がある、龍之助だ、ムクの警戒する聲に驚いて米友が馳せつける。

龍之助はその晩按摩を一人斬つて歸つて寝てゐる、お君を助けて歸つて来た米友はその態を見て地團駄を踏む。

駒井甚三郎の姿を江戸の灣内の舟で見る。

黒業白業の巻終り

第十八 安房の國の巻

安房の國清澄山に茂太郎といふ奇童が蛇の木に登るを見て、暴風雨があることを辨信と

いふ旨目の小坊主に告げる。

兩國橋の女輕業の親方お角が伴を連れて木更津船にのり込む、その目的は奇童茂太郎を買ひに行くのだ、この途中暴風雨が起り船が覆へる。

安房國洲の崎に近い平沙の浦を見廻つてゐた駒井甚三郎と船大工の清吉とお角を助ける、駒井はこの地へ船の建造所を設けることに苦心してゐたのだが、お角を助けると共に清吉は行方不明になつて了ふ。

お角は小佛の關所で駒井の恩義を受けた事から甲府話をはじめ駒井の懺悔話もある、その時縁の下へ逃げ込んでゐたのが清澄の山を逃げ出して來た茂太郎であつた、お角が買ひに來た目的物である。

清澄の山では難船救助の爲に毎夜燈明をつけてゐた辨信が、その甲斐もなく昨夜の大暴風雨で船が沈み人が溺れたと聞いて、それを自分の不徳として山を退散する。

南條及五十嵐等ががりきりの百を伴ひ、軍用金を負つて、碓氷峠より上州信州方面に出渡す、それを山崎と七兵衛が追ひかける。

兵馬漸く女色に溺れ帯刀をまで賣らんとしお松を泣かせる。

折助の金公はお君の姿を認め、ものによいとほくそ笑みながら兩國橋を通り、米友にからかひ川へなげ込まれる。

資金が出來て再度の旗上げをするお角が化物屋敷に來て神尾に看板を頼む。

お銀様は夜の男装して龍之助の行方を探しに出かけ、或る夜吉原で兵馬に見咎められ染井まで追跡される。

「山神奇童清澄の茂太郎」としてのお角の旗上げ興行が又満都の人氣をとる、そこへ辨信が逢ひに來てスゲなく追ひ拂はれる、辨信は柳原河岸で夜鷹のお蝶に會ひ、土手の蔭で龍之助の爲に辻斬られてゐる女の事を感じ立ちすくむ、米友も走り合せる。

米友は愈々分らない、その翌朝龍之助の佛を見て、思ひ切つて之を糺問し、甲府城下の如法開夜の事に及ぶ。

安房の國の卷終り

第十九 小名路の卷

お銀様、米友を尋ね當て、之に龍之助の行方を尋ねる。

柳橋の船宿で駒井能登守が船大工寅吉と造船の相談をしてゐるところ、外の柳橋の上ですさまじい斬り合ひがある、これは机龍之助が辻斬に出て、同時に三人の辻斬を相手にして三人共仕留めたものであつた。

七兵衛とがりきりは甲府の酒折の宮へ隠しておいた安綱の刀を坊主持にして江戸へ出て來る。

お角と駒井甚三郎との間をがんだりきが嫉妬する、柳橋の上で、がんだりきとお角、お銀講と米友が出逢ふ。

龍之助一人吉原へ泊る、隣室に子供の尺八を聞いて微妙心を起し、尺八を求めて駕籠の中に吹き鳴らしながら染井へ歸る。

お絹は茂太郎を横取りしてお角のはなをあかさうとする。

南條力が兵馬をそゝのかして自分達の邪魔者山崎讓を片付けせしめようとする。

化物屋敷の土蔵の中でお銀は針を肉體に打ち込んで楽しんでゐる處へ龍之助が尺八を携へて歸り來る。

外で辨信が神尾主膳の爲に井戸の中へ打ち込まれる、辨信は死なず、却つて神尾が大怪我をする、辨信がこゝへ來たのは龍之助の歸る駕籠の中の尺八の音色を慕つて來のであつた。

お銀様が井戸から辨信を引き上げ、同じ土蔵の中に龍之助とお銀様と辨信とが同居する宇津木兵馬は甲州街道で山崎を斬らんとして誤つて他人を斬り、郊外を走る、月に乘じて尺八を弄して來た龍之助と行き逢ひ、それと知らず龍之助の爲に小指を碎かれて別れる。ある夜、龍之助と辨信とが黒鴨の庚申塚のあたりへ來て、不義をした女を制裁する群集の中へまきこまれ、龍之助はその女を拉して去り辨信は人を許せ〜と叫ぶ。

龍之助は、不義の女と板橋の宿に落ち背の罪業を夢み遂に右の女の里なる、武州淺川宿

小名路の里の花屋まで來る、夢と繪のやうな旅路。

小名路の巻終り

第二十 禹門三級の巻

米友不動尊の畫像を持ち扱つて諸々を擔ひ歩き、目黒不動堂に來る、とみくち當りのうれし紛れに、遠乗りのお歴々に無禮があつたといふ若者の爲に、米友が義憤を起し、遂に不動堂の境内を騒がす。

宇津木に斬らるべかりし山崎讓が、老女の邸に南條力を訪ねて來た擲論する、山崎は七兵衛に三田の薩摩屋敷の動靜を探らん事をたのむ。

清澄の茂太郎行方不明の爲に小屋は休業、お角腹が立つてたまらない。

金貨の忠作も私に薩摩屋敷の動靜をさぐつてゐる、それとこの老女の家と關係があるらしく、忠作は又相生町の老女の家にも目星をつける、南條力が浪士に向つて、東照宮へ無禮を働くことを慫慂し——それを實行する。

下總小金原から一種異様な踊りが流行し、潮の如く各方面へ流れ出す、それは茂太郎の口笛が音頭をとるのである。

遂に音頭を取つた茂太郎が群集心理に壓倒され、是非なく辨信が茂太郎を竹の笈に入れ

て馬に乗つて江戸へ逃れさせやうとする、群集がその周囲を取りまいたまゝ江戸へなだれ込む、江戸が大人氣になる、道庵までが乗り出す、米友が身代りになることによつて辨信と茂太郎は命からん、道庵の宅へ届けられて避難する事が出来る。

道庵方にて茂太郎の奇蹟がある。

辨信は本所相生町の老女の家の集會に行く、道庵も招かれて行つてゐる、薩摩琵琶の半ばなる頃に、辨信が煙硝の臭氣を感得する、益満某のいたづらで彈丸を仕かけて置いたそれが爆發して一座の膽を奪ひ、道庵が最も醜態を演ずる。

化物屋敷では辨信出入以來、神尾が焦れきつてゐる、こゝにも王子の衣裳櫃の狐跡といふのがなだれ込む。

神尾は辨信のお喋りも今も耳に残つて絶えずそれに悩まされてゐる、遂に辨信を焼き殺すつもりで、お銀様一人残る土藏につけ火をする、お銀様火中よりころがり出づるを主膳は辨信と妄想し、槍をとつてお銀様を追ひ廻し、遂に火事を起して化物屋敷を全焼にする。

近國諸方から異種異様の行列が江戸へ向つてなだれ込まうとする。
南條、五十嵐等は相州萩野山中の陣屋を焼き拂はんとし、がんだりきの百藏を脅かして八王子街道に行く。

小名路花屋のおわかになれられた机龍之助は武州高雄山の蛇瀧にかゝつて目を養ふ。

禹門三級の巻終り

(第五册)

第二十一 無明の巻

巢鴨庚申塚の夜、ふとした縁で導かれたおわかといふ女から、小佛の下高雄の蛇瀧で眼を養つてゐた龍之助はそこで堀川國廣の一刀を得て、甲州上野原の月見寺に送られる、五十町峠の夜道で天狗に逢ふ、天狗は即ち七兵衛である。

茂太郎と辨信は道庵の家を脱走して高雄山に到らんとし、府中の六所明神で辨信が琵琶を奉納する、その時酒井左右衛門の尉の邸を荒した一味がこの邊に出没する、がんだりきの百、南條力等と七兵衛及び山崎等が走り廻る、宇津木兵馬も亦此の地に來り、怪しき乗物を認める、兵馬は七兵衛に吉原の遊女を身受けする爲の才覺を頼む、七兵衛その金を工面し來りて、淺草の觀音境内にて兵馬に渡す、兵馬が吉原に走せつけると、既に身受けが済んでしまふ、落膽した兵馬は老女の邸へ歸る。

女興行師のお角は折角の山神奇童茂太郎を失ひ、あれかこれかと工夫してゐる處へお銀様が來て龍之助の行方を尋ねる、お角それを引受けてお銀様を自分の家に留め置く。

神尾主膳が下野の元の知行所の方へ、込んでゐる間お絹は御家人の福村と馴れ合つて、切支丹坂の方に住んでゐる、その邸へ夜かんだりきが忍び込んで來る。

道庵先生が、五十日間の豫定で名古屋から京大阪の遊覽を志し、道連れを考へてゐる處へ米友が来る、得たり賢しとこれを道連れ兼用心棒として旅立を思ひ立つ。

甲州上野原の月見寺で辨信が無常を感じて泣いてゐる、そこへ寺の娘お雪ちゃんが来て姉さんが殺されたと云つて泣く、姉さんといふのは、龍之助と一緒に庚申塚から免れて来たおわかのことであつた。辨信、それを殺したのは今こちらに逗留してゐる盲目の先生即ち机龍之助だといふ、お雪ちゃんが、そんな事を云ふものではないと怖れる。

お雪ちゃんが行つてしまつた後へ龍之助が現はれる、白鞘の國廣で辨信を斬りにかゝる、辨信それを避けて庭へ下りる、龍之助蛇の如く音無しの構えで追ひ詰める、辨信絶體絶命卒塔婆の影へ隠れる、龍之助一刀に卒塔婆諸共辨信の衣を袈裟掛に斬る。

清澄の茂太郎は同じ寺の境内の三重の塔の九輪の上で出鱈目の歌を唄つてゐる。

辨信と茂太郎はこれより先き府中から高雄を経てこの寺に落ちついてゐたのである。

宇治山田の米友は道庵先生に嫌疑なしに上方行の同行を命ぜられ、歸つて来るその途中淺草廣小路で田山白雲といふ豪傑の畫家に會ひ、白雲は米友の人相を奇なりとして是非その顔を描かして呉れと頼む。

米友は宿所なる小石川の傳通院へ来て見るとお松から知らせが来てゐる、お君が危ないから一刻も早く来てくれといふ事だ、米友腹は立ちながらも本所相生町へ向けて夜道を走つて行く、途中柳原で辻斬を警戒する劍客と出逢ふ。

相生町の老女の家へ着いて見るとムクが出迎へる、お君の病床へ行つて見るともう駄目だ。米友は天地の間に飛び上つて怒り悲しみ、兩國橋へ走り出して何が何だか分らないといふ。

栃木の大中寺へ引込んだ神尾主膳をがんりきの百蔵が酒をもつてそゝのかしに来る、お網が留守中、福村と出来合つてゐる事などを聞かせられる、遂に持ち前の酒亂で大中寺七不思議の中の「開かずの雪隠」を開けにかゝる、お吉といふ門番の女房がそれを止めるのを手込めにする。

房州の須崎で船の建造に一心を打ち込んでゐる處へ此の頃金椎といふ支那少年が来てゐる、この支那少年から駒井がキリスト教の研究を志す、或る日見馴れない大きな犬がやつて来た、ムク犬である、駒井はその犬の頸に巻きつけてある竹筒を取つて見ると、お松からの手紙であつて、お君が駒井の胤を生み落し、若様は丈夫だがお君が亡くなつたといふ事を書いてある。駒井これを見て感慨無量、直ちに江戸へ赴かんとする。

兵馬煩悶の末、半ば自暴の心をもつて甲州まで駕籠を飛ばす、慢心和尚の鉗鎌を受けて安心を求めんが爲である、やがて惠林寺に和尚を訪へば、和尚は仇討は大嫌ひだといつて兵馬を縁の下へ蹴落す。

月見寺の娘お雪ちゃんは龍之助を連れ、自分も信州の白骨温泉迄療治に行かうといふ、辨信それを聞いて試める、龍之助刀を取り出して拭ふ、お雪その刀を恐れる。

ある夕、お雪ちゃんが井戸端へ出てみると、通りかゝつた兵馬が疲れ切つて水を所望する、お雪はその態を氣の毒に思つて兵馬に一泊をすゝめる、兵馬感謝して好意に従ふ、兵馬の世話をするのは清澄の茂太郎であつた、茂太郎は山奥から狼を呼んで、こつそりと縁の下に置き食物を與へて可愛がり兵馬にないしよにして呉れと頼む。

その夜、月見寺の裏庭から動き出した眞黒い覆面のもの、それは龍之助が夢の如く血を求めてさまよい出でたものである、その不在中寺へ強盗が入る、住職もお雪ちゃんも纏て危ない處を兵馬が出て盗賊を追拂ふ。

その翌日、上野原の町の火の見櫓の下に狼に喰はれたといふ人の死骸が二つあつて、人心を聳動させる、兵馬が検視に行つて見ると成程狼か山犬に喰はれてゐることは確かだが、それだけが致命傷ではない、喰はれる前に鮮かに刀で斬られてゐる、斬られてゐる奴は昨晚寺へ入つた盗賊であり、死骸を喰つた狼は茂太郎が倒つてゐたものであることは確かだが、斬り捨てた者が疑問だ。

深井の水車番の與八が郁太郎をおぶつて相生町の老女の家を訪問する、老女の家ではお君の新しい佛壇の前でお松と乳母とが駒井の一子登を守をしてゐる、惠林寺の慢心和尚が招ぜられてこゝの家へ説教に来た、浪士豪傑をはじめ、お松も與八、郁太郎もその他の婦人達もみな聴衆になる、慢心和尚が飄逸な説教をはじめ、道庵先生が、それを交ぜつ返す。

慢心和尚は與八と連れ立つて武州深井を経て甲州へ歸る。

寺の娘お雪は龍之助と共に信州白骨の温泉に向ふ、辨信と茂太郎は寺に残つて、茂太郎は相變らず出鱈目の歌を唄ふ。

無明の巻終り

第二十二 白骨の巻

女輕業の親方お角は回向院の境内で切支丹大奇術大一座といふ一世一代の興行を始めて大當りをとる。

お角がこの興行の合同に外を見ると、駒井能登守がお松の案内でお君の墓詣りに來てゐる、お角は駒井を招いて切支丹と奇術とジブシー、ダンスとを見て貰ふ。

お角のこんどの興行の金主元は駒井甚三郎ではない、それはお銀様の父即ち有野村の馬大盡藤原伊太夫であつた、お角が馬喰町の伊太夫の宿へ金を返しに行く、伊太夫はお角を見込んで持て餘しの娘お銀様のことを頼む。その留守中、金助といふおつちよこちよいが訪ねて來て、小娘をからかいお銀様に向つて龍之助の當推量をベラ〜としゃべつて了ふ、それによつてお銀様は又も男装して甲州方面へ出奔する。

お絹と福村とが暮してゐる處へ金助が出向いて行つてお角の胸のあることを話すとお絹

がムカ／＼する。

甲州街道を男装で上つて行つたお銀様は小佛の山の中に迷ひ込んで了ふ。その時分この界隈に怪しい太鼓の音、嘶の音が聞こえる。宇津木兵馬は獵師と共にその正體をつき止めようとする。怪しいものは山間に集つて神樂を奏してゐる兵馬と同行の獵師が鐵砲を打ち込んで見る。怪しい者が退散する。その後へ行つて見るとお銀様がつかまつて縛られてゐたのを解放して月見寺まで連れて来る。

龍之助お雪ちゃんの一行は信州の諏訪まで来るとおまんさまの夜詣りの晩、その時佛頂寺彌助といふ劍客と丸山勇仙といふ書生が泊り合せ、土産物の賣の女をなぶりものにする。

その翌日こゝを立つて龍之助お雪ちゃんが鹽尻峠にかゝると後から追ひかけて来た佛頂寺、丸山、高部、三谷等がいのちが原で龍之助と斬り合ふ。高部、三谷の二人が龍之助に斬られ、佛頂寺、丸山が峠の宿へ連れて来て荒療治をする。お雪ちゃん久助等は一軒屋に避難してゐる。二人を斬つた龍之助が漂浪としてやつて来る。

下谷の長者町の道庵は、旅立に先立つて子分共を集めておひやらかし、自分は一切人類を平等に扱ふ意味から、今後誰れに向つても様といふ敬稱をつける、これを忘れた時は百づつやるといふ懸賞を出す。

宇治山田の米友は、お君の死から、生と死といふことが分らなくなつてしまつた。傳通院の墓地へ入り込んで、墓といふものは生と死との間の蓋であるといふ處から、五輪の塔

を崩して見たりする。

女體業の親方お角はお銀様逃げられたので腹が立つてたまらない、これは金公といふおつちよこちよいが餘計な口を利いた爲だと待ち構へてゐる處へ金公がやつて来たので取つ捕へてビシヤ／＼となぐる。金公命から／＼兩國橋へ逃げ出す。

久しぶりで房州から江戸の番町の邸へ歸つて来た駒井甚三郎はそこで家來の一學に監理させて置いた書庫を漁り書物を持つて行き、一學の口から離縁された奥方の消息を聞く。

それから小石川の傳通院へ先祖のお墓詣りに出かけて行くと米友に出逢ふ。米友はお君をあやまらせ、その生命を亡ぼしたのは一に駒井甚三郎の玩弄の罪であるとして之を憎んでゐる處であるから、駒井を見るときさん／＼に罵倒し、死んだ者を生かして返せと絶叫する。

神尾主膳は栃木から江戸の根岸へ出て来た、寺男の女房お吉が伴いて来たが、そのうちお絹を呼び寄せたことによつてお吉が逃げて了ふ。神尾は辨信を井戸に投げ込むはづみに受けた顔の傷によつて、眼が三つある形になつて世間へ顔向のならぬ自分の醜顔に憤懣する。お絹は主膳をまるめて子供扱ひに暮してゐる。

裏宿七兵衛は、高尾山へ登り、はんべん坊主が大木を伐り散らしてゐるのを見て通りかゝりの神樂師一行と共に憤慨する。この神樂師一行といふのは、矢張り薩摩邸を目ざして上方から乗り込んで来た、堂上系の浪士であつて、武相の山中に隠れて先程怪しい物の音

をさせてゐたのもこの連中であつた。

與八が澤井の道場に留守をしてゐると、武者修業が訪ねて来る。本所の相生町の老女の家は四國町の薩摩邸へ合併しなければならなくなつたので、お松は登と乳母とムクとを連れて澤井の與八の家へ引移ることになる。

机龍之助は信州途上白骨の旅を夢に見る。

白骨の巻終り

第二十三 他生の巻上

月見寺で茂太郎は天の星を見て唄つてゐる、辨信は地上の蟲を聞いて悲しがつてゐる、そこへ山から獵師の勘八がお銀様を連れて歸つて来た。

お銀様はこの寺へ来て白鞘物の刀を見出し辨信に不審を尋ねる、茂太郎が布團を擔いで来る、お銀様がこれにも物を言ひかける、私は鬼子母神だといふ、茂太郎が恐れる。

はんべん坊主が奉賀帳を持つて来る、辨信に撃退される。

宇津木兵馬が歸つて来る、お銀様が刀を見せる、兵馬に思ひ當ることがある。

駒井甚三郎は船で木更津洲の崎に歸らうとする、船上でバクチが始まる、乗り合せの田山白雲がバクチ打をこらす、田山と駒井とがこゝで近づきになる。

駒井甚三郎は保田の港で下船して鑛山の日本寺へ參詣する、その途中兵部の娘といふ狂美人に出つくわす。

田山白雲は岡本兵部の家で仇十洲の回鑛圖巻を模寫してゐる、そこへ狂美人が来て戯れる。

道庵と米友が愈々出立する、板橋からわらび、浦和、大宮の氷川大明神へ參詣、道庵が大いに敬神主義を鼓吹する。

南條力が四國町の薩摩邸にゐる、そこへ高雄山で七兵衛と一緒になつた神樂師の長老棟が来て密談をする、それは高村卿といふ若い弱氣満々たる公卿さんを擁立して飛驒の國をとるが爲に三百名の兵を借せといふのだ、薩摩邸の豪傑連もこれには返答なり難きをもどかしがつて高村卿はじめ、一行の壯士が舞をまひながらこの邸を出て行つて了つた。さうすると間もなく又もや武甲相三國の國境あたりで嘩の賑かな音が聞こえはじめた、臘師の勘八が又はじめやがつたなと驚き呆れたがその邊で般若の面を拾ひ、その面を月見寺へ持つて来て納める。

机龍之助お雪ちゃん一行は鳥ヶ谷から白骨温泉に落ちつく、お雪ちゃんが、鹽尻のいのちヶ原の斬合の時に龍之助が無事に歸つて来たことが、どうしても分らないといふ。

白骨温泉浴客の多數が集まつて、木曾の御嶽山を踊る、この音頭取はイヤなおばさんだ、飛驒の高山の富有な穀屋の後家さんで男妾の淺吉といふのを連れて此夏中来てゐるのだ、

この後家さんもう五十に近いがでつぶりした色氣たつぶりである、男妾の淺吉は二十代の若者でいやなおばさんの手からどうかして逃げたがつてゐるが、どうしても逃げられない、龍之助の前で愚痴をこぼして却つてその言ひ過ぎを恐れ、いやなおばさんが龍之助の側へ近寄ると忠告する、お雪ちゃんはこのおばさんと親しくしてゐたが、いやなおばさんは龍之助の處へこのくくやつて来て話し込むことがある、淺吉がイラ／＼して却つていやなおばさんに壓服される。

そのうちに例の高村卿を擁護した怪しげな神樂師がこの白骨に乗り込んで来る。

宇津木兵馬はお銀様を連れて又甲府の城下へ入つて来る、佛頂寺と丸山とが信州方面から机龍之助の噂をしながらやつて来て、柳町の佐野屋といふのでばつたり落ち合ふ、佛頂寺、丸山はいのぢヶ原の盲目の劍客がたしかに机龍之助に相違なかつたと兵馬に告げる、それを聞いたお銀様は、佛頂寺丸山に金を與へ、成るべく兵馬と龍之助二人を接近せしめないやうに頼みこむ。

他生の卷上終り

(第六册)

第二十三 他生の卷下

田山白雪は駒井に連れて洲崎の駒井の家へ着き、小湊の濱の浪の音、日蓮上人の偉跡を説き氣焔最も上がる、駒井は武器造船等己れの研究を白雪に示す。

中仙道中の道庵と米友、熊ヶ谷の宿で、若い劇作家連を相手に熊ヶ谷を論じ、大名行列を敬遠し、馬の逆さ乗りをする等。

澤井の道場の中で與八が地藏様を彫む、お松は寺小屋を開いて近郷の子女を教育す。

根岸に盤居した主膳とお絹とは金錢に飢えて悪策を目論む、近き所に祕密道場として婦女子に姫姫の術を授ける寺がある、七兵衛もこの寺の様子を窺ひながらお絹の郎へ夥しい金銀を持ち込んで錢勘定をする、祕密道場の寺の住職はもと神尾の友達であり、こゝで又相知つて氣脈を通ずる。

辨信は月見寺にあつて茂太郎の出鱈目の唄を戒めながら、白樂天のじんどころを教へる。がんだりきの百藏が来て茂太郎を渡つて行つて了ふ。

白骨の温泉では仔細ありげな神樂師の一行池田良齋、北原賢次等と爐邊閑話が賑ふ、龍之助は無名沼の方へ行く、いやなおばさんが跡を連れて来ていやな話をしかける、男妾の

淺吉があとを追つかける、いやなおばさんと淺吉は鏡小屋の神主の處へ行つて陰氣だと云つて拂ひ出される、鏡小屋の神主は眼を洗つてゐる龍之助に向つて御陽光を信じなさいとすゝめる。池田良齋が炬邊で萬葉集の講義をはじめ、獵師が熊狩りの話をする、俳句師が入り込んで来る、一茶を説く。

月見寺で茂太郎をさらはれた後の辨信は、琵琶を負ふて又もうちらぶれの旅に出かける。

他生の巻終り

第廿四 流轉の巻

宇治山田の米友が碓氷峠の上で懷舊に耽つてゐる間に、道庵先生を見失ふ。

道庵は濟ました顔で一人輕井澤に先着してゐたが、裸松といふ名代の悪い馬子につかまつて半死半生の目に會つてゐる處を漸く米友が馳けつけて裸松を打ちのめし、勇者の名を轟かす、米友宿の飯盛の女にまでお君の倅を見る。

女輕業の親方お角さんは淺草の觀音へ參詣の歸り、駒形で房州歸りの田山白雲を見つけ自分のうちへ連れて来て淺草觀音へ奉納の額を依頼する。

それからお角の許に食客となつてゐる白雲は先日の大奇術の一座が殘して置いた一枚の西洋畫にジョットーの佛を見て解釋しきれないで、それから横文字を習ふことを發心する

或日、がんだりきの百が、やつて来て、二階に繪の先生がゐると聞いて嫉妬を起し、行つて見ると、案に相違の豪傑畫家であつたから、これは色男ぢやねえとがんだりきが返る、がんだりきは、月見寺からさらつて来た清澄の茂太郎を連れて来たのだ、その翌日から茂太郎が白雲の傍に侍つてゐる、茂太郎は白雲の寫生帳を見てゐるうちに、岡本兵部の娘の京美人の似顔を見て、お嬢さんがゐると云つて房州へ行きたがる。

駒井甚三郎が洋書を讀んでゐる、處へふいに窓から顔を出したものがあつた、兵部の娘のもゆるであつた。この狂女は駒井の處へ押しかけ居候に来てしまつたのだ、駒井がその常職を失つた娘のうち明け話を聞いてゐると不憫になる。

宇津木兵馬と、佛頂寺、丸山の三人は甲州信州の間を歩きながら、齋藤彌九郎の道場練兵館のこと、彌九郎の子歌之助の劍道の事等を物語る。

下諏訪から鹽尻にかゝる、いのちヶ原の斬合の跡へ行つてその當時の實地檢證をして見せて、思はず眞剣になり身の毛をよだてる。

山の娘の一行が兵馬を見かける、松本の市中へ入ると市川海土藏の看板が出てゐる、松本へ海老藏のニセ物が出て来たのだ。

根岸のお行の松の神尾の邸で夜になると七兵衛が夥しい金銀の勘定をして錢に飢えてゐるお綱をぢらす、お綱はたまりかねて七兵衛の不在中主膳を連れて来て、金銀を入れたその銀櫃を槍で突きこはさせる、七兵衛それを見て苦笑ひしながら、そんなものがお入用な

ら幾らでもあげますが其の代り太閤の拵へた「竹流し分銅」がまだ何枚か江戸のお城に残つてゐるかゝないか、その事を教へて下さいといふ。

白骨の温泉でお雪ちゃんが辨信へ宛てゝの手紙を書いてゐる。

淺吉がたうとう行方不明になつて了ふ、いやなおばさんはそれを悲しまない。

そのうちいやなおばさんも行方知れずになつて了ふ、程程何れも沼の中に沈んでゐたといふ。

お雪ちゃんはお通夜に行つていやなおばさんの死顔を見る氣になれない。

道庵と米友とが途中靈魂不滅説を語る。

道庵は米友が勇名を博したことから急に武者修行氣取りになる、川中島に夜を明かして米友が得意の槍を振ふ。

善光寺に参詣して、さいもんを聞き、道庵の武者修行熱が昂じ、急に衣裳髪形を改める。

こゝに神戸の山本南龍軒といふデロレン語りが武者修行に歩いたエピソードがある。

田山白雲が傳馬町のうるこやといふ古本屋へ来て、唐人往來といふおもしろい本を一冊買ふ、これは福澤諭吉の著書であつた、白雲この書を読んで大いに海外の事を教へられる、どうしても本當に語學をやるには駒井甚三郎の處へ行かねばならぬといふ氣になり、お角に頼まれた奉納額を描き終へたら又房州へ押し渡らうと云ふ氣になる。白雲はお角の爲に何を描かうかと書題を頼りに工夫してゐたが、うちかけを長く引張り般若の面をかぶつて

兩手に鈴と御幣を持ち無心に踊つてゐた茂太郎の形を見ると、これだと思ひ「妖童般若の圖」を作り、そのまゝ茂太郎を存負つて房州行きの船に乗り込んで了ふ。

佛頂寺と丸山と兵馬とが、松本の市中に入り込んだ時、市中は鹽市であつた、そこへ例の海老藏が来てゐるといふ騒ぎ。

道庵と米友も長野からこの地へ入つて来たのだが、こゝで又米友が道庵を見失つて淺間温泉を騒がす。

松本から淺間へかけてお祭りの山車と手古舞だんぢり屋臺で大賑はひ、何處から飛んで来たか道庵が現はれて頻りに手古舞や馬鹿囃の世話を焼いて憎まれ口をきまわり、はしやぎ廻つてゐる。

米友漸く探し當てゝ道庵を引立てる。

市川海老藏が来たといふ評判で大人氣を占めてゐる、道庵よく見ると海老藏の老といふ字が土といふ字になつて胡麻化してある、道庵うれしがつて海土藏を見に行くことにする、その他松本に於ては有志連の招待で種々の史料参考品等を見せられる。

愈々道庵が海土藏見物、勇氣漂々たる勸進帳や岩見重太郎を見せられて嬉しがる、佛頂寺彌助と丸山もこれを見てゐたが、あんまり馬鹿々々しいのと、偽物であると知つて佛頂寺が舞臺の上で海土藏を取つて抑へる、下等の江戸ッ兒が土地の客を百姓呼ばゝりしたので川中島の百姓が承知しない、下等の江戸ッ兒をとつちめる、結局道庵が仲裁に出る、と

いふ始末。

お銀様は宇津木兵馬に愛想づかしを云つて別れ、その晩フラスクと甲府の宿を出て知らず知らず故郷へ歸る、その途中琵琶が殺されて、辨信が松の木に吊されてゐるのを見る、それを助けて自分の家へ連れて来る。

流轉の巻終り

第廿五 みちりやの巻

大菩薩峠の西の麓、裂石の雲峰寺で雲納が集つて机龍之助に就ての物語りをしてゐる。澤井の道場ではお松が教育事業をしてゐる、與八がわからないながら讀むお松が人を感じさせる、與八が子供相手になつてゐる、總てそこから大きな感化と一種の宗教が生まれさうな形になつてゐる。

七兵衛は神尾主膳から江戸城内の間取りを聞いて、「竹流し分銅」が果してあるか無いか一世一代の冒険を試みるつもりで江戸城の御寶藏へ忍び込む、それと同時に別に怪しの者が忍び込んで江戸城を焼きに来る、七兵衛がその忍び振りの拙劣なのを冷笑して様子を見届けると薩摩邸の連中であつた。

それから七兵衛はその附近に住んでゐる金堀少年の忠作に會つてこれからは外國貿易で

なければ大金は儲からないといふ氣焔を聞かされたり、衝立の蔭で西郷南洲の噂を聞いたりなどする。

白骨の温泉へ山の通人が一人舞ひ込み、お雪のあげ足を取つて通をふり廻す、北原が竊に障つてそれをやりこめる、お雪は自分の近況を辨信に向けて手紙の態で書いてゐる、その以前、いやなおばさんから妊娠してゐると云はれて身も世もあらぬおもひ、今まで快活であつたお雪ちゃんも陰鬱になり感傷的になつて炬邊閑話の席にも出ない。燈小屋の神主様から忠告される、お雪ちゃんは心のなやみを手紙の形式で一々辨信に訴へる。

駒井と田山が房州南端の海岸を歩きながら駒井は海洋に就ての科學的知識を語る、海岸でふとジャガタ芋を拾ひ、それを持ち歸つて金椎に料理をさせる、金椎は支那料理が上手である。

食事が終つた後へマドロス風の異人が忍び込んで食堂をさんぐに荒し廻つてゐる、しまひには酒を盗み出して飲み、酔つばらつて兵部の娘の部屋に入り込み亂暴を働かふとする、田山白雲がそれをきよつけてきびしく取つて抑へる。

併しマドロスもその後降服してこの一家の中へ加へられることになる。

兵部の娘と茂太郎とが、随しく話し合つてゐたが、茂太郎は辨信の姿を空に認めて、假若の面を片手に走り出して歸らない、皆々心配したが、兵部の娘だけは、あの子は歸りますよと云つて安心してゐる。

信濃の淺間の温泉に泊つてゐた兵馬は夜中に自分の處へ戸までいして来て寝込んでしまつた手古舞姿の藝者をもて餘し、そのまゝにして行つて了ふ、あとで藝者が驚いて抜け出した、その後へまた佛頂寺、丸山が来て飲んでゐる、そこへ昨晚の酔拂ひ藝者の旦那から頼まれた土地のならず者がゆすりに入り込み却つて佛頂寺の爲にとつちめられる。

斯くてみんな出かけて行つた後、昨晚の藝者が井戸の中へ身投げをしたといふことで又騒ぎが起る、實は井戸の中のは衣裳だけで人はわからない、兵馬は中房の温泉を指して進んで行く。兵馬が中房へ行くのは龍之助らしいものが山間の温泉へ行つたといふ當りをつけて、白骨と中房と二つのうち先づ中房を選んだのだ。

こゝで又道庵先生の心機が一轉する、この間の晩芝居小屋で下等な江戸ツ子が相客に向つて百姓呼ばはりをした爲に土地の百姓等の憤激を買ひ、ひどい目に合はせられたのを見て、成る程、農は國の原だ、百姓程強いものはないといつて、こんどは武者修業をやめて佐倉宗五郎仕立ての百姓風をすることになつた。

中房の温泉に着いた兵馬は、この温泉宿を逐一さぐつて見ると布團を積み重ねた一つの怪しい部屋がある、布團を押しつけて中へ入つて見ると、そこにゐたのは意外にも一人の女で、然もそれが先日淺間の温泉で自分の座敷へ戸送ひをして来た酔つ拂ひ藝者であつたことによつて開いた口がふさがらない。

みちりやの巻終り

(第七册)

第廿六 めいろの巻

白骨の温泉ではお雪ちゃんと龍之助が、佗住居のやうな隠れた生活をしてゐる、お雪ちゃんには憂鬱と感傷的になり、龍之助は尺八を弄んだりしてゐる。

中房の温泉を失望して出て来た宇津木兵馬の後を馳け落の藝者が追かけて来る、佛頂寺と丸山が横から出て来てその藝者をものぐさ太郎のあたりで何れへか連れて行つて了ふ。

お角が熱海へ湯治に行く、小田原の講釋場で南洋軒力水の講釋を聴く、この力水は南條力であつた、がんりきがついて来てお角をからかふ、がんりき、小田原で御用となる、山崎讓に捕つて縛縛りになつて曝される、お角が通りかゝつて腹をたてながらもそれを助けてやる。

清澄の茂太郎は般若の面を抱え出鱈目の歌を唄ひながら、海岸を歩き、浪にさらはれて海龍と間違へられ、海女を驚かす。

駒井甚三郎が田山白雲を捕へて海と海産物のことを論じてゐる處へ海龍が出たといふ報告がある、それは茂太郎が波にさらはれて般若の面を頂いてゐたのが海女によつて誤傳さ

れたのが原だ。駒井は海龍のことを調べる。

一旦波に渡はれた茂太郎は又這ひ上つてたづねて来た兵部の娘と共に千鳥の笛を吹く、駒井と田山白雲は海岸を行く、駒井が詩吟をする、茂太郎の出鱈目が聞こえる。

神尾主膳が根岸の屋敷で書道を稽古してゐると、風を引かけた子供が入り込んで来る、以来主膳は子供を相手に遊ぶことをはじめ、七兵衛が来て、近いうち江戸中が焼けるなぞといふことから、西郷南洲等の事を噂をする、神尾も膝下の形勢をいま／＼しがる。

お絹は丸髪なんぞに結つてお洒落をしてゐる處へ金公が入つて来て世間話からお角の噂によつてお絹の御機嫌を損ひ、着物を焼かれたり、なぐられたりして金公悲鳴を揚げる。

青梅街道の武藏アルプスを眺むる處の新町に地藏菩薩のお堂を建てたものがある、それは十九年以前に與八が捨てられた處だ、與八はこの地藏堂に手造りの草鞋を掛けて旅人の取り去るに任せてゐる、お松が或る日近在へ出張教育の道すがら、この地藏堂へ立寄つて見ると人間の生首がごくもん臺に曝された處の繪馬が一枚かけてある、誰の仕業ともわからなかつたが、實は七兵衛の仕事なのだ。

與八が道場の留守居番をしてゐる處へ七人の壯士が押かけて来て、決議文を読みあげる、お松が歸つて来た、最前の生首の繪馬をそつと持つて来たのを與八が知らずに踏み碎いて了ふ、お松はこの繪馬を風呂の下か何かで焼いて了つて下さいと與八に頼む。

與八は水車小屋へ米取りに行つてその序に繪馬を焼いて了はうと思つてゐる處へ逃げ込

んで来た曲者がある、それは七兵衛がムク犬に追ひ込まれてこゝへ逃げ込んだのだが、そのうち與八の平和な親切な男であることを知り、焔邊でお茶を飲みながら、フト生首の繪馬を見つけて、それから七兵衛が與八の身の上話などを聞く。

木曾の福島の宿屋で道庵先生が大聲をあげて讀書をする、米友が頻りにそれを監視する、道庵が娘を賣つて馬を買ひに来た百姓を助ける、米友熊に見惚れてゐる時、又しても道庵を見失ふ、寢覺の床で川流れといふ聲を聞いて、さてこそと飛んで行つて見ると、道庵ではなくて名古屋藩の役人が溺れたのであつた。そこへ道庵も馳けつけて、お手前ものゝ腕を振つて溺死者を甦らせる、米友その手腕に敬服する。

道庵先生が木曾の寢覺の床で御同職と風景を論じたり、人物を論じたり、名古屋藩の少年家老鈴木氏、浦島太郎と混線した川越三喜のエピソードなどがある、名古屋藩の役人を助けた縁で道庵主従がこれから名古屋入りをするのに大きな便宜をうける。

白根三山の麓、お銀様の邸内の丘陵の上で辨信とお銀様が、感想を語り合ふ。

火事が起る、有野村の藤原家が丸焼けになる、その盛んな火を見ながら、お銀様はそれを痛快がる、辨信は、愛は破壊と絶滅ではなくて生命と救ひとにあると説く。

この火事はお銀様がつけたものらしい、この火事の結果、伊太夫の後妻お勝とその腹に座れた三郎との行方が分らない、多分焼け死んで了つたのであらう。

辨信は櫛の大樹の下にむしるを敷いて大火海を前にして普門品を誦する、後幾日慢心

尙がトテツもない大きな卒塔婆を擔ぎ込んで供養をする。

八六

めいろの巻終り

第廿七 鈴幕の巻

或る山家の中で、辨信がビグミーと語る、尺八が聞こえる、鈴幕の曲である。白骨の温泉でも亦冬籠りの客が、鈴幕の音を聞いて問題にする。

宇津木兵馬が白骨の温泉へ訪ねて来て病む。お雪ちゃんがそれとは知らず看病する。机龍之助が一室に静座してゐると、ビグミーが現はれる、頻りに巧者振つて刀の話などをして龍之助に斬られて了ふ、やがて鈴幕の笛の音がする、血のついた着物を頻りに疊んでゐる女がある、お濱だ、龍之助とすさまじい會話をする、ビグミーが又現はれる、お濱に物さしで打ちのめされる。

兵馬は尺八の音を聞いて忍び寄る、佛頂寺と丸山が兵馬の跡を追ふてこゝへ押しかけて来る。

兵馬は燈小屋の神主様に陽光を説かれ、諸國山岳と温泉の物語りなどを聞く。

佛頂寺丸山は鶏を煮て飲んでゐる、兵馬は神樂師の一行をはじめ、冬籠りの連中と話をする、佛頂寺丸山の噂なども出る、お雪ちゃんがいろ／＼働いてゐるうしろから、佛頂寺

が目かくしをする、その手が冷たい、兵馬の姿をお雪ちゃんがふと風呂場でスキ見をして驚いたが、それと名乗らない方がよからうと思案する。

佛頂寺彌助は尺八の音を嫌つておぞ毛を扱ひ、やがて丸山と連立つて白骨を出てしまふ。山の話が夢に入つて龍之助とお雪ちゃんとが、白馬岳の頂に登り、盛んなる山の堂々巡りを見る。

宇津木兵馬は軽い諦めをもつて、飛騨の平湯を目ざして白骨を出立する。

鈴幕の巻終り

第廿八 Ocean. の巻

駒井甚三郎と田山白雲が、九十九里の濱を馬を並べて進みながら、科學や宗教の事を語り合つて、富浦のあたりでビール瓶を拾ふ、その瓶を開けて見ると、ウイリアムペンと署名した英文が認めてある、駒井がそれを讀みながら説明する。

やがて、銚子ヶ浦に行く、これより先きマドロス君は銚子の海の黒灰浦で潜水夫をやつて土地の人を驚かしてゐる、これは駒井の頼みを受けて、この海に沈んでゐる密漁船の汽機閘を調べに来てゐるのだ、その時、この邊の海岸に幕府の勘定奉行小栗上野介の定紋をつけた測量隊が来てゐる。

八七

駒井甚三郎はそれ等の諒解の下に密漁船の機關取り外し引き揚げ工事を行ふ。その不在中清澄の茂太郎は房總第一の高山に登り、アルバトロスを眺め、柱木の牧場まで小牛を送り、番兵さんによつて、白牛酪の御馳走になり、諸動物の物語りを聞き、小牛に乗つて歸る。

兵部の娘と、茂太郎と白雲の寫生帖を見て藤口を利く、處へ鯨が着いたといふ聲が聞こえる、鯨ではない、素敵に大きな黒船だ、黒船の着いた濱へ走り出て、茂太郎がハライツを踊る。

駒井が引揚工事をやつてゐる間、田山白雲は香取、鹿島から水郷に遊び、遂に鹿島灘に至り、神代の英雄を思ひ起してこれを描かんと企てる。

Oceanの巻終り

(第八册)

第廿九年魚市の巻

年魚市といふのは、今の愛知のことで、この巻は主に名古屋城下の事を書いてゐる。

木曾方面から、尾張名古屋の城下へ乗り込んで来た道庵と米友はまづ、豊臣大閤の爲にその生れ故郷中村で英雄祭りをやらかして注意人物となつたが諒解が解けて名古屋城拜觀の特待を蒙る。

南條、五十嵐が名古屋の城の前に立つて古今を論じ、柿の木金助が風に乗つて金の鯨を取りに行つたといふ物語などを撥ぎ出してがんだりを唆かす。

城中の局では、奥女中達がかましく雨夜の品定めをやつてゐる、名古屋での美人番附をつくり、その横綱が、銀杏加藤の奥方であるといふことになつて、こしらへた番附を長押しに張りつけて置くと、その晩のうちに盗まれて了ふ。その盗んだ奴はがんだりきの百藏だ。清洲の山吹御殿の一間に先祖の加藤肥後守清正を祭つて銀杏加藤の奥方が、病氣になつてゐる伊都丸といふ弟の少年に今加藤肥後守の血筋を傳へてゐるのはお前ばかりだと云つて勵まし、肥後の守の築いた名古屋の城を見返すやうになることを吹きこんでゐる。

辨信が白骨谷へ行かうとして立ち迷ひながらお喋りをはじめ。

白骨の温泉では、北原賢次が傳書鳩を養成してお雪ちゃんと話をしてゐる、お雪ちゃんは北原に辨信や茂太郎の事を物語る、又尺八が聞こえる、その尺八を問題として北原がお雪ちゃんの不思議な連れのある事を尋ね、お雪ちゃんも隠しきれず、遂に北原と村田とを案内して龍之助に會はせて了ふ、龍之助は北原を相手にして快く十津川の昔話などをする。飛騨の平湯を目ざして行つた兵馬は平湯へ着いて白骨にはお化けが出る、いやなおばさ

んの怨靈が出るなど、噂をきき、その夜寝のお濱の事を夢に見る。

その翌日雪、佛頂寺と丸山が押しかけて来る、床の間にある甲冑をつけたり、武器を弄んだりする、三人が平湯の大瀧を見に行く、燈小屋の神主が瀧壺の方から不意に出て来る佛頂寺が恐れる。

道庵先生名古屋城頭の見物、米友が伊勢の方を見て望郷の思ひに堪へず、悲憤して我を忘れる、道庵必死にそれを支える。

道庵萬松寺に行く、名物の悠長な元服行列を見る、萬松寺の庭の稚子櫻の下で眠りかけた米友は眼を覺して見ると、踊子連中が櫻を取りまいて盛んに踊つてゐる、その中の一人の娘はお君の朋輩のお杉であつたから驚きの餘り米友式に前後の考へもなく飛びついて、人を驚かす。

辨信を失つて後のお銀様は呪咀と憎悪と反抗とを集めて一種奇怪なる悪女塚と云ふゲロテスタを押し立て、それに古今の有ゆる悪女を祭り込む。

そこへ江戸から女興行師のお角が伊太夫を訪ねて来る、お角は或る興行上の必要から名古屋に於ける舞踊界の事について頼まれたことがあり、名古屋を中心に東西の興行界を視察しやうとして、上方へ旅に立つた途中御無沙汰を兼ねて立ち寄つたものであるが、伊太夫はこの機会に持て餘し娘を再びお角の手によつて旅の保養をさせやうとする、お銀様も存外それを拒まない。

神尾主膳はこの頃頻りに子供達と馴染んでゐる、子供達の朱に交り易き本能に舌を巻いてゐる、七兵衛が来て「竹ながし分銅」は一箇が四十八貫からあつて、手におえないが、その一つは確かに尾張名古屋城にあるらしいといふことなどを語る。

駒井甚三郎は航海學や海圖、天體の研究などをしてゐる、茂太郎を出鱈目の歌から科學的に導かうとする、尙ほ駒井は燃料としての石炭採掘を磐城岩代の方に求むべく、坑夫の経験あるマドロスを連れて行かうとしたがマドロスがゐない、マドロスは又しても酔拂つて兵部の娘に狼籍を働いて逃げ出してしまつたのだ、駒井はマドロスの不埒を大いに憤るが、當人の兵部の娘は存外平氣であつた、やがてマドロスは捕へられて来たが大聲あげて泣いてゐる。

鹿島灘の濱で、田山白雲は測量士に會ひ、奥州の松島に伊達正宗が太閤から貰ひうけた觀瀾亭があつて、そこに永徳の傑作があることを聞き、急に遊意勃々として松島に向はんとする。

白骨谷の月夜、お雪ちゃんが龍之助と高欄の上で下へ来た女の珠數を落すのを見る、白骨も何となく人の出入りが落ちつかないからもつと奥へ行つて了ひたいものだ、飛驒の奥の白川郷といふのが太古の理想郷であるといふからそこへ行つて一生を落つたいものだといふやうな事を物語る。

甲州からお銀様を取りもちして東海道筋をのぼつて来たお角さんは、赤阪で大相撲の興

行を見る、そこで岡崎藩の悪いたづらをする侍と名古屋の町人とが大喧嘩をし、岡崎武士が手ごめに會つたのを岡崎藩の美少年、梶川與之助といふのが同輩の名譽の爲に名古屋者と相撲とを切つてお角の駕籠に隠れて行く。

この一行が鳴海へ渡る。

お銀様は古鳴海の史的回顧の爲にふらりと出て了ふ。

宇治山田の米友は、お君の朋輩であつたお杉を見つけてから故郷のことやお君のことがむやみに頭に上り、七里の渡し場までお杉を見送り、それから夢中になつて駆け出すうちに古鳴海でお銀様と出くわし、鳴海の宿へ来てお角とも出くわして眼を丸くする。

愈々白骨を立ち出で、白川谷の理想郷へ進まうと志したお雪ちゃんも途中畜生谷へ落ちることを怖れる。

名古屋の至る處で歓迎され、有頂天にのぼせきつてゐた道庵先生がフイに水をあびせられる、これは名古屋名物の「水祝ひ」の儀式であつた。

東妙和尚は與八に向つて土地の名物の尊重すべき所以を説き、吉野村の梅林を保護し、その梅の實の利用厚生法を説く。

お松は人間の生殖過多の事を心配する。

東妙和尚が與八をつれて梅林を買ひに行き、梅の老木に一々名前をつける、その裏山で七兵衛は静な心持で薪を切り揃へてゐる、ムク犬がやつて来る、そこで與八は七兵衛と話を

をする。

お松は七兵衛に房州の洲の崎まで行つて貰ひたいことを頼む、どうかして登を駒井甚三郎殿と親子の立派な名のりをさせたいと思ふのだ。

お松の頼みを受けた七兵衛は天性の早足で房州洲の崎へ着、使命を果し、駒井から船を見せられて全く別の世界があることを知る。

泣きわめいてゐるマドロスを村の人が没つて行つて了ふ、土地のゴロツきの仕業だが、そのうしろに黒幕がある。駒井の心配を見かねて七兵衛がマドロスを取り戻して來るといふ。

岡崎藩の美少年、喧嘩で人を斬つてお角の駕籠に陰れて來た梶川與之助は銀杏加藤の奥方の弟伊都丸の友人であつた、與之助が此處へ訪ねて來る、清正の城地、肥後の熊本へ行きたいことを伊都丸が物語る。

信濃の國の安曇の郡の山又山、雪に覆はれた番所ヶ原の中で辨信法師が一人踏み止まつて又お喋りをはじめ。

年魚市の巻終り

(第九册)

第三十 畜生谷の巻

お雪ちやんが彌平兵衛宗清に似た老人から、白山白水谷畜生谷の物語を聞いてゐるうち、老人の脊負つて来た鎧櫃が透き通り、中に龍之助が眞白くなつて死んでゐる、前立の文字に俗名机龍之助靈位とあり、現はれたのに夢を破られるを自分は白骨を出て飛驒の平湯に来て龍之助と旅路の夢を結んでゐたのであつた。

平湯を立つて高山に行く途中、平湯峠の上で釣臺にのせられて行くいやなおばさんの死骸をお雪ちやんが認めてぞつとする。

飛驒の高山に入り込んだ宇津木兵馬は、山岡鐵太郎の由緒などを訪ね、胡見澤といふ新代官の陣屋に足を止め、農兵等に劍術を授けてゐる、高村卿といふ氣満々たる公家さんがこゝに預けられてゐて、兵馬はそのお守役の様になる。

高村卿が居所に宛てられてゐたのは、例のいやなおばさんの屋敷であつた、久しく無名沼に沈んでゐたいやなおばさんの死骸がこんど現はれて来たから、その葬式をする爲に家を借してくれといふ、高村卿遠慮なく葬式をやれと云つて兵馬を連れて馬を攻めに行く。

その後でいやなおばさんの死骸が増き込まれて葬式の席上親類喧嘩を起し遂に火事を持ち上げる。

この火事のほとぼしりが龍之助お雪ちやんの泊つてゐた宮川岸の宿屋を焼いて了ふ、龍之助はお雪ちやんを抱へて避難する。

道庵先生が名古屋で大持てなのに躍起となつたデモ倉とプロ龜等が道庵に向つて反逆を企てる、且つ又道庵の行く先に人をやつて道庵をべちやんこにしようとし、その人選に折助のママちやんと云ふものが選ばれる、ママちやんは金茶金十郎といふ豪傑を連れて道庵奉制の爲に名古屋へ向け出張する。

名古屋に泊つてゐた道庵は、或日米友のゐないのに驚く、米友は鳴海の宿にお角さん、お銀様一行と泊つてゐたのだが、フト親を慕ふ子熊を見つけ出して、それを引きとつて出かけたがツイ朝寝をした爲にお角さん一行に先立たれて了ふ。

女興行師のお角さんは鳴海から熱田の宮へ参詣する、こゝでお銀様が又フタクと出かけて行く、お角はその後を伴う者に追はせてゐると大相撲の一行の大關の島川といふのを三十餘名の關取り連が手込めにしてゐるのだ、この騒ぎが誤傳されて、黒船が近海へ押かけて来たといふことになつて、熱田の町が動亂し、家財道具を荷なつて立退く、さながら無人境になつてしまつた、その中を熊の子を載せた大八車を曳いた米友がたつた一人エンヤラクと行く、お角さんの駕籠と通りすがつてお角が米友と一緒に名古屋へ連れて行く。

道庵先生が醫學館に於て大講演を試みる、はじめは神妙にしてゐたが、遂に脱線して尾州家の政治向などを彌次りはじめたから、席が穩かでなくなる、そこへ一頭の小熊が飛び込んで来たので上を下へと混乱する、米友が飛んで来て、その熊は危険性が無いと警告する、道庵率制運動の爲に折助連から選抜されて安直先生と金茶金十郎が出發の送別會を湯島の千本屋で開く。

畜生谷の巻終り

第卅一 勿來の巻

清澄の茂太郎が出鱈目の歌を唄ひながら行くと、天神森に於て火の燃へるのを見あれは捕へられて行つたマドロス君が焼き殺されてゐるのだと恐れる、然し又一方を見ると小船が海の中を漕がれて造船場の方へ行くその中に乗つてゐるのが茂太郎のさとい眼で見えてマドロスと七兵衛に相違ない、そこで茂太郎はどちらが本物だか迷ひ出す、内へ歸つて見ると、今船で見た七兵衛がお茶漬を食べてゐる。

駒井の家の前で群集が盛んに示威運動を試みる七兵衛が矢文を拾つて来て駒井に見せるそれによると駒井が毛唐と通じて謀叛の準備をしてゐる、近日天誅を加へるから覺悟をしろといふ意味になつてゐる、駒井はこうなつては此の地を立退くに越したことはないお前

も一緒に行かないかとすゝめると、七兵衛がそれは願つてもない仕合せだが、澤井にゐる登棟とお松をもお連れ下さいといふ駒井は海外へ新天地を求める積りだが差當つてこれから陸前の石の巻へ一先づ船を向けて見るつもりだといふ。

七兵衛は澤井へ歸るべく出發したが、その途中、船といふ別世界によつて自分の前途の光明を認める。

田山白雲は勿來の關へ来て、低徊願望する、一人の田舎娘が來たのを手招きすると娘が却つて恐れて逃げ出す、白雲は村人から追刺と謬られたが、委細が分つて小名濱の綱且那小谷といふ豪家へ案内される、こゝに山形の雲井龍雄がゐる、白雲の繪に賛をしたのが縁で二人が大いに談論する、白雲はこゝで狩野永徳の爲に大氣焔を吐く二人は打ちつれて盤城平に向けて出發する。

飛驒の高山の宮川岸の宿屋を焼け出されたお雪ちゃん、屋形船の中に龍之助を休ませる、自分は火事場へ取つて返したがどうすることも出来ない、歸り途川原の中で一つの寢棺を見る、それでも、漸く久助を探し出して應急の手段を講ずる、本當に着のみ着のまゝでどうすることも出来ないお雪ちゃんは、フト白骨温泉の北原のことを考へる、屋形船の中にかくれてゐた龍之助は或夜そつと宮川の川原に忍び出で、さまよひ前夜お雪ちゃんが認めた寢棺のそばに行つて見ると人がいる、棺にかけてあつた一重ねの着物を盗みに來たのだ、龍之助の姿を見て怖れて逃げて了ふ、龍之助ふと棺の上の一重ねを自分がかゝへてさ

つさとかへる、この棺の蓋が三角に開いてイヤなおぼさんが死面を出してゐる、歸つてこの一重ねを薄着で寝てゐるお雪ちゃんにかけてやる。

お雪は眼がさめてこの着物がイヤなおぼさんの物に相違ないことを見てゾットする。それから、この着物を焼いて了はうと川原へ焚物を集めに行つて、例の寢棺の處まで来てしまひコチ明けられた蓋の中になおぼさんの死骸を見て泣くにも泣けない叫ぶにも叫べぬ、そこへ野犬が来ていやなおぼさんの死骸を襲ふ、お雪ちゃんそれを防いで寢棺の蓋をなほして、重石を置く。

それから相應院といふ寺の一間を借りてお雪ちゃんと龍之助と久助が引移る。白骨にゐる北原の處へお雪ちゃんが手紙を書く、書きながら外を見ると、川原でいやなおぼさんの死骸を焼く煙が立ちのぼる。

龍之助は小京都とらたはれた高山の町の夜にさまよいだす、櫻の馬場へ来て馬子を斬らんとして馬が逃走する。

がんだりきの百蔵が、火事場跡に来て見廻り差配の蔭口をきこむのお代官が女好きで、最近、お蘭といふ淫婦を手に入れた事などを聞き、いやな氣を起してゐる、そこへ紙屑買ひがやつて来る、火事場跡を荒しに来たのだ、その時に辻斬鹿の化物を認めてがんだりきは一散に逃げ出し、紙屑買ひは井戸へ落ちる。

お代官屋敷にゐる宇津木兵馬はこの頃淫婦お蘭の誘惑を受けてゐる、今晚もみしりく

と音するのは、お蘭が忍んで来たのだなと身を堅くしてゐると、それは戸迷ひしたがんだりき百蔵であつた。

兵馬はがんだりきを追ひ拂ひ邸内を巡視して町のうちへ出て来て見ると高札場に近い往來の真中に酔拂ひ藝者がゐる、代官に口説かれて逃げて来たのだ、よく見ると、信州の松本以來、中房の湯から後を追ひかけて来たその藝者であつた、兵馬はこの藝者をもて餘してゐる時に物蔭から級肩買ひが飛び立ち、それを取り抑へてゐる間に、柳の木蔭から出た怪しい物影がうしろから藝者を締めて引ずつて行つて了ふ。

立ち戻つた兵馬が見ると、藝者の影は既になく、緋縮緬のゆもぢが地面にずるこけてゐる。

お雪ちゃんは、白川白水谷、駕籠の渡し加賀の白山に憶れてゐながらも、衣桁にかけたいやなおぼさんの一重ねをいろ／＼の氣持ちで眺める。

武州澤井の机の家では引越しがはじまる、皆んな揃つて洲の崎の胸井の船へ移らうといふのだ、お松は喜んでそれを當然與八の同意を受くべきものだと思つてゐると、意外にも與八だけは都太郎を連れて西國巡禮に行くといふ堅い決心を語る。

お松は泣いてしまつたが、どうも仕方がない、結局與八だけを残して皆んなが房州へ向けて出發する。その途中都太郎がむづかり出してどうしても與八さんと一緒でなければいやだといふ、皆んな持て餘して遂に七兵衛が都太郎を抱いて澤井へ逆戻りする。

澤井の道場に一人残された與八は、自分が捨てられた時のよだれ掛を首にかけて都太郎の名を呼びながら泣いてゐる、そこへ何處からともなく都太郎が歸つて来る、翌朝一切の始末をした與八は都太郎をおぶつて西の方へ向けて旅立つ、腰に下げた一挺の銃、東妙和尚から授けられた彫刻で渡つて行かうとするのだ。

根岸の閑居でお絹が神尾主膳にこの頃磯砲洲川岸へ出来た素晴らしい異人館を見に行かないかとすゝめ、らしやめんの噂などをする、主膳はお絹にすゝめられたまゝ異人屋敷を見ようとして出かけたが、辨信によつてつけられた頼の大創の事からいまいしさが湧きかへり、疑氣がさしてゐる處へ、日本橋へ来ると坊主の曝し者を見せられて、かげまだくと云ふことから一つかげまを弄んで見たい氣になり、芳町の方へ向きをかへる、そこで金筒といふかげま茶屋へ金助の手引で乗り込んで見ると、そこに女輕業の一座で力持ちをしてゐたおせいおせいが女中をしてゐるのを見て、その肉體をからかい、女相撲と座頭の惡ふざけの話をする、やがて槍踊りのかげまが出て来る、この時かげま茶屋の一方の部屋にお絹が泊り込んでゐたことを神尾が認め、尋ねて見ると昨晚金助と一緒に異人館の異人さんに槍跡を見せる爲に連れて来て、おそくなつたから自分だけ泊つたのだと平氣な顔で答へる。神尾は不快千萬な氣持ちをもつて根岸へ歸る途中、東照宮の前へ来ると見るに忍びない亂暴狼藉がしてあるのでムラ／＼と憤る。

白骨の温泉に辨信法師が済ました面で浴槽につかつてゐる、番所ヶ原で倒れてから、黒

部平の品右衛門爺さんや燈小屋の神主さんに助けられて此處へ来たことをべら／＼と喋り出す、それから爐邊閑話の一座へ来てお喋りをはじめると、外で足音が聞こえるか聞こえないのに、あれは久助さんが来たのだと云つて一座の者の膽をおびやかす。

勿來の巻終り

(第十册)

第三十二 辨信の巻

白骨の温泉へ、ふらりと辨信が訪ねてきたので、山籠りの連中は仰天し、辨信は、例のおしやべりで、自分の越し方や、お雪ちゃんの身の上をしやべりまくり、さしもイカモノ揃ひの山籠りの連中も、呆れ返る。

辨信が、この宿屋へ泊り込むと、例のビグミーが出てきて、又さかんに辨信に話しかけながら、活躍する。ビグミーを通してお濱だの、イヤなおばさんだの、淺吉のことなどがさかんに幻影にあらはれる。飛騨の高山へ越したお雪ちゃんの身の上に、胡見澤くるみさわの新お代官なるものが、魔をなすことの暗示をビグミーの口から、辨信に傳へられる。池田良齋と、俳諧師の柳水が、湯槽の中で、風流を語る。宗舟畫伯がやつてきて畫談に

なる。北原健次は傳書鳩を工夫し、それを以て、高山方面へ出かけたが、その傳書鳩が、湯槽の中に舞戻つてきたので、湯槽の一同が氣にかけ、搜索隊を平湯から高山方面へ向けることにする、しかも此際一室に籠つて寝てゐる辨信の存在はすつかり忘れられる。

熱田の明神の裏、七里の渡しの外に立つてお銀様は、とほく伊勢の國を眺め、山海の風物に思ひを寄せて我をわすれてゐるうちに、ふと辨信といふものゝおもかげが頭にきて、自己の生活の中の人それゝの思ひ出に、唯一の辨信といふものゝ存在が、お銀様にとつて大きな謎になつてしまふ。

そこへ一人の小さな尼さんがきて、お銀様に物を訊ねる、この尼さんはあじまの子鐵といふ此邊きつての兇賊の娘であつたが、子鐵が、忍んでこゝへ上陸することを知つて、捕方が此小娘を囮かりによこしたのだが、それに引かゝつて、子鐵が、召捕られてしまふ。その凄しい光景をお銀様が目のあたりに見てゐる。

名古屋在留の道庵先生は、津田生といふ書生の工夫による新式飛行機に、引かゝつてゐる。宇治山田の米友は、道庵のために飛行機工場へ辨當を運んだりしてゐるうちに、熊の子の世話をしてゐるが、この熊の子がムクのやうなわけにゆかないことを淺間しがる、おつかひの途中米友は安直、金茶の連中が日本武藝總本家と看板をかけて宣傳興行してゐるのを見て、せゝら笑ふ。

神尾主膳が閑居して唯一の善事として書道をやつてゐる。そこへ子供等が、ワ、ワ、集

つてくる。主膳は子供等を相手に戯れるが、子供等の性能が、異常に發達してゐることに、類まけがする、或時、この神尾とお絹の根岸の佗住居にお絹の手代をしてゐた、忠作といふ小僧がやつてきてお絹に、近ごろ築地へ出来た、異人館へ周旋を依頼する、これからは外國人相手でなければ大きな商賣が出来ない。そこで、異人は、女に眼がないから、その異人に、近づきになれるやうに、お絹に取持をたのみたいといふことだ、お絹は、一も二もなく承知する。

武州澤井の机の家の留守お松、登、ばあや等の同勢は七兵衛の案内で、無事に洲崎の駒井の根據へ落着いた。駒井は早くこの連中を引つれて新造の船に乗つて、海外への新發展の鹿島立をしようとするが、折から田山白雲が旅中なのに、當惑する。

そのうち、駒井に對する周囲の誤解や煽動が烈しくなつて、民衆が、襲撃を加へる、よつて、一同は船に難をさけて、そのまゝ洲崎を出帆する。

七兵衛は、田山白雲の畫室を取片付けて陸路を出發する。船の目的地は、外洋へ出で仙臺石の巻に至ることであり、七兵衛も又北方へ出かけた白雲のあとを追ふて途中で出會ひ次第俱に石の巻へ向けて、そこで船の連中と相會しようといふ、打合せであつた。

ひとり郁太郎を背負ふた與八だけは澤井の机の家からはなれて、大菩薩峠を越して西の方へ甲州入りをする。峠の上で、與八が既往今來を考へて、お地藏様に、笠をさゝげる。與八は、惠林寺について、慢心和尚に見參すると、和尚が、合掌の仕方を饒別に教へて

くれる。そこを辭して又、西へ向つて進む、慢心和尚の紹介をもつて有野村の伊太夫のもとへ一時足を停めることになつて、その新築工事に力を貸してゐるうち、お銀様の拵へた悪女塚を引くり返してしまひ、暴女王の威勢に懼伏する屋敷うちの人の顔色を失はせる。飛驒の高山にはチラ／＼雪が降りだしてくる。龍之助とお雪ちゃん、炬燵に冬ごもりをしてゐる、そこへ貸本屋がくる。本を借りて話込んでゐるうちに、お雪ちゃんは、此貸本の筆耕をすれば、相當の内職になることをきいて、今の窮乏した生活に、一脈の活路を見出したやうな、おもひをする。

高山の代官屋敷で、胡見澤が、愛妾お蘭の方と雪見の宴を催してゐる。そこへ貸本屋鶴壽堂の番頭政吉が来る。れいのイヤなおばさんが同伴した淺吉といふ男の弟だ、若い番頭は、風呂敷を解いて、薄葉綴りの三冊を取出す。二三日來お雪ちゃんが筆耕をした「妙々車」である。政吉はお蘭に散々にかはかれて、這々の體で逃げ歸る。

お雪は、外出するにも衣裳がないので、ふと目についたのは、衣桁にかけたイヤなおばさんの片見の小紋の一重ね。それを引かけようかどうかと迷ふが、結局壁にかゝつた寺用の兩具―笠と合羽とかるさんで町へ下りて焼跡の工事の中の公設市場のやうな小屋で小豆は買ったがお頭付に迷ふ。そこへ、お代官が見廻りに來て早くもお代官の目に止まる。お雪ちゃんは買物をして歸つてみると、龍之助は、何をする爲か、碁盤を前にして紙を疊んで刻んでゐる。お雪ちゃんが立去つて間もなく、公設市場に一の難題が持上つた。たつた

今小豆やお頭付を買つて立ち去つた在郷らしい女は、何處の者か詮議せよとお代官からの嚴命。

その夜―市内は非常見廻りの大警戒、その中高札場の柳の木蔭に墨繪のやうな影がさした。それは、一晩に一度は夢遊の巷を彷徨ふて歸らぬと血が乾いて眠られぬ龍之助だつた。相應院へ歸つて來た机龍之助は、お雪の不在に氣がついた。夜具の中へ手を入れて見たが中は冷たかつた。

日が登つてから、しばらくして訪ねて來たのが政吉、お雪ちゃんがゐないのに不審を催し、座敷へ上り炬燵へもぐり込んで待つ、うと／＼してゐると、自分の首は白い蛇のやうな人間の腕で、うしろから巻かれてしまふ。龍之助は政吉を戸棚の中へ無雜作に投げ込んで、最初の通りその前の夜具の中に身をうづめて寢込んでしまふ。

夜更け、政吉の兩腕は後ろへ括り上げられ、一條の繩がついて、それが龍之助の片手にとられてゐる。幾ばくもなく、代官屋敷の門前の松の木に縛りつけられてゐるのが政吉であつた。

寢巻姿のお蘭の方は、夜中に、お手水場とは反對の方向の廊下を忍びやかに歩いてゆく。近頃客分になつてゐる宇津木兵馬を口説きに行くのだ。兵馬は居たが、これは、餘りに生真面目に、キチンと蒲團の上に坐し、一刀を膝へ引寄せてこの淫婦を睨めつけて、やがて寢間を飛び出してしまふ。

この邸の主人胡見澤が、酒氣を帯びて戻つてくる。こゝへ引き立てられて来たお雪ちゃんはお代官に追はれて、道場の中へ逃げ込み計らず津木兵馬に助けられる。

お雪ちゃんて失敗し中庭を歩いてゆく胡見澤は、お蘭の名を呼びつゝ孟宗竹の下で、龍之助と覺しい怪しい者に斬られ、新お代官の生首がカツ飛んでしまふ。お蘭はやつと出て来て、しどけない半身を見せると、これもまた夫婦竹の中に吸ひこまれてしまふ。その翌早朝、中橋の真中に人間の生首が一つころがつてゐた。それは、新お代官胡見澤のそれであつた。しかも、もう一つ不思議なのは、お代官屋敷にはお蘭の方の姿が見えない。

辨信法師は、まだ白骨の温泉に眠つてゐる。教授に向つて来た北原と品右衛門と久助との一行は、鳩の報告によつて、白骨から第二の救護隊が着いて見ると、大した怪我でもないといふことで一同はホツト安心、こんどはお雪ちゃんを再び白骨へ呼び戻すことにしようとなつて、久助と町田とが、飛驒の高山へ来てみると、相應院には、もうお雪ちゃんも、その他の誰れも見當らぬ。

その夜、何者か道庵先生の宿先へ投交した者があつた。米友が庭から拾つて道庵に見せると、それは、安直と金十郎から来た果し状。道庵は急にあはて出して、その翌日名古屋を出立することになる。

さて名古屋城下を離るゝ一里、枇杷島橋にさしかゝると、前方から砂煙をまいて走せ来る一隊、また反対側から同じやうな砂煙、フアツシヨ〜と物々しい。道庵待て、と呼び

かけたのが金茶金十郎。ちつと辛抱して見てゐた米友、喧嘩だか敵討だかお茶番だか呆れ返りながら、手出しを慎しんでゐるうち、思ひ設けぬ道庵先生の武勇の程をみてそつくり返らないわけにいかない。

お角親方も、もう名古屋を出立しなければならぬと、お銀様に御都合を伺ふと、お銀様は、明日は土器野で行はれる、子鐵の磔刑を見に行かなければならぬといふ。さうして子鐵の磔刑から、小さな尼さんが、竹の柄杓で末期の水を捧げ、非人が三十槍突いたのを最後まで眼を放さず見届けてゐたのはお銀様の外に、もう一人、岡崎藩を名乗る振袖姿の美少年梶川與之助であつた。梶川はその足でお角を宿に訪ねた。お銀様は明日は、あの若い衆と一緒に旅がしたいと云つて、お角を困らせる。

飛驒の高山の空氣が悪化するると避難者や浴客で平湯の景氣がとてもよい。同時に風俗が亂脈の極に達して、こゝ暫くは肉慾の天國と化した。

この歡樂の天地を、引くり返す物音が、意外なところから起つた。焼ケ嶽、硫黄ケ岳が鳴動しはじめたのである。歡樂の客は狼狽した、平湯よりも、一層、鳴動の根據地に近い白骨の温泉では、さしもイカモノ揃ひも、悉く驚愕しきつてゐるが、燈小屋の神主さんは案外のおんびりしてゐる。神主さんから「辨信さんはどうしましたか」とたづねられ、辨信法師は、三日の間、如何なる事があつても起してくれなるといつて眠つてゐることに氣がつく、そこで、源氏香の間へ行つてみると、小法師の姿が見えないので騒いでゐると、辨

信さんなら、一人おとなしく湯槽につかつてゐると風呂番が答へる。

こちらは、湯槽の中に辨信、たつた一人山谷鳴動の中に抜からぬ顔で湯につかつてゐるところへ、神主がやつてくる。まもなく良齋先生も手拭をさげてやつてくる。湯槽の中で神主と良齋が神道を論じてゐると辨信が無邊際の廣長舌で、「大乘起信論」をまくし立てる。

辨信と神主は、お湯から上ると足ごしらへをはじめた。神主は、これから焼ヶ嶽の噴火の現場を視察に、辨信法師は安房峠を越えて飛驒の平湯へ出立といふので、一同があつと呆れる。

これより先き、代官屋敷からの二挺の駕籠は、群上街道を南にと云はれたのに、益田街道を一散に走つてゐる。無性に飛んで久々野のに近いところで、木立の前から現はれた佛頂寺彌助と丸山勇仙におどかさされたが無事通過、ぼつねんと置き据ゑられたお蘭の駕籠の上に、のしかゝつて頬杖ついたのは机龍之助、お蘭は、提灯の光で、はじめて龍之助の容貌をみて、何とはなしに身の毛がよだつ。やがて二個の駕籠は、宿次の形になつて美濃路へ飛ばせてゆく。お蘭の知邊、小坂の町の、中繼問屋黒川屋の世話で、無事に飛驒の國を抜け出した龍之助とお蘭どのは美濃の金山の本陣に着いてしまふ。宿に着いて、お蘭は、はじめて龍之助の目の見えないことを知る。黒川屋のおかみさんから恵まれた纏つた金をふところに、これから京阪地方を遊び廻らうとお蘭がそゝのかす。

その夜の明方、龍之助は、渴して水を飲まうとしてとある山陰の湖畔で辨信法師に出會ふ夢を見る。

駒井甚三郎の無名丸が今、北へ北へと走つてゐる。無名丸のメインマストの下には、幾人かの人が語り合つてゐる。お松がある、金椎がある、乳母がある、茂太郎がある、マストの前にはマドロス君が頑張つてゐる、ムクもある、マドロス君は、マストに吊つた黒板に、字を書いて、茂太郎に讀ませる。

船長室では、駒井甚三郎がお松をとらへて、航海に関する説明をしてゐる。鯨が出た、抹香鯨の一團が、百メートルのところを、鹽を吹いて南へ向つて行く。茂太郎はまた出鱈目歌をうたひ出す。

兵部の娘だけが、船室に寝てゐる、船暈だけではない。お松が駒井に接近してゆくの**で**拗ねてゐるらしい。この娘の御機嫌を取りにくるマドロス。

船を送り出して、ひとり田山白雲のあとを追ふて陸路をとつた七兵衛は、九十九里の濱を突破して、香取鹿島に着いたが、たづねる人の姿は見えぬ、併し、行先きはどうかやら陸前の松島の觀瀾亭であることが臆測される、そこで先廻りをしようと、例の快足力で、磐城平を海岸より北へ向つて一文字に進む。

七兵衛を、捜索に迷はした田山白雲は、當然行くべかりし海岸道を外れて、意外な方向轉換をしたのは、小名濱の漁村で計らずも雲井なにがしと名乗る、山形の一奇士と會し、

相携へて、磐城平から道を左に枉げた。白河の關に旅情を慰め、須賀川、郡山、福島を経て仙臺に出る豫定で、白雲漂々の旅をつゞけてゐる。

辨信の巻終り

(第十一册)

第三十三 不破の關の卷

伊太夫の家へ、落付いた與八は、超經濟學の働きかたをするので、經濟本位の伊太夫が驚異の眼をみはつて、たうとう與八は、別あつかひの雇人になり、伊太夫はつひに此の大男とその連れて來た都太郎といふ少年を、自分の家の養子にして仕舞ひたいといふ希望を起す。

名古屋を出發した米友は、尾州清洲の山吹御殿の泉水堀で熊の子を洗つてやつてゐる間に、英雄崇拜でうかれ切つてゐた道庵先生が、雲助のために、ぶつたくられてしまふ。

それを追ひかけようとした米友が、馬を借りようとして馬方と、喧嘩をはじめてゐるところへ、女興行師のお角の一行が通りかゝり、そこで話がわかつてみると道庵の行方もさう心配するに當らないことがわかる。米友は、そこで熊を此の山吹御殿へあづけて、お角

と共に道庵のあとを追つて上方筋へ向ふ。

大垣の城下へ着くと、お銀様がまた、つむじまがりをして、關ヶ原の方へ先發してしまふ。米友は、お角からたのまれてお銀様の目付役にあとを追ひかける。

關ヶ原の入口、樽井の宿で、新に大合戦がはじまるといふ風評をよく聞いてみると、道庵先生が雲助をかり集めて大御所氣取り模擬戦をやらうとの目論見である。

關ヶ原へ着いたお銀様はその夜大谷刑部少輔を夢にみてゐる、お銀様は、此の大谷刑部少輔が好きなのだ、その人物が好きなのみではない、顔面が爛れてゐるやうな悪趣味にも共鳴してゐる。

飛驒の高山で、道場へ逃げ込んで宇津木兵馬のために擁護されたお雪ちゃん、イヤなおばさんの思ひ出と、飛驒信濃の高山が鳴動する間に、何とも云はれない絶望の心持ちで獨り生きてゐる間に不意に辨信法師が訪ねて來たので、やれ有難いとおもつてゐると、辨信はおもつたより、そつけなく行つてしまふ。驚きあわてゝそのあとを追つてたうとう、着のみ着のまゝで辨信につれられて、美濃の國關ヶ原の方へ走つて行つてしまふ。

その間、がんだりきの百は、宮川の屋形船にかくれてゐて、チラとお雪ちゃんの姿を見る。のろまの清次といふ紙屑買ひがきて、その邊を漁り歩く。宮川筋の藝者屋の福松の家へ、がんだりきが入びたつて、彼此と新お代官や、お蘭どのゝ噂をした上に、お蘭どのゝ身の廻りからチヨロまかした、三百の金を、福松の前に投げ出す。

そこへ、宇津木兵馬が、訪ねてくる。福松が甘える、兵馬は、この時分お雪ちゃんと同じところへしばし住んでゐたが、家へ歸つて、お雪ちゃんの居ないことに気がつく。砂金掘りの忠作が、お絹の紹介で、異人館のボーイに住込む、そこで野太鼓の金助が、さかんに洋妾立國論を唱へる、お絹がマダムシルクといふ名で異人館で大持である。駒井甚三郎の船路より一足さきに七兵衛が、石の巻へ到着してしまふ。七兵衛も、その邊の風景を見ながら、仙臺松島等の、船の着くのを待つてゐるが、どうも解らない、そのうちに仙臺六十八萬石の城をみると、七兵衛の謀叛氣がむら／＼と起つて、一つこの城内へ忍び込んで見ようといふ氣になる。

明日はどうまちがつても仙臺灣に無事入港といふ成功は見だが、船の中に乗込んでゐる異種異様の人物とその間の心の暗闘等が、駒井の惱みの一つである。

飛驒の高山からがりきの百蔵と、のろまの清次が出てきて、のろまの方が、こゝで行はれる關ヶ原の模擬戦を見物しようと云ひ出すし、がりきの方は、近江路へのしてしまふことになつて別れる。

美濃と近江の境に、寝物語の里がある、そこへ飛驒の高山を出發した机龍之助とお蘭とが泊り込む、龍之助はその夜、漂々として關ヶ原へ向つて、さまよひ出したが、お蘭どのは、獨り寝物語の里に泊り込んで、うちやちやけてゐる。がりきの百蔵が、美濃の養老酒を一樽さげ込んで、寝物語の里へ繰込まうとする。

一方關ヶ原へ先着した、お銀様は、その夜、これも獨り大谷刑部少輔の首塚をたづねるといつて、ふらりと出てしまふ。途中一つの辻斬があることが、月見の風流人をはじめ、お角の同行の美少年その他を騒がせる、宇治山田の米友も、この辻斬りの怪しい奴を、追はんとして走せ來りお銀様にさゝへられる。

かくてお銀様は、關ヶ原の夜をさまよひ歩き黒血川のほとりで、一つの側體を見出し、それを米友に洗はせる、ふと、その向ふに幽魂のやうな人影がある。米友もお銀様もそれに驚いて、眼をみはつたが、それは龍之助であつた。お銀様はよろこび、龍之助は呆れる。關山月の尺八の音がする。それを慕うてお銀様と龍之助は、不破の關の方へ没入する。

不破の關屋の板庇の下で關守氏が關山月を吹いてゐる。そこへ龍之助とお銀様、米友がひとりりで引き寄せられ、爐を圍んでの物語りとなる。人生は不斷の旅である、旅もいゝが安心した落着きどころはないものか、といふことからお銀様は、自分は自分の力でほんとうに自由氣儘な領土を、この地上へつくつてみたいといふ理想を述べる。本來米友は女興行師のお角から、お銀様の行動を監視すべくたのまれて來たのだが、やゝもすればお銀様に誘惑されてその付添人として引張られようとするが、責任の重いことを考へやはり注意を怠らない。その晩米友は、肌の美しい若い女性の入浴ぶりをつい垣間みて、誰だらうと、いぶかつてゐるうちにその、蹂躪されたお銀様の顔を發見してアツとおどろく、お銀様はどういふ見か、米友の居ることに氣がつくとそれを呼び入れて、自分の背中を流さ

せながら、道庵先生の方を辭して自分の方へ来ないかといふので米友はうだる。

關ヶ原で辻斬にあつてゐた曲者は、同じ道中にある、清洲の銀杏加藤家の奥方の家から系圖を盗み去つた曲者である、岡崎藩の美少年は、この事を自分の責任であるやうに感じて、夫人がことに系圖を珍重してゐることについてその傷ける心を、癒やしてやらなければならぬと心がけてゐる。

道庵先生は、關ヶ原で雲助を狩り集めて、大模倣戦をやつて、自分が主將氣取りでをさまるといふ、前ぶれの宣傳がきゝすぎて土地の大人氣となり、その費用の支出でどうにもかうにもならず九死一生の苦しいおもひをする。何しろ江戸で有名な金持のお醫者さんが道樂でやることだから金銭に糸目をつけたいといふ噂が立つてしまつた。

そこで米友の入智恵でさういふことは此宿に來合せてゐるお角にたのめばお手のものだと、云はれ、お角親方を通じて、お銀様の金百兩を借りうけて、めざましい戦争ゴッコをはじめ。關ヶ原の模倣戦が慶長以來といつたやうな大人氣となる、それを見物するもの雲霞のごとき中に南條、五十嵐等の豪傑もゐるし、紙屑買ひののろまの清次の如きは、さつそくその戦況を瓦版におこして呼び賣りをして大儲けをする。金茶金十郎、安直の連中は、道庵大御所が、傍若無人に振舞ふといふので、齒がみをなしていきどほる。

辨信にもなはれて、關ヶ原までみちびかれて來たお雪ちゃんは、黒血川で米友に洗ひすてられた軀體を發見し、それを辨信が供養する。この二人もまた、關山月で不破の關屋

の板庇の方へ引よせられる。

神尾主膳は、書道に凝つて淺草馬道の本屋へ、堀出物をさがしに出かける。そこで良寛や鶴齋を神尾がのゝしる、そこへ百姓一揆が縛られてくる、神尾が百姓を増長させるのが怪しからぬとて怒る、御安直節だの、相馬の金さんだのが出てくる。家へかへつて、お絹から西洋の酒を振舞はれると神尾はいゝ氣になつて、一つらしやめんを買つて、楽しんでみたいといふやうなことを云ふ。それから今日買つてきた、支那の拓本を披いてみると、楮逢良だの額師古だのが出てきたので、神尾は驚歎する。

不破の關屋の關守の家で、關守と龍之助とが、白晝會話をしてゐる。

龍之助が、尺八を吹く、關守は鈴墓の曲ほど罪な曲はないといつて自分の身の上ばなしのロマンスをはじめ。

不破の關屋の板庇へ近づいて來た、辨信とお雪ちゃん。ふとその尺八の音を耳にとゞめた辨信は、行かうとするお雪ちゃんをさへぎつて、あれは、殺氣を帯びた音色であつて、正しい鈴墓ではない、あれに近寄るは危険だからわたしが一足さきに行つて様子を見てくるとお雪ちゃんを引とめて置いて、先きに行つてみる。お雪ちゃんの待つてゐたところは常盤御前の墓のある御堂であつた、そこへ覆面したお銀様が來てまだ知らぬお雪ちゃんに向つて常盤御前のことをたづねたり論じたりしてゐるところへ、米友が來て、お銀様を連れて行く、そのあとへ南條、五十嵐等が來てお雪ちゃんに物をたづねたりする。お雪ちゃ

んは、これらの人と一緒に不破の關屋の方へ行つたが誰も居ないで、さい前の怪漢米友が荷物を運んでゐる。そのあとへ藪の中からさき程の婦人、すなはちお銀様が出てくる、やがて辨信が出て来て關守氏に話かける、そこへ又お銀様が出てきて辨信と、暫くぶりの對面である。

その夜お雪ちゃん、辨信、れいの怪婦人お銀様等が爐を圍んだが、その時お雪ちゃんが爐中の火の中に一管の尺八がもえてゐることもみとめる、また怪婦人が室内にゐてもけつして覆面をとらぬことに不審と不快をかんじる。

こゝで關守氏が、土地を買取つた證書をお銀様に提出する。これは昨夜の話がきつかけとなつて、新に領土を買求め、そこへお銀様が自分の理想王國を打建てようとする計畫がずん／＼進んでその領土買取の手付金の領收書であつた。

龍之助と宇治山田の米友が、和佐見ヶ原の中を歩いて行く、その途中米友が「おいらなんぞは、ひとりぼつちで生きてるにやあ、生きてゐるけど、何のために生きてゐるのだから、さつぱりわからねえ、それを考へるとおいらは、もうお前をお城あとまで送り届けるのも厭になつた、行くのも厭だから歸るのはなほ厭だ、おいらをこゝでバツサリやつてくんなえか」

と啖呵を切つて地團太を踏む。

不破の關の巻終り

(第十二册)

第三十四 白雲の巻

白河の關で、駒井甚三郎に宛て、手紙を書いた田山白雲は、それから仙臺へ行つて松島の觀瀾亭で、狩野永徳の壁畫を見ようとする。福島でまた伊達家には有名な、王義之の眞筆があり仙臺には高橋玉蕉といふ女詩人ある事を紹介される。

途中笠島の道祖神といふのへ詣でると其處に清澄の茂太郎納めの繪馬があり七兵衛の名もしてあるので、不審に堪へない、それから名取川で蛇籠を編んで身をくらしめてゐる七兵衛に呼びかけられて船の消息を聞かされる、高橋玉蕉女史に會つてみると閨秀詩人である上に美人であることに驚かされる、そこで玉蕉女史の口から伊達家の王義之の出處、細川家とのいきさつを、きかされる。

白雲が玉蕉女史のところへ、一泊してゐると、夜中に七兵衛がこつそり忍び込んできて白雲を驚かし、船の動靜をつげ、これから石の巻の田代屋といふのへお越しをねがひたいといふことをいふ、それから伊達家の王義之が、たうてい誰にも見られないものだといふことを立聞したが、一つ私が持つて来てお眼にかけませうといつていよ／＼白雲を烟に巻

胸井甚三郎の無名丸はいよ／＼無事に、男鹿半島の月ノ浦に着いたが、船の中の異種異様な人の感情の暗流はやはりけはしい。マドロスがつひに、兵部の娘をそのかして出奔してしまふ。

ほどなく田山白雲が、こゝへやつて来て胸井との奇遇を談じ、伊達政宗の事などを論ずる。白雲より先に来なければならぬところの七兵衛が来ないので、茂太郎はじめ大いに心配する。

七兵衛は觀瀾亭即ち月見御殿の床下で盗人の晝寝をしてゐる、それを弓を稽古する人のために発見され盗み出して来た伊達家の寶物を置去りして逃げ出す、七兵衛は玉蕉女史と白雲の會話を立聞きして門外不出といふ主義之の眞筆を盗み出すべく、青葉城へ忍び込んで相當目的を遂げたのだが、遂に此處でおもはぬ不覺をとつて船へ歸れなくなつた。

胸井甚三郎は、松島の瑞巖寺へ来て泊つてゐる、夜中に七兵衛が忍んで来てそれとなく自分の身の危急を訴へて當分委を隠さねばならぬ事情を申し述べる。

仙臺家ではこの大膽不敵なる怪賊の行方を探さんがために奉行が自身出張し、その時獄中に囚はれてゐた奥羽切つての怪賊佛兵助といふものを起して、七兵衛をつき止めさせようとする、そこで兵助が引受けて七兵衛の追跡に出かける、田山白雲と茂太郎とムク犬とが、高橋玉蕉女史の招待によつて、松島の灣に觀月の宴を催す。

七兵衛は瑞巖寺の天井裏の俗に武者隠しの間といふところに隠れてゐたが、そこへお松が白雲と打合してこつそりと、食料を運ぶ、それを佛兵助が嗅ぎつけてつひに大捕物となつたが、際どいところで七兵衛が繩を抜けて逃げ出す。

田山白雲は、七兵衛の行方と、それからマドロス及び兵部の娘の行方の取押へ方を引受けて石の巻からまたも北方へ向つて旅立をする。比處で奥の細道の旅心が到るところ白雲の旅情を刺戟して北上川の畔に来ると、れいのマドロス即ち、うすのろの姿を胸井が借りてきた遠眼鏡で眺めたが、距離が遠くて及びがたい。

胸井甚三郎は船の中で密室の祈りをしてゐる支那少年金椎をみる、お松へイツツブ物語の物語をする。そのうちに此土地の漁師で漂流して初めて世界一周をして来た老人がやつてくる、マドロスに逃げられた船の運轉方の補充をこの人によつて見出さうとしたが、今年八十六だときいて、また失望に打たれる。

神尾主膳が異人館へこの頃は入浸りのやうになつてゐるお絹の事を、やきもきと考へ、自分も類廢した半生の懺悔録でも執筆しようといふ氣になる、ふと、戸棚の中へお絹のしまつておいた西洋酒を取り出して呑みだす。裸女の寫眞とガラス鏡が癢にさはつて叩きつける、それからフラ／＼と異人館へ乗込んで見ようといふ氣になる。

白雲の巻終り

第三十五 膽吹の巻

一一〇

宇治山田の米友が、膽吹山の麓で開墾してゐる。お雪ちゃんが来て柿をくれる。二人でお銀様の噂をする。

やがてお銀様の手代と馬とをつれてやつてくる。お雪ちゃんが隠れる、お銀様は米友に向つてこれから長濱まで、兩替に使をやるのだが米友に付添つて行つて貰ひたいとのむ、お銀様はその歸りがけに木樵が取つて来た鶯の子を見てそれを買つてやらうといふ。

お銀様は、この膽吹山の麓京極御殿のあとへ廣大な地所を買占めて自分たちの理想の王国をつくらうとする仕事の緒についたのだ。屋敷の一角の別館にあるお雪ちゃんが、お料理方の仕事をしながら、うつとりと琵琶湖のおもてを眺めてゐるとその中空に、大きな鶯がゐる。こちらへ向つて翼をのしつてくるのをみとめて、異様に感じてゐるところへお銀様がやつて来て、風景の話をしたりこれからお雪ちゃんにこの新しい事業の會計方を依頼したりする。お雪ちゃんは、そんな大役をと辭退したけれども結局引受けてしまふ。お雪ちゃんはこのお銀様といふお銀様が、なか／＼大腹中であること、又、大金を物の數ともしないことも、小さな出入りにもなか／＼計數がはつきりしてゐることに驚く。

そのうちにも、大きな鶯が近く頭上によつて来てこの里をおびやかす様な、いきほひをお雪ちゃんが見て氣にする。お銀様は、あゝこれは最前木樵がつかまへた小鶯の親が襲ひ

かゝつて来たのかと氣がつく。

お銀様が、行つてしまふと、あとへ辨信法師が人込んで来る、お雪ちゃんは、辨信に恨みつらみをいつてみたりするが辨信があまり取合はず、自分はこれから獨りで膽吹山へ行くといつてしやべりまくつて行つてしまふ。

辨信が歸ると間もなく天候が、にはかに變つて来たのでお雪ちゃんが山登りをする辨信の身の上が一層氣になつて、いくら身軽だからといつて、こんなときに一人で、山登りをするとお銀様も辨信さんだと咳やく。それが其夜の夢になつてれいの大鶯が出て来て辨信を引さらつて空高く飛ぶ、これを米友が、棒を飛ばして追ふ。そのうちに白衣の姿をして金剛杖をついたお銀様が出て来て無理やりにお雪ちゃんを山登りに誘ふ。その行程のうちで、奇怪な現象が現はれ、藥草が毒草となり、つひにおそろしき巖窟の中に引入られ、そこで鈴墓を吹いてゐる龍之助の幻をみる、お雪ちゃんと龍之助との間にお銀様が挟つて血みどろな貞操の問題が論ぜられたり、惨忍な人生の絶滅が論ぜられたり、理想の樂土が論ぜられたりする。

關ヶ原の模擬戦から一直線に近江路を京阪へのすべきはすの道庵が、膽吹山の藥草を目當てに道を枉げてしまつた、一つには、お銀様に貸してやつた米友を見舞ひがてらである、お角は先發して大津で待合せる事にする。金茶安直の一行は、道庵が膽吹へ道を枉げたと聞いて大根おろしを拵へてその征伐に走せ向ふ。

一一一

道庵は柏原の宿で、田舎芝居を見物するといふ氣持になつて、纏頭を出したりなんぞして納まり返へる。長濱の會所へ兩替の使ひの用心棒として出向いた米友は、高札場で百姓一味徒黨の高札を見て何となく民心のおだやかならざるを察し、湖水の方へ行つてみるとそこに釣を垂れてゐる異風な浪人者と物語りをし、長濱と大關秀吉と、石田三成等の話をきき、又、近頃檢地の役人の横暴なことを聞かせられ、何か又一味徒黨の暗示をうける。浪人者は小舟に乗つて何處へか隠れてしまふ。米友は町の方へ引かへしてみてやうやく兩替の馬を見つけ、それから石田三成の故郷である石田村といふのへ通りかゝるときかんな雨乞ひ踊りがある、使を忘れてそれを見物してゐるところへ又、東の方から土地の若い者が長持を擔いでやつて来る。この長持の中には村芝居で借りた衣裝類を長濱へかへしにゆくのが入つてゐるのだが、まぢがつて道庵先生がこの中へ入つていふ心持でぐつすり寢込んでゐるのを知らずに擔いで來たのだが、この一行も又、長持をおつ放り出して雨乞ひ踊りを見物してゐる。

そこへ例の老中差廻しの檢地の役人が乗込んできたので、一大事が持ち上つた。馬も追ひ立てられ長持も放りだされ殊にこの土地が徳川家に對しては、逆賊であるところの石田三成の出生地だときいて、村民が故意に上役人の道路妨害をしたものゝやうにとられて召捕られるものが多数できる。長持の中に寢込んでゐた道庵は、田の中へおつ放り出されてはじめて眼がさめ深田の中で七顛八倒する。

甲州の有野村でお銀様の拵へた悪女塚を取崩した與八は、そのあとへ、小屋を建てさしてもらひ悪女の女人像のかはり右の石像を裏がへしにし地藏尊の面影を刻みはじめ。與八の周圍へ子供達が一人二人それからさかんに集つてくる。與八はそれを教育する。與八の徳が村里のあひだに、やうやく擴まると、あれは木喰五行上人さまのお生れ變りだといふことに成る。

膽吹の巻終り

(第十三册)

第三十六 新月の巻

宇治山田の米友は、長濱の町から伊吹山へ運ぶ金銀家財を積みのせた駄馬に逃げられたのを追ひかけて姉川の古戦場に出て水騒動に出つくわすと、その水騒動を仲裁した浪人がある。飛驒の高山では藝者福松が、宇津木兵馬をしきりに誘惑する、そこへガンリキの百藏がこたわつて来る、福松は兵馬の詫住居へ押しかけて来て一しよに北國地方へ連れて逃げて呉れと云ふ、兵馬は誘惑と知りつゝ、白山詣の旅にのぼる、その途中福松はガンリキが代官の妾お蘭からせしめて來た大枚三百兩の金を兵馬に提供して、どうでもいふやうに

して呉れと云ふ、兵馬と福松の味な北國道中が初まると、その後から佛頂寺彌助と丸山勇仙とがまた通りかゝつて小鳥峠の上で二人は酒を飲み、松茸の土瓶蒸を食ひ、空虚な人生を語り合ひ、佛頂寺は腹を切つてしまふ、丸山勇仙も毒をあほいで二人は奇想天外な心中をとけてしまふ、通りかゝつた兵馬と福松がその屍骸におどろく。

伊吹の上平館の松の丸の座敷の爐邊で米友とお雪ちゃんの會話、やがて錢勘定が初まる不破の關守氏が来て琵琶湖畔で百姓一揆が起りさうだと云ふ、庭におどり出した米友が一人昂奮して棒を使つて室内に戻つて見ると眞暗い中に灯もつけず、只一人の人が爐邊で、青白い顔を剃刀で撫でて居るのを見た、之は關ヶ原以來の机龍之助である。米友はこゝでお雪ちゃんと龍之助の間を變に思ふ、龍之助が魔の如く伊吹の山から長濱の市中へフラリフラリと出て行く、その後を追はうとする米友がお銀様につかまつて不思議な壓迫を被むる。伊吹山中へ藥草取りに来て年甲斐もなく迷子になつた道庵先生がしきりに悲鳴を揚げて米友に助けられる、之が縁で道庵は伊吹御殿の一室へトグロを巻く。一方道庵上洛の防禦軍テーマ安直、三ビン、與太者、金茶連はしきりに軍議をこらし、通人よたとんを抜擢して道庵の向ふを張らせようとする。

セントエルモスの火に包まれ乍ら伊吹山を下つて琵琶の湖畔に出た龍之助、その間に加藤虎之助の母が幼けなき虎之助の手を引いて親戚なる長濱の城主木下藤吉郎の下へ預けに行く光景と、六波羅の祇王祇女が湖畔の故郷を訪ねる夢幻境がある、何に魅かれたのか氣

絶して失神状態におちいつたお雪ちゃんを發見した米友は、驚駭狼狽して道庵先生をたゞき起し、お雪ちゃんを道庵先生に托して置いて米友はセントエルモスの火を追つて長濱の町に走る。

道庵先生の手助けられたお雪ちゃんのところに、不破の關守氏が見舞に來る、そこへ道庵先生が寝ボケ眼であらはれて來る。

一方又伊吹山の山頂から飄々として下界へ下つて來た辨信法師、長濱の町へ流れ込んで無際限のおしやべりを發揮する、湖畔で米友と對面。

女興業師お角親方は道庵先生を待ち合せる間を利用して船で八景廻りの豪遊をする、フワツショイ連、テーマ、安直、金茶、與太者連がお角さん一行にイヤ味をしかける。

上平館の一室では、お雪ちゃんと道庵先生とがしきりに新らしがつた議論を試みて人間は生れた方が得か生れなかつた方が得かの問題を論議する。

その間にこゝの女王お銀様の覆面姿が動いて、新月の光を額に受けつゝこれもそゞろに歩いて伊吹を下つて長濱の町に向つて行く、フト墓地に入り込んで穴掘の男と問答する、この穴に埋められるものは果して何者か、穴の中から若い優男の聲がする、あわんぶくの物語に依つて、近いうちこの穴に埋めらるゝ不義の男女の身元が解る。

話が後へ戻つて、築地の異人館のホテルにのぼつた神尾主膳と取巻のビタ助、キザなたわ言をしやべりちらす、こゝの席上で公儀の用金、七萬兩の融通方を語る大藩のお留守居

役らしいのと、大商人の會話を聞いて神尾の心中がおだやかでない、そこへ持つて来て、お絹が洋装をして氣取つて現はれたので、神尾がムカ／＼する。
 甲州有野村なる奥八藝で子供を相手に、土橋お倉婆さんの手白猿の物語が初まる。
 お銀様の父伊太夫は持てる者の悩みを感じて居る、そこへ伊吹山のお銀様から財産請承の使者が来る、心をいらだゝせた伊太夫は急に思立つて上方見物の旅に出かける。

新月の巻終り

(第十四册)

第三十七 恐山の巻

この巻は、田山白雲がマドロスと兵部の娘の失踪と七兵衛を尋ねる事と書巻を満す事との目的を以つて北上する所から初まる、北上川の渡頭で柳田平治と云ふ居合の上手な奥州八の戸の一青年と廻り會ふ、此の青年を相手に白雲は兵部の娘とマドロスをさがし當てて之を柳田青年に護送させて仙臺灣に淀泊して居る駒井甚三郎の無名丸に届けさせる。
 道庵先生が伊吹山にハイキングを試みる、お雪ちゃんを連れて藥草あさりである。
 有野村を立つて微行で上方見物の途についた伊太夫主従、關ヶ原の宿へ来てガンリキの

百に附けられる、ガンリキの百は飛驒の高山の福松のもとへ預けて置いた三百兩の金は持ち逃げされてしまふし、關ヶ原で伊太夫の枕元からせしめた大漁は案外にも古瓦であつたので、淫婦のお蘭からさん／＼に油をしぼられる。

長濱の豊太閤の遺蹟として知られた大通寺の玄關の前の松の下に捨子がある、白衣の丑の刻詣りの女がある、飢ゑきつた野良犬が咆哮して居る、其の間へ覆面の兩刀幽魂が竹の杖を持つて現はれると飢ゑたる千疋犬が群がりかゝつてあたりが血の海となる。

その翌朝同じく覆面のお銀様が大通寺へ、山樂の壁畫を見に来る、お銀様はあの名壁畫が無造作に取りあつかつてあるのを残念がつて、それを買取りたいと伊吹山の留守師團長なる不破の關守氏に報告する、其の夜、加藤清正の家敷跡だと云ふ濱屋に、お銀様と龍之助との會話がある、そこへガンリキの百が侵入して来て強がりと嫌味とねだりと三巴のやりとりがある、百はお銀様の父伊太夫から盗んで来た脇差をお銀様に賣りつけようとする結局龍之助の爲に又しても左の手の小指を切つて落される。

伊太夫出立の後で奥八が一つの社會事業として浴場を公開する、そこへ、富士講のお婆さんが来て、二宮金次郎や鳩ヶ谷三志の事を説く、このお婆さんは信州飯田の松下千代女である、之等の人達が徳大寺様と共に甲州の勤王家山縣大貳の墓を尋ねる。

神尾主膳がビタ助を相手に武術の會話などする、異人館へ乗り込んでラシャメンに似た振舞をするお絹について、ビタがしきりに辯明をする、それから神尾をそゝのかして悪食

會に出動する、その途中千住街道で神尾が罪もなき百姓を斬つて争動を起す、ビタは悪食會の玄關へかけ込んで目を廻してしまふ、一時の昂奮から罪も無い百姓を斬つた神尾主膳は千住の小塚ヶ原へ迷ひ込む。

飛驒の國小島峠の上で佛頂寺と丸山の屍骸を取かたづけた宇津木兵馬は藝者の福松と共に白山詣の山又山の道行である、福松からはしきりなしの誘惑、佛頂寺、丸山の亡霊は絶えず後を追ひかける。

宇治山田の米友が辨信法師を小舟に乗せて琵琶の湖上へと漕ぎ出す、竹生島へ琵琶を奉納の爲にと乗り出したのが、米友が一瞬の氣迷ひから竹生島とは別な多景島へ舟をつけてしまふ、辨信は之も何かの有縁であらうと、多景島へ一人住居をする事に極める。

牡鹿半島の月の浦に淀泊中の駒井甚三郎の無名丸の帆柱の上では清澄の茂太郎が大いに歌ふ、そこへ柳田平治に守られた駈落者のマドロスと兵部の娘が戻つて来たので、船員が激昂する、それをお松がなだめる、田山白雲に頼まれて二人を護送して来た柳田平治は、船長の駒井に會つて見たがそのハイカラ振りが氣に入らない、おれは田山白雲先生は好きだが、この船長は好きになれないと船室へこもつてしまふ。

奥羽の平原に迷ひ込んだ七兵衛怪速力で縦横に歩き廻るけれど地理がよくわからぬ、そこへ鬼が出てしきりに人を食ひちらすと云ふ評判、この邊の所謂鬼は狼の事であつた、狼の出没の外に饑饉で死骸が累々として居る、その間を七兵衛が逃げると仙臺の佛兵助が追

終